
目指すは最強の《大魔王》

健康一番

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

目指すは最強の《大魔王》

【Nコード】

N6475R

【作者名】

健康一番

【あらすじ】

トラック 衝突 羽の付いたヒトの前という流れでありきたりな転生のスタートラインに立った主人公、しかしチートキャラに転生出来たものの先行きが微妙に暗い。主人公は無事最後まで生き残れるのか？

初投稿で不慣れですが、頑張つて逝きたいとおもいます。携帯からの投稿ですので変なところで切れたりするかもしれませんがご容赦下さい。

唐突なスタート

トラック 衝突 羽の付いたヒト？の前 【今ココ！】。

と、言うわけで目の前の転生係りのヒト？の前で説明を受けているところです。なんかもう自分が転生トラックにひかれたとか、漫画の世界に転生とか色々聞いてすでにパニックなんですけど、取りあえず確認のためもう一度聞いてみる。

「ダイの大冒険ですか」

「ええ、その通り」

「…マジでバーン様に転生ですか？」

「間違いなく」

マジかよ…いや好きな方だしチートキャラではあるんだけどダイとか勝てる気がしないんだが…。

「地上侵略しないと出来ませんか？」

「すみません、そこを抜いてしまうと世界が崩壊する可能性が凄くて最悪あなたを抹消し、こちらから地上侵略の出来る方を派遣し直す形になってしまいます。その場合、言いくいんですがあなたの魂も抹消になります」

…地上侵略する ダイのパーティーにSATUGAIされる。

地上侵略しない 世界が滅びるか俺が消滅…。

「さらに付け加えるなら」

「ま、まだあるんですか!？」

「あなた以外にも転生する方々がおられます、既に全員が転生先が決まりあとはあと一名というところでああなたが最後の一名に決まりました」

転生者はこのヒトが受け付けただけで《ダイの双子の竜の騎士》

《バルンに国ごとぶっ飛ばされたアルキード国王》 《ずるぼん》と

明らかにムリゲー、まあ一名除くが。しかも転生者は全員原作知識持ちらしいのでバルンは魔王軍には来ないだろう。さ、さらに難易

度が上がつとりますがな！！勝てるか！こんなん！！

「せ、せめて何かオプシオンを！なにもなしじゃどうしようも無い
ですよ！！？」

「仕方ないですねえ、じゃあ地上は吹っ飛ばせなくとも全力を尽く
した上での敗北なら魔界に逃げ帰っても良しとしましょう。さらに
材料を入れればアイテムや配下のモンスターを作成出来る合成マッ
スイーンを差し上げましょう。ただ自分より強いモンスターは作れ
ませんのであしからず」

「もう一声（マツスイーン？）！」

「これ以上はデメリットが付きますよ？しかもデメリットは転生し
ないとどんなものかも分かりません、それでもよろしければどうぞ」

よし！デメリット付きでもオプシオンはありがたい、生き残れる
ために何か…そうだ！

「カリスマください、FateでいえばEXくらい。あとさらに高
い魔力と全ドラクエシリーズの魔法全部を契約済みで、そして不老
でスタートからメチャクチャ昔の時代からお願いします」

「あなたは結構欲張りですね、しかし分かりました。ではデメリッ
トは転生後マツスイーンにメモを貼り付けて置きますので、あとは
現地で覚えて下さい。」

その後俺は転生ゲートとやらに連れて行かれ、そのゲートを潜り
抜けた、視界いっぱい光が広がって…。

そして気づけば暗い大地の上に一人で立ち、隣には掘っ建て小屋
が一軒あるだけでスタートした。

小屋の中には合成マツスイーンと机と布団が一つずつ、布団かよ
と思いつながらふと窓を見るとそこに写っていた自分の姿に思わず愕
然としてしまった。ぶにぶにで低い身長、どこかで見たとある
ブラウスとスカート、腰に瓢箪、頭から伸びた角の先にはリボン。

「転生係りのヒト間違ってる…！？」

どうしてこうなった？

デメリットとオマケ

あ…ありのまま今起こった事を話すぜ！「おれはバーン様に転生し魔界に降り立ったと思っただらいつの間にか東方の伊吹萃香になっていた」な…何を言っているのか（ry

why!？何故に!？そうだ、メモがマツスイーンに…。

「このメモを見てると言うことは無事転生されたようでおめでとう御座います。」

ここじゃない！デメリットだ、デメリット。

「このような姿になってしまい大変驚きのことと思いますが、まずはデメリットをご覧ください」
なになに。

- ・魔力増加に伴いパワータイプである男性体から女性体への変更。
- ・それに伴い体力、筋力などの低下。
- ・転生時間を一万年遡らせ、年齢を固定したため外見が若くなり、さらにそのまま固定化。
- ・横向き二本角＋一致しない外見と中身の年齢＋うわよう、よつよい、伊吹萃香なのでオマケで筋力、耐久などに上昇補正＋密と疎を操る程度の能力を追加。

- ・よう、よなのにかリスマに溢れまくった結果この気持ち！まさしく愛だ！！ときに魔界全土でかかって来いよ！アグネス！になる可能性が発生。

「つまりあなたは最高権力者にならなければ、見つかったが最後、速攻でかつさらわれて永遠に愛でられ続け消滅してしまうでしょう。我々としても寝覚めが悪いので是非強くなってください」

この瞬間、俺の…いいや《余》の最初の目標が決まった。すなわち強くなり【YESロリ タノタッチ】を魔界全土に広めることだ。

余は最初の関門のあまりの大きさに絶望を感じながらも手勢を造

るため合成マツスイ〜ンに向かうのだった…。

最初の配下を造るため（前書き）

感想やお気に入り登録などありがとうございます。これを励みに最後まで頑張ります！

最初の配下を造るため

さて、これより初めてこのマツスイーンを使ってみるわけだが、えゝ取説によると作りたいたいものを考えると、自動的に必要な材料がモニターに表示されるとのことだ。作ったものが生物ならばその後、成長に応じて進化させることも同じ手順で可能とのこと。すでに最初に作る魔物は決めている、ものすごい長い人生の最初のパートナ―だ、高い忠誠心とバランスの取れた能力、回復から攻撃まで使える万能派。

「スライムナイト！君に決めた！」

そして表示された材料は

- ・ゲル状のもの
- ・騎士の装備一式
- ・むしる騎士一式

……いやいやいやゲル状のものってなんだよ、騎士一式ってもしかして中身込みって事か？そんなもんどこに落ちてんだよ……うわ、一気にやる気が減ったんだけど。

その後騎士の装備が作れるか確認してみるが「まだ作成出来る文明になっていません！」とのこと。つまり今作れる魔物を進化させただで文明まで作らないとムリっばい。仕方ないので今の状況で作成でき、文明が作れる魔物を確認すると、

- ・山賊ウルフ
- ・オーク
- ・トロール

の三種類くらいなものだ。それぞれ狼＋服＋片手の斬れる武器、猪＋服＋槍系武器、熊＋腰巻き＋鈍器が必要らしい。

…究極の選択が多すぎる気がする、簡単そうなオークは簡単で進化の先行きもオークキングなどがいて安心だが、ファンタジーエロゲの重鎮、トロールは作るのが多少面倒だがボストロール、トロール

キングなどボスキャラまでこなせるが以下同文、となると海賊になるくらいしかないがウルフで妥協するしか無いだろう。リスクは最小限にするべきだ。

食料、水、シャンプーなど生活用品はノーコストで作れるみたいなので、色々精神的に疲れたので風呂に入って飯食って寝よう…あ、風呂は材料が必要だったことを伝えておこう。

…明日はどれくらい戦えるかとか武器の材料とかを探さないとなあ…。

大魔王様Lv1

朝 - 太陽が無いので暗いから何ともいえないが - 目が覚めた。布団の下が岩肌でちょっと痛かったがそれなりに眠れた、地熱なのか太陽が無くかなりの極寒地帯と予想していたがそれなりにあったかい。これなら少なくとも今の季節は寝袋があれば過ごせそうだ、一年の気候がわからないのもふあんである。

さて、山賊ウルフの素材であるが、片手武器は短い石の槍でいいだろう。石槍は簡単に合成できた、石は黒曜石などでなくてもよかつたのは幸運だった。木の部分は能力を使って集めてみた、確か神社の掃除などでも萃めていたのを思い出したのである。能力の使用はいわゆるHBの鉛筆をベキツとへし折る事と同じように出来て当たり前と思つてやったら案外簡単に出来た。テンションがウナギ登りで不思議な踊りが踊れそうなくらい最っ高にハイって奴になった、この調子で鍛えていこう。

お次は身体を使った運動だ、近くの枯れ木に手刀を叩き込む、：！それなりに大きい木だったためか手が途中で挟まった。焦りながらしばらく格闘していたが、手の部分を散らすことを思いつき大事にはいたらなかった。まあアレな結果だが攻撃力は高そうだし、木に挟まれても痛くなかったので体も丈夫そうだ。次はいよいよ魔法である。

大魔王様Lv1 その2

魔法、それは大魔王バーン様を構成する大きな要因の一つである。彼の大魔力はメラゾーマをメラで押し返し、イオラを連発し、極めつけは彼のメラゾーマたるカイザーフェニックスである。最もカイザーフェニックスは最終盤では決め技にはならなかったが。そんな魔法の実践である、初能力使用もあわせかなり舞い上がっている。「やはり最初はメラだよな、基本は押さえておこう」

ターゲットはさっきの枯れ木、手刀で折れかけている部分を狙ってみる。

「メラ！」

しかし呪文は虚しく響くだけだった。

やはりまずは魔力を感じるところから始めないといけないだろう。しかしまあ正直急ぐことはない、なにせ時間は一万年+原作当時のバーン様の年齢とゆう途方もない時間があるのだ。戦力を作ったりしたりするにも余裕すぎるのだ。

「しっかさつきから歩いたり走ったりするのになんか違和感が……ハッま、まさか」

ステップ1 立ち上がる。

ステップ2 両手を上げる。

ステップ3 走る

こ、これは……！なじむ……！実になじむぞ……！！最高に……おつと、少しテンション上げすぎたようだ、反省。同じネタを連続で使うわけにはいかない、余はDIO様ではなくバーン様なのだ。

しばらく時間がたつと少し恥ずかしくなってきたが誰にも見られて無いので良しとする。まあしばらくすればなれるだろう、ひとは慣れる生物だ。

そういえば萃香といえは何時も酔っ払っていたはずだ、余の腰にも伊吹瓢が揺れている。丁度喉が乾いた頃なので一口飲んでみるか。

瓢箪の栓を抜くとかなりキツイ香りがあたりに漂う、その芳香に釣られ思わず一口飲んでみるが。

「……………うますぎる！」

度数はかなりキツイが香り、旨味、のどごし全てが余の好みだ、ついつい二口三口と酒が進みついにいくらひっくり返しても酒が出なくなってしまった。確か水を入れればまた酒が出るんだっけか？

「ん、あの森に小川あるかな？」

この頃になるとすっかり出来上がってしまい少し記憶があやふやになっちゃってしまっていて、次に気づいた時には頭のへこんだクマー…オウルベアかな？がいた。そして周りには腹をこちらに向けて降参のポーズをする狼の群が…。ナニがあっただらうか？

はじめてのぶか

なんだかわからないが狼達は完全に屈服しているようだ、大抵予想できる、まあ森に入る　クマーに襲われる狼達を発見　クマー瞬殺　圧倒的な溢れるカリスマ（EX）発動　狼降伏：くらいなもんだろう、パターンてきに考えて。…あ、でかい足跡があるのでミッシングパワーも使ったみたいだ。

しかしこれはどう考えても好都合、ご都合主義万歳だ。だが冷静に考えてみるとマジでなんかの修正力の可能性がある、やはり余がバーンだからか？勇者ダイに敗北するまでが、誰かのシナリオにそつておおぎっぱに決まっているのだろうか。…いや、今は考えても仕方がないか、今は先ず出来ることを一つずつこなし実力と戦力をととのえるのだ、圧倒的な戦力でどんなシナリオでも叩き潰せるように。

狼達は大人から子供まで全部合わせて32頭、結構所ではなく大きい群れだ、ついてくるようにある程度知能も高いようなのでついてくるように一番大きい狼に指示を出すと素直についてきた。

合成機以外に食料の確保する手段の無い現状でいきなり大人数抱えて、もしも合成機の食料生産にコストが付いたので、仲良く餓死しましたとかしゃれにならない。後の狼達はひとまずここで残ってもらい、このクマで食いつないで貰おう。後は食料になりそうな生物を萃めてそれを狩れば狼達が食いつなくことは十分かのうだろう。その場から一番大きな狼と小屋に戻る間も頭の中はグルグル回る、余のホ口酔い頭脳が唸りを上げている。このくらい酔っている方が矢張り調子も良さそうだ。

空気中の水分を瓢箪に萃め、出来た分からお酒を舐めながらさらに思考は加速する、先ずはこの狼の名前だ、いつまでも名無しで通す訳にはいかないので今考えてる。

「ぶむ、ちとすまぬな」

そう一声かけて腹をこちらに向けて持ち上げる、強烈な獣臭がするが気にしない。

「女の子か、女の子で狼といえば」

うーん、ホロ：アマテラス：いかん名前負けし過ぎとる、もつと忠誠心がありそうなのは無いものか。

「大尉：じゃあオスだしなあ」

仕方がない、毛が灰色で額に宝石なんかもついていないが何も考えつかないので忠誠心優先な名前を彼女に贈ることにする。

「よし、お前の名は今からアルフだ、余の最初の家臣として存分に励むがよい」

アルフはまるでその意味を理解したかのように遠吠えで返してきた、あれ？案外賢い？もしかしてホロの名でも良かった？などをつらつら考えていると小屋が見えてきた、正直迷ってないか不安だったがなんとかなった。大魔王たるもの部下の前で慌てたり醜態を見せたりしてはならないのである。

小屋の中には相変わらず合成機と布団が一つずつ、まあ焦らなくても今日は一つの布団で寝ればいいのだ。そんなことを考えつつ服と武器を合成機に入れアルフを促し入ってもらう、さすがに怖いらしく耳が伏せてるのが可愛い。しかもう一度、こんどは強気で言っつてようやく準備完了とゆうところで画面に新しい文字がでている。「言語の才に魅力の才、さらに戦闘力成長補正に奉仕種族設定をしますか？と来たか」

材料は割増だがやるべきである、奉仕種族は忠誠心が上がり、さらに文明の進化が速くなるらしい、間違い無く設定しなければならぬ。余は誰も見ていないため手を広げながら外に行き、石槍や服などを作り上げ合成機に放り込んだ。

やがて合成機により作成されたモノがまばゆい光を後光とともに「人影」が出てきた。

「獣魔族ウルフの族長アルフと申します、コンゴトモヨロシク……」
出てきたのは立派な耳とふさふさの尻尾、そう、何故かわからな

いが出てきたのは立派な犬耳めいどだった…どうしてこうなった。

それから10年

アルフが犬耳メイドで生まれてきたのは驚いたが、多分余が幼女バーンではなく萃香になってしまったのと変わらぬ理由だろう。

すなわち山賊ウルフ+奉仕種族+萌〓犬耳メイド、みたいな感じ
で。

萃香になったときに薄々気づいていたが、転生係りやこの合成機はかなりフアジーな融通性がある。後で取説はじっくり読まなければならぬ。

さて、それからの話だが、まずは食料を自力で生産出来る能力を獲得する事を優先させた。

その辺の植物をコストにして様々な食べ物を作り出し、それらをアルフの犠せ：献身的な自己犠牲精神に支えられ食べてもらい、何か異常がないか確認しながら（異常がでたら異常な部分を外に萃めた）魔界でも生産していけるように合成していった。名前が魔界小麦などかなり安直なのはいかなものか。

最低限の食料を生産出来ていると判断出来るまで3年半、その間にさらに狼達が増えていたので狩りで維持するのは大変だったがアルフや狼達とのコンビネーションにて美味しく（経験値的にも）頂き、なんとか群れを全員ウルフ族に進化させることができた。

その間も平行して鉱物資源を探し、怪しい石を片っ端から合成機にいれ、何種類かの鉱石とその鉱床を発見していたが、流石に一人で採掘まで出来はしないと考えていたがこれは2ヶ月位したとき毎日の修行中に、萃香 は分裂もできたって思い出し、頑張ったらできた。

これにより食料関連のあれこれと資源探し、修行と並行して作業が出来るようになったのは大きなプラスだった。取れた鉱石は合成機により先ずは農具に変えていった。そのうち鉱夫や鍛冶士も育成していく予定であるが：一段落したらドワーフ族でも合成してやる

うかと考えているので今は保留中だ。

人手が増えたので、魔界小麦畑や魔界田んぼ（水源確保が一番大変だった）も増やせたが、魔界牧草を合成したことで、食肉要の魔界牛（非ミノタウロス）や魔界豚（非オーク）、服の材料にもなる魔界羊（魔法使用可）なども作れ食糧事情は改善していった。今は瓢箪からしかお酒を造れないがいま必ずや造る、これは確定事項であり優先順位は高い。酒は命の水なのだ。なお人口増加が早くないかと疑問が在るかも知れないがその理由は下に残しておく。

修行に関しては先程も上げた能力の応用と格闘、そして最初に使えなかった魔法である。格闘についてだが、最初はアルフと組み手をしていたが、はつきり言って地力に差が有りすぎ、またアルフがフエイントなどをあまりしないのもあり、上手くいかなかったので地力上げと闘気法の習得に費やした。

その努力が実り、何でもたたく切るとまでは行かないが、大岩位ならばまるで熱したナイフでバターを切るようなキレ味を發揮できた。余はさらにこれをアバストラッシュAみたいに遠距離まで飛ばせないかと研究中である。

残念ながらフェニックスウィングはまだまだいまいちだ。何度か狩りの時にも使ってみているがまだまだロマサガのパーティ位の使い勝手である。魔法を使ってくる野生動物も多いのでこれからもHxH流感謝の手刀は毎日続けていこう。

魔法は最初に出なかつたため若干不安もあつたが2日目にはメラ等の初級魔法、5日目にはメラミ等中級魔法、一年もたてば大抵の魔法が使用可能までになった。ただマダンテやメドロア、合体魔法や異魔神の超高密度魔法言語などは10年たつた今でもなおつかえそうにない。

これらの魔法は決め技やバーン様に足りなかつた大規模な殲滅の可能な魔法なので、必ずおぼえてやる。

最後に一番不安だったカリスマ大暴走についてだが、ウルフ族に關しては全く心配する必要が無いと狼達が全てウルフ族になつた年

の発情期にわかった。

彼らの群れは1頭の雄（ウルフ化したら犬耳男だった）と3〜5頭ほどの雌の家族が複数まとまり、そこでもっとも強い雌がリーダーとなるらしい。

その結果女尊男卑気味な本能が形成されているのだ。

この家族構成と一度の出産で双子がかなりの確率で生まれてくるのだ、嫌でもって人口が増えまくるのは必然だった。

発情期以外では、確かに忠誠心が鼻から出てしまう奴もいた（男女問わず）がそれだけであり、余が身の危険を感じるはずの発情期の男共は、余が思わず心配して栄養ドリンクを合成してしまうほど、その…何というか…、そう！搾り取られてひどくやつれているのが通常となっており、まだ相手のいない男は戦々恐々としていた。

ちなみに魔界山羊をベースに悪魔神官を男女組みで多く作った。

これはあまりの出産の多さに出産シーズンには余一人ではまったく手が足りなかったからである。

福次としてウルフ族では少し足りなかった内政系を任せることが出来た。

カリスマ効果も余を創造神としての狂信者として発揮されたため、身体の心配はしなくていいが、その他の不安が少しあるのだった。

そんなこんなで戦士たちを育成し、辺りを探索し、新たな発見やトラブルを起こしながら10年くらいたった頃、いつかはあると予想していたが少し早すぎる事、魔界を生き、自分達の勢力を広げるための避けては通れぬ道、そう、敵対的な異文明種族との接触である。

番外編 10年後の現状と合成マスイーンに出来ること(3/21 少し追加)

一万年以上とゆう準備期間なため、動きが特に無かった時間は一気に飛ばしていきます。具体的な数字は出せませんが、ある程度の現状を出していきます。

バーン村(仮名)の現状。

人口: だいたい200人ほど、ウルフ族180人くらいと悪魔神官20人くらい。

子供の比率がかなり多く、大人達は食糧調達に必死である。子供達が成人していけば一段落つく予定だったが、毎年爆発的に人口増加し続けているため食糧増産は必須。

装備: 3人に分裂しているバーンが一人は付きっきりで鉱石を掘り出したり、合成機無しでの武器作成をしている。

鉄製武器と魔界羊毛の服が今の装備である。

食糧: 現在かなり増産を進めている、しかし予定以上の消費量に常に赤字寸前である。

合成マスイーンについて: 通称合成機、基本的に材料さえあれば大抵の物を生物、無生物問わず作成可能。合成方法はレシピ合成とフアジー合成の二種類、そして進化と妄想コンボがある。

レシピ合成: 合成機に登録されているレシピが、バーンの合成したい物にあわせて表示され、その材料を入れると合成され、その際に更に資源を消費して強化も可能。作成上限はないが文明が一定水準に達していないと作れないものや、バーンの実力以上の魔物は作れない。

フアジー合成: その名のごとくフアジーな合成。

使い方は、アバウトにこの材料を使って何か出来ないかなと適当に放り込んだ所からスタート。もしその材料で作れる物があれば合成が始まる。出来上がるまでは何が出来るか表示もされず、キ

ヤンセルも効かないが文明やバーンの実力によるロツクはなく、こちらも資源追加で強化可能。

ただ作れる物は一つ限りの物が多くバーンの実力が足りないと、作った魔物に襲われる可能性もある。

進化：合成機に材料を入れることで個人、もしくは種族全体の上位種へのアップグレードが可能。

文明が一定水準に発展したと合成機が判断した際に表示され、必要に応じた資源を投入すればいい。個人の方が安いが種族全体のほうが二割程お得。

小屋について 小屋はバーンの安全なスペースであり、不埒な侵入者は何をしてもし決して入れない。

合成機に資源を入れると家具や作業場を作ったり増設も可能。種族と違い、文明が一定水準に達すると自動的にアップグレードされる。

妄想コンボについて：たまに本文中にも出ているバーン様＋幼女＋…といった妄想でつながる連想である。

基本的に能力を追加したり、容姿し変更が掛かったりする。フアジー合成はこの機能の拡大解釈で動いている。レシピ合成の時も強化や材料で発動することもある。

敵対者との遭遇と対応

その知らせは唐突だった。

探索に出ていたチームが息を切らせて駆け込んできたのだ。

その時余の一人が小屋の中で新しい食べ物を合成出来ないか試していた。

「何事か！バーン様の御前であるぞ！」

悪魔神官の誰何の声と共に振り返ると、傷だらけのウルフ族の少女が倒れ込んで来たのだ。

正直余はこの時事態を把握していなかったし、探索チームが何か事故にでもあったのかと思っていた。

だからまだ余裕があったので少女にベホマをかけ、何が起こったかを確認して対処すればよいと思っていた。

しかし回復した少女の放った一言は室内に衝撃を与えた。すなわち「いきなり知らない奴に攻撃された」である。

この時の余の内心は衝撃4割に来るべき物が来たというものが4割、そして余の大事な、娘のような者達へ攻撃を仕掛けた者への怒りが2割であった。

彼女が言うには東に一週間ごろの所にある山の反対側の麓に村があったので、一旦帰って余に報告をするか、この村を訪れてみるかを検討している所に襲撃された。自分は持っていたカメラの翼でかろうじて逃げたが、他の者はどうなったかは解らない。とこのことであった。

余は迷った。先に攻撃を受けたのは確かにこちらだが、テリトリーに先に侵入したのは間違いなくこちらである。非がどちらにあるかは微妙なラインだ。

しばし考えた結果、余はこちらが先にテリトリーに侵入したせいで起こった事件と判断し、謝罪としてある程度の貢ぎ物を渡し、彼らとの和解を使用したと思った。

ウルフ族は家族構成の所為か男女比率は4対1くらいで女子の出生率が高く、このチームも女子で構成されていたため、捕まっている可能性が高かったし、もし殺されていたとしてもまだ余り時間が立っていない今ならばザオリクで蘇生が可能だと判断したのだ。

10分で支度を終え、非礼をして相手の態度を硬化するわけにもいかず酒精を自分の外に萃め、集まった宝石などを布で包みそれをも背負う。そして余しかこの魔法を使えないので余だけで半ば敵地とも思える探索チームの所に、リリルーラで移動したのだ。

そこでみた物は余が考えていた中で最も悪い物であった。

余の…余の大事な娘達が！三メートル近い巨人達になぶられていたのだツツツ！！！！

先に述べていたように余はこうなる可能性は高いと思っていたし、覚悟もしていたつもりだった。しかし、頭の中が怒り一色に塗り潰されていくのをどこか冷静に捉えていた。

だが…だが…！だが！！余は小規模とは言え村を守るリーダーなのだ。こやつらがどれだけのいるかも解らない現状でもし戦になれば、村の全員が殺されたりするかもしれない。広がる怒りの意志を理性で押さえ、娘達を辱めている巨人達に話しかける。

「もし、そこの方、此度は我が村の者があなた方の土地に勝手に入り込み申し訳御座いませでした。なにとぞお怒りを御鎮め下さいませ」

いきなりの余の声に少し驚いた巨人達ではあったが小さい余の姿とへりくだった態度で、完全にこちらを見下しているのが解った。

巨人達が油断している間に、娘達の耳元に小さい分身を作り、彼女達にラリホーをかけて眠らせる。これ以上彼女達につらい思いはさせたくなかったのだ。

「お詫びの品をお持ちしております、何卒あなた様方の長にお引き合わせをお願いいたします」

「良かるう、小さきものよ。我らの長に合わせよう。しかしこいつらはすでに我等が持ち物だ、こいつらが今後どうなるかは長の意志

次第だ」

この巨人達のなかでも一際巨体を持つ者が何も反応しなくなった娘を放り出し余に告げた。そのまま背を向け歩いて行く彼の背中を、余は反応しなくなっても娘達に群がり続ける巨人達を横目に、ついて行くのであった。

転生者と不安（前書き）

！！！！注意！！！！　今回はかなり不快な表現、下品な表現が入ります。

そういった表現に不快感を感じられたらすぐ戻ってください。

転生者と不安

村と外を区切る門を越え村の中に入る。村の中にはこちらを訝しげに、または欲情したぎらついた目でこちらを見る巨人達と奴隷だろつか、皮の首輪とぼろ切れをまとっただけの様々な種族の女性達と、労働力として重労働をさせられ、なにも着せられてすらないこちらも様々な種族の男性達がいた。

奴隷らしき女性達は腹が膨れ、妊娠している者が目立つ。何だろつか？何か違和感があったがよくわからない、情報をさらにあつめる。

人口は巨人だけでも千人以上は居そう、家の規模もサイズにあわせてかなりでかい、奴隷まで含めると一万人は超えるのでは無いだろうか、ちよつとした国と呼んでも良い規模である。

その中で最も立派な館・ちよつとした要塞・に案内された。案内した巨人は門番らしき二人の巨人達になにかを話した後、こちらにチラリと好色そうな視線を向けて、また門の方へ歩いていった。

今は眠らせているが、また余の娘達を貪るのかと想像し、思わず首を落とそうとしてみうがなんとか耐えた。

門番はニヤニヤと気味の悪い笑みをこちらに向け、片方は少しつまらなそうに館の中に入っていった。もう片方は気を抜けば触つきそうなので、間合いから一歩離れておいた。

「我等が偉大なる超聖魔王聖下が卑しき小さな者に慈悲を与え、この聖なる山オーバー・ザ・レインボーに勝手に土足で入り込んだ罪への弁明をお聞き下さるそう。本来ならば超聖魔王聖下は貴様のような薄汚れた小さき者など興味をもたれぬが、貴様と貴様の持ち物に興味があるとの仰せだ。真つ直ぐ入り玉座の間に入れ」

…何かいきなり帰りたくなってきた。超聖魔王聖下ってなんだよ、なんか無駄に偉そうな上に厨二臭い。しかもとことん上から目線だし。まさか銀髪で色白でオッドアイか赤眼で、更に12枚の翼があ

り左手に何か封印されて名前が黒の断罪者（笑）とか漆黒の墮天使（笑）とか魔を統べる者（笑）とかいわないよな…言わないよね？（この間0.02秒）

しかし余《大魔王バーン》が現れる魔界にてそんな大それた異名を名乗るのだ、バーンの生まれる遙か前の人物か、もしくは強力なボーナスを持った転生者か、どちらにせよ油断は出来ない。気を引き締めて余は門をくぐり、謁見の間へとすすんでいこうとしたが…。「さて、小さき者よ。貴様の持っている宝石は全てここで預かるようにとの御命令だ、その袋はその箱にいれよ」

暗殺の心配だろうか？それとも門番の懐に消えるのだろうか？それは解らないが今は逆らえない、素直に宝石の入った袋を箱に入れ、進もうとするが。

「まだだ、そのようなみすばらしく、様々な場所に暗器を隠せるような服などはこちらで全てを脱いでから玉座の間へ通せとの仰せだ。全てを身に着けることなく、貧相な身体をさらけ出してもらおう」…ッ！服までか。余程暗殺を恐れているとゆうことか。それとも…。

余は門番達のあからさまに欲情した視線を感じながら、全ての服を脱ぎ宝石と同じ箱にいれた。その間受けていた視線からいつ襲われるかと不安であったが、門番達を縛る超聖魔王聖下とやらの恐怖は彼らを行動させなかったようだ。

何一つ身に着けることを許されぬ、生まれたときの姿のまま、余は今度こそ呼び止められず門を潜るのだった。

視点変更？？？サイド

俺は転生者だ。一度死んでからこの世界に来たのだから間違いない。

俺は電車に挽かれてミンチになった、その時俺の心は恨みと憎し

みで一杯だった。遮断機の降りた踏切を渡るなんて他のやつだってやっているじゃないか！何でこの俺だけが線路で躓いて挽かれてなきやならないんだ！！

しかしそんな運転手への怒りも今はなく、むしろ感謝している位だ。俺は神に選ばれた存在だったのだ！

あんな所で無駄死にをするはずのない俺は神にデメリット付きではある物の三つ…いや実質四つの能力と共にダイの大冒険の世界の魔界に降り立った。

神に願ったのは大魔王バーンを超越する超魔力をもつ肉体、右腕に幻想殺し、そしてオリ主の基本の原作キャラでハーレムを作るための能力。それについたデメリットは一万年鍛えればバーン以上に強くなる魔力と肉体で原作より滅茶苦茶昔の魔界に来たこと、幻想殺しの右腕と、どんな女でも俺の女になる調教の首輪を無限に作る能力だ。

正直ニコポとかナデポとかが欲しいと思っていたが、実際使えばこちらの方が良いものだと思いついたのだ。

俺は魔物を狩り力を付けて村を襲い、男共は経験値に変え、女共は不細工とババアは経験値、後は首輪で奴隷にして俺の子を孕ませていった。どんな強気な雌でも、大人しい雌でも首輪を付けてしまえば盛りのついた猫のごとく俺を求めてきた。

後はこの繰り返しだった、力を付けて村を滅ぼし女を犯し、奴隷を作り国を広げていった。

不満といえはなぜか女が産まれない事だが、女が増えれば権利だとうたと騒ぐのは解りきっていたし雌は浚ってくればいくらでもいたので問題はなかった。

修行をして酒池肉林を楽しみ、飽きたやつは息子達に下げ渡す。この楽しいルーチンワークに一つの知らせが入った。西の森で犬耳の女がいたと言うのだ。

長く生きていたがそんな連中は初めて見た。残念な事に一人は逃げ、残る三人も見回りの奴らに喰われた後らしい。

中古には興味がないので奴らの本拠地を探すべく搜索隊を作ろうとしたところに続報が入り、連中の長が単身乗り込んで来たというのだ。

悪魔の瞳越しにみたがかなり驚いた、なんと東方の萃香なのだ！もしかしたら転生者かもしれないがそんな物は関係がない。首輪を付ければ皆が奴隷である。

持っていた宝石は大粒だし萃香も手に入れたかったので、こちらに来させるように門番に伝えた。もちろん、裸でだ。ババアよりはロリがいい、首輪がついたチビ雌が自分を引き裂きなが腰を振るのを見るのはとても楽しいのだ。その上彼女はなんとゆうか、全ての動作に色気とかを感じてしまい目が離せない、いつそのことこの国の王妃にしてやっても良い。彼女ならこの俺の横に立っても他の雌共と違い見劣りしないだろう、いや、膝に乗せて繋がっているのを国民に見せながらでもいいかもしれない。

どちらにせよこの右腕があれば密と疎を操る程度の能力だったか？も無駄でしかないので警戒はあまりいらぬ。

さて、悪魔の瞳で存分に視姦もしたし彼女も扉の前だ。まずは第一印象が大事だ。変なところがないか確認しながら、まるで恋をしたかのように浮かれ、心地よい緊張を百年位ぶりに感じたら俺は玉座についたのだった。

転生者と…

門から真つ直ぐにしばらくすすむと、謁見の間と思われる扉と、その前に並ぶ二人の番兵だった。

おそらくは威信を見せるため、そして近衛とゆう精兵を作るための分化。さらには余に対しての色々な下らない感情が見て取れる。

更にこの扉周辺だけでも複数の息づかいが感じられ兵を潜ませ手いることを感じさせ、周辺の窓や廊下には落とすタイプの扉があるようだ。ここで何かを起こせば閉じ込められた上に潜んでいる兵に殺されるのであろう。

ちらりと天井の様子を窺えば悪魔の瞳がこちらを舐めまわすように見ている、今更ながら見られていることに少し羞恥心が湧くが余はバーンである。堂々と無い胸をはり続けた。

超聖魔王と名乗る癖に裸に剥いた幼児一人にここまで慎重に対応する用心深さ、かつ自分を大きく見せようとゆう虚栄心。偉くなれば用心深さは必須とは言えいささか過剰に感じてしまい、油断は禁物とはいえ底の浅さが露呈している。

今の印象は大きな力を手に入れ、調子に乗ってはいるが、自分でも気づかない所で世界の全てに怯えている餓鬼、といったところか。そういったタイプは自分の意志が通らないコトは全てが気に入らないやつが多い。この段階では、余の頭は三割の撤退論と四割の自分の身体を含んだ和平交渉、そして不快感から来る即時での戦闘が三割である。幸い分裂していることが多かったのでマルチタスクはお手の物であるのでそれぞれ思考を深めていく。頭の回転を増やすために酒が欲しい。

撤退は簡単である。リレミトで館からでて娘達を強引に萃め、ルーラをすればいいだけである。

しかし奴隷達の数を見るに、逃げた後村にまで攻め寄せ、戦略級魔法が完成していない現状では数の差で押し切られる可能性が高く、

この案はこの時点で詰みである。余一人が生き残るのでは意味がないのである。

攻めに転じたとしてもこちらにも被害は出るし、今ですらギリギリの労働人口の低下は食料備蓄がホトンド無い現状では破滅である。真ん中は妥協点である。余一人が居なくても苦しいが何とかなるが、余が助けを求めた部下を見捨てた、とゆう風評はこれも致命傷になりうる。さらに上記案でも書いたように今は労働人口が少なくあの三人がいらないのは不利だし、それに何より相手が信頼も信用もできないのだ。最悪のパターンだと奴隷となった余を滅んだ村の上で食るとかが簡単に予想できる。

この村には女奴隷が多いし、命だけは助かる者も多いだろうが……。ん？何かまた引つかかる。今考えていた事には違和感はないがこの国に入ってきた時から感じていた違和感がさらに強くなる。

……。ま、まさかと思うが、しかしそれなら違和感の説明がつく。

余がこの国に入ってきたのは偶然の接触の結果であり、必然の結果ではない。なのに余がこの国に入ってから女性奴隷は見ても巨人族らしき女性は一人として見ていない！更に女性奴隷は老若関係無いと言えるほど子を宿しているものが多くは無かったか！？

もしや連中は女性が存在しない種族なのであるうか、もし仮にそうだとしたら余の村は連中にとって見れば恰好の仔袋工場になるかもしれない。この最悪の予想が当たっていた場合、余はこの場にて彼らを一人も逃さず殺すしかない。一人でも逃げればそいつが後の禍根となる。

この巨人族の実力を図ってみるが、まず考えつくのはその対人に関する大量の経験値である。これだけ大量の奴隷を作っているのだ、滅ぼした村は恐らくは100を軽く超えるだろうし、それは対人経験の少ない余に取っては致命傷を作りかねない。

さらには巨体から来るパワー、大きいからこそそのスピード、感じられる内蔵魔力、それらを総合すれば雑兵ひとりに対しても油断は

出来ない。

さらには彼らを束ね、力を誇示するためにすべての戦に参加しているであろう聖なんとかはどれほどでも注意をしなければならぬ。それらを頭の中でまとめ、まずは相手の実力を測り確実に殺せるかを確かめ、この種族に女がいるか確認し、相手の転生ポーンスを確認しなければならぬ。もし余の考えている最悪が的中し、更にどうしても勝てないなら大勢が死ぬだろうが村全体の放棄を考えなくてはならない。

「小さき者よ、超聖魔王聖下がお呼びなのだ。小さきその身で超聖魔王聖下の前に立つことを恐れているのであるが、早く入れ。」

おっと、長考し過ぎたようだ、番兵から注意をうけてしまった。

余は息を整え一步を踏み出した。するとそれにあわせ番兵が扉を開いていったので止まらず歩みを進める。

玉座の間にはレッドカーペットを意識したのか、赤い毛皮の敷物が真っ直ぐに玉座に続き、左右には完全装備といった兵士が十人が二列ずつの計40人が並び、奥の玉座に今までみた巨人よりさらに大きい巨人がすわっていた。

彼が超聖魔王とやらであろう、格好も装備も鞭をもっており、変わりにベルセルクのようなドラゴン殺しのような剣を腰に差しているが、まるで普通の剣のような対比だ、変な鎧と合わせて若い北斗の拳のウイグル獄長みたいだ。その反対側には皮の首輪をつけているのがさらに悪趣味だ。

今の所脅威はあのドラゴン殺しだろうか？しかしあの首輪は意味もなく付けているとおもえない、あちらも注意が必要だ。

巨人の王の前に進み膝を着き、頭をたれる。臣下の礼を取りながら余は口を開いた。

「超聖魔王聖下におきましては御機嫌麗しゅう存じ上げます。この度は我が村の者が大変な失礼をいたしました。

今後このような事の無いよう厳しく罰を与えます、何卒御寛恕いただきますようお願い申し上げます。」

余のへりくだった態度に巨人の王は目を細め鷹揚に頷き、口を開いた。

「良い、此度の件は異文化が接触した際に起こる通過儀礼である。今回は不問としよう。」

ただ、このような事は二度とあつてはならぬ故、侵入者達は余が罰を与えよう」

不問にすると云っているのに罰をあたえるとか、完全に足下みてんな、こいつ。おっと思考が…。

「畏れながらこれから先の我らが村との友好のために些少なから村の一番の宝石をお持ちいたしました、何卒お納めくださいませ。今は手元には御座いませんが、門番様に預けてまいりました。」

その余の言葉に巨人の王はしばし考えた後に、

「ふむ、それよりもそなたは外交官として来ておるのだ、それなりの身分をもつておるのである。ならばこの俺の妻としてここに嫁ぎ、二つの部族の友好としようではないか」

この言葉は少し予想外であった。奴隷として身体を求めて来ることは予想していたが…。しかしこれはチャンスだ。

「畏れながら偉大なる大王様には私のごとき矮小な者で無く、一族中のしかるべき姫君こそが相応しいと心得ますが」

「否、俺はそなたが気に入ったのだ。それに」

来た！この先が問題なのだ。

「この一族に女などという軟弱な者は産まれぬ、そのような者は浚つてくれれば良いのだからな。」

その瞬間に俺が感じたのはやはり、という諦めとこの一族全てを殺し尽くさねばならぬという虚無感と緊張感だった。しくじりは許され無いのだ。

「しかしそなたは姿は幼いが素晴らしく美しい、すぐにこの首輪を付け、この俺、ウイグルのモノになると誓え。そうすれば小さな村と犬ごときは見逃してやろう」

阿呆が何か言っているが無視、余は体の中の魔力を呪文と共に解

き放った。

ん？名前ウイグルマジでかよ。

視点変更ウイグルサイド

ついにこの幼女を俺の物に出来る！

今このとき俺は最高に幸せだった、あの美しい身体を自分の好きに汚せるのだ。ちっぽけな村や中古の犬などいくら見逃しても悔しくもなんともなかった。

あの小さい身体が俺のモノを受け入れて苦痛に歪むのを想像するだけで果てそうな程だ。

浮かれていた俺は魔界に来てから欠かさなかった用心を忘れていた、だから破滅の切欠の最初の兆候である魔力の高まりを感じた時にはすでに手遅れだった。

「フィンガーレーザー十指収束閃熱呪文！！」

飛び上がった萃香の放った両手からでるレーザーが玉座の間にいる兵士たちの頸を跳ね飛ばし、更に片手は兵を潜ませた隠し戸ごと兵士を切断して、もう片方は俺の頸を狙ってきた。

とつさに右腕が反応したため首は繋がっているが、もし反応出来なかったら今の一撃で全てか終わっていた。俺は混乱していたが体は殺しの経験が動かした、腰に差していたドラゴン殺しを、抜き打ちの要領で萃香に振り落とされた。

視点変更終了、バーン視点

奇襲はほぼ完璧に成功した。魔法を覚えて間もないポップが使えた収束ギラを、フィンガーフレアボムズの要領で両手の指から放ったのだ。

何故素直にメラ系ではなくギラ系なのかと言われれば、ダイ大世界で最も扱いが悪いのがメラ系で扱いが良いのがギラ系だからだ。ダイ大世界ではメラゾーマすらしょぼく描写され、フィンガーフ以下略は必殺とはいえず、カイザーフェニックスですら終盤はあまり

役に立ててないしあまつさえポップにかき消された。例外はアバンがメガンテした直後のハドラーのメラゾーマと余のメラ位の物のはず。

対してギラ系は作者も優遇していると発言し、出てくる時は脅威を示している。

負担とか寿命が縮むとかは余に全く影響はない。10の魔法はマルチタスクで簡単に制御でき、強靱な肉体はこの程度の反動はどうってことはない。寿命に至っては余は不老なので関係無いときたのだ。

故に放ってみたが凄じ楽、しかも魔力を込め続ければ打ちっぱなしで、さらに指を曲げれば曲げた方にうてるのだ。ジャパットにあればついにかえるほどお得である。

しかしウイグルは右手で直撃弾をかき消し、直ぐに剣を抜き打ち下ろしてきた。

「フェニックススウィング！」

初実戦使用初成功初防御である。ドラゴン殺しははじめ天井に突き刺さってしまった。

「フェニックススウィングだと！？何でおまえが使える！！」

そう言えばまだコイツに名乗っていなかった。それを思い出し、余は胸を張り、ウイグルを見据えながら言い放った。

「余の名か、余こそこの魔界を統べるべき大魔王。」

そう余がバーン、大魔王バーンである」

それを聞いたウイグルの絶望の表情はたまらない者であった。

蹂躪と虐殺とわずかな光

「嘘だ！そんなはずはない！！俺はまだコレからの筈なのにいきなりラスボスが出るはずがない！！？」

何か相手は混乱しているがスルー。引き続き敵戦力を把握する。

敵の主武装であるドラゴン殺しは既に敵の手から離れている、脅威は無い。

右手は確かに魔法を弾いた、いや打ち消した。ほぼ確実に幻想殺しと判断する。ならばやはり右手には触れないように戦う必要がある。

首輪は無視して構わない、使わせ無ければいいだけだ。

フィンガーレーザーは防がれたが、防がれたているのなら逆に考えれば当たれば効くとゆうことだ。ならばあれを主軸に攻めるが上策か。

そうと決まれば早速攻撃だ。あちらの方が経験は多いのだから立て直す隙など与えない。一息に倒してしまおう事にする。

「十指収束閃熱呪文！」

収束された十のレーザーがウイグルを襲う、ウイグルは混乱していたがこちらにも反応し、幻想殺しで防ぐ。…こちらの思うがままに。

「お、脅かしやがって、魔法なんか効くわけネーダロ！！今なら許してやる、すぐに俺の女になれ！！」

苦し紛れも予想どおり、王のメッキ反応完全に剥がれてしまっているが本人はそれに気付いてないようだ。

さて、確かに真つ正面からのフィンガーレーザーは防がれている、体がでかい分守れている範囲も広い、しかし所詮《幻想殺しは右手だけ》である。

余のフィンガーレーザーは両手から放てる、しかも両手は別々にターゲットを狙える。つまり右手側とそれ以外を狙えばすむ話である。

もし彼が竜の騎士や魔剣の鎧など、身体全体の魔法軽減、魔法無効の能力だったら出来なかった。溶かすのに時間のかかりそうだったドラゴン殺しも天井のオブジェになっている。

結論、既に彼には勝機は無い。

「どうした？我慢比べがしたいのか？馬鹿が！時間を立てば兵士たちが雪崩込んでくる！そうすれば貴様なんぞスタボロになるまで犯しぬいてやる！」

確かに時間がかかれば兵士たちは来るだろう。まあ来た所で片手で返り討ちだが。

しかし兵士が逆転のきつかけになってもつまらない、彼は今は押し込めているが逆転の目が完全に無いとは言えないのだ、足の先から刻んでやるうかと思っていたがあっさり終わらせよう。

レーザーを撃ちながら能力を使い三人に分裂、一人はモシヤスを使い外に出る、こいつはこのまま外で巨人と兵士たちを広場に集める。右手は形だけだが。

もう一人は横に移動していく。ウイグルは顔をそちらにむける、だんだん状況を理解したようで青い顔で口を開けるが、セリフなんてもう言わせない。もう充分話たのだから満足だろう。

「十指収束閃熱呪文！！」

その一撃はウイグルの頭蓋を撃ち抜いた。

力が緩んだので念の為にカイザーフェニックスを打ち込んだ、右手以外は確実に灰になるだろう。

ウイグルは確かに余と同じか、それ以上に身体能力、経験共に持っていたが、相手を油断させ、隙を付けば、自分より強かるうがこんなものである。要は相手の最大の実力を出させなければいいのだ。さて、広場の方にも人が集まったようだ。今口頭での確認と共に国の内外に余が散って確認しているが、少なくとも自我が発達し始めた年齢以上の者は全員集まった。国の外に出ていた見回り隊も楽しんでた最中だったらしいが集めた。こいつ等は最後に余の娘達をたのしめたのだ。他の奴らよりは幸せに死ぬだろう。

自我の薄い幼児達はまた使いようがあるし、今後の教育次第で改善は可能だ。奴隷達は巻き込まないように国から外に出している。

広場にある高台からウイグルに化けた余が皆の注目を集めている。充分に注目が集まった時点で口を開いた。…これでこの国は終わるだろう。

「皆よくぞ集まった！これよりこの国の今後の事を話す！全員心に刻みこめ！」

そして破滅の呪文が放たれた。

「メダパニ」

後は地獄だった。老いも若きも皆が混乱を心に深く刻み込んだのだ、抵抗など無理な話であった。

呪文を抵抗し、かかりの浅かった者もいたが、収束ギラで優先的に仕留めた。

余達三人の内二人はメダパニを打ち続け混乱を煽り、残った一人が脅威度が高い個体か、混乱で逃げ出す者から収束ギラで潰す。あとは皆が死ぬまで同じ作業を繰り返す。念の為皆の頭はイオで吹き飛ばした。

…かなり胸糞が悪い。しかしこれは必要なことだ。全員の死を確認した後は三手に別れた。

一人はこの後片付け、死体は合成材料にする。魔界に祈るべき神は居ないのだ、最大限無駄なく有効活用させてもらう。

一人は奴隷達の所へ、彼らを縛る物はないのだ。ただ聞いてみたところ、帰るところを村ごと失ったものや奴隷として産まれたものなど行く宛の無い者が圧倒的に多かった。仕方ないのでこの国の後を利用させてもらい、ここも我が領土としてしまふ。食料は連中が溜め込んだ物だけで数年は食っていけるだろうが、早めに技術者を派遣し開拓を進めよう。連中の子を身ごもっている者は一時村に来てもらう、考えはあるのだ。

最後の一人は国中の殺すにあたいしなかった幼い子ども達を萃めて、これも村に浚っていった。

こうして栄華を誇っていた文明は1日もたたずにその歴史を閉じたのだった。

蹂躪と虐殺とわずかな光（後書き）

服と瓢箪は回収しました。

後始末と国家建設

全てが終わり、もと奴隷達にも指示を出したので、余も一度村に帰る事にした。すでに捕まっていた三人は余の一人が付き添い、村への連絡もついでにするつもりだ。

三人が帰る前に余は三人のナカに出された汚物を外に萃め、近くにあった水場で身体を綺麗にさせた。

この間彼女達は一樣に沈痛な表情だったが、このグループで一番社交的だった娘がぼつりとこぼした言葉に皆が笑った。しかしその後笑いがきつかけになったのか感情の堰が切れ、皆泣いて泣いて泣きまくった。

余は一人ずつが泣いている娘達にそれぞれ胸を貸した。今の彼女達にかける言葉が見あたらなかったし、声をかけずにいるしかないと判断したためである。それに確かに余の胸は小さいが（つるぺたつてゆうな）、女の子を受け止めるくらいの余裕はあるのだ。

泣き止んだ彼女達はそのまま余の一人とルーラで帰るのだった。ちなみに笑いを誘った言葉は「でも、身体の割に付いてんのはちっさかったよね？」

村に帰った余は小屋に待機していたアルフと悪魔神官長達に事の顛末を話した。

テリトリーが増えた事に単純に喜ぶアルフ達と、食料事情に顔を青くする食料担当の悪魔神官。両者の対比は面白かった。

心労で胃の部分を押さえる食料担当に、備蓄されていた食料の事を伝えると感動のあまり高く両手を広げて飛び上がり、そのまま余の方に落ちてきた。なんか背景に断固相殺拳とかでてるが、迎撃すべきか？などと迷っている間に神官長がラオウみたいにかウンターをきめ、ぐつたりしたところを引つ張られていった。神官長の咳いた「掟を忘れおって…」と言う一言が気になった。余に触っては

ならないとゆう法は無いが…？

それはともかく支援の内容を決めていく。解放奴隷はそのまま余の民にする事は決まった、住むところはここかあちらを選ばせたいが、今回はまず養うことを優先し元ウイグルの領土にそのまま住んでもらう。お互い移住が可能になったら移住すればいいのだ。

農業の指導員や内政担当は明日ルーラで連れて行こう。リーダーがいないので下手に混乱するとどうなるかもわからない、今は余の一人が残っているが何時までも居続けるわけにはいかないので早めに終わらせるにこしたことはない。

あちらを本拠地にしないかを聞かれたがNOとっておく。バーン村の立地は悪くない、南に一日で良好な湾のある海があり整備できれば港も作れるだろう。西と北は三か四日どの距離で、峻厳な山であり、西は鉦山で北は川が下っている森もある。東は北からの川を挟み平原が広がり、そのまま一週間で元ウイグルのテリトリーだ。流石にハンデである合成機の置いてあった場所らしく大きくなれる街を作れる場所だ。動く必要はない。

今回の事で人口は50倍位に増えた、このままのやり方では上手く治めれないだろう。本格的に文字やそれを記す羊皮紙や木簡、または紙を作り、新たなテクノロジーを生み出す研究所や人々に知恵を与える学校設備なども作って行き始めなければならぬ。

足りない物はいくらでもある、解放奴隷の中に漁村出身の者がいれば南の開拓にいつてもらいたいし、開拓地を繋げる道も必要だ。

今後も他の部族との非友好的接触もあるだろうから、本格的な常備軍も整えたい。

優先順位は

- 1、ウイグルとの連絡を確保する道の整備。
- 2、農地増加で食料確保。
- 3、最低でも文官は読み書き算盤をマスターさせる。
- 4、軍備をしっかりとさせ、開拓について行かせるようにする。
- 5、開拓地を作り道をひく。

あとは4と5を繰り返し行い、隙き見て警察、消防を組織して、学校設備を作り、最後に研究所かな。

と言った具合に方針を決めて皆に伝える、悪魔神官長はあちらで村長をしてもらう。文官が足りなくなってきたのでまた悪魔神官を合成しておく。

そして範囲、人口が増えたのにまだ村とゆうのもおかしいので、今から国になったとし、国名を決めることにした。

他の者に聞いてもバーン国になるのは解っているのです、すでに決めている。この名前なら世界統一だって夢ではない。

「よし、この国は今からバレン又帝国だ!!!」

今ここに、魔界統一を目指す帝国が誕生した。果たして彼らを待つのは栄光か、それとも…。

番外短編

悪魔神官10の掟

初代悪魔神官長

アークマ・デテクール

著

一つ、悪魔神官は最後までバーン様に忠誠を誓い、バーン様以外のよう、よに萌え無いこと。
これを破りし者、即死罪。

二つ、朝昼晩の食事前と十時と3時のおやつの前には、必ずバーン様の姿絵に五分間五体倒置で祈りを捧げること。
これを破りし者、即死罪。

三つ、日々バーン様の事を思い、良き瞬間を目撃した場合、その瞬間を心で写し、姿絵にて共有すべし。
内緒にしたり、姿絵がにいていなかった場合、即死罪。

四つ、バーン様は生きた偶像であり、我らを創造された神である。
故におさわり禁止。
これを破りし者、即死罪。

五つ、バーン様に何かイタズラされても必ず笑顔で応えるべし、涙が出るなら心で泣くべし。
これを破りし者、即死罪。

六つ、バーン様は期待を込めてわれわれを創造された、故に我らはバーン様のご期待に添えるようにするべし。
これを破りし者、即死罪。

七つ、悪魔神官団を 抜けてはならない。
これを破りし者、即死罪。

八つ、万が一の場合にたいするため体を常に鍛えるべし。鍛えた体は「こんな事もあるうかと」のセリフの為に同族以外には緊急時以外見せぬ事。

これを破りし者、即死罪。

九つ、バーン様に欲情する変態を見つけたらすぐに始末すべし。Y ESロリータNOタツチの精神を世に広めるべし。

これを破りし者、即死罪。

十、女悪魔神官は、男性に素顔を見られた場合、始末するか愛するべし。

これを破りし者、即退団。

以上の事。努々忘るるべからず。

番外短編（後書き）

悪魔神官神官的何でもない掟。

巨人の行く末 前編

大ざっぱに今後の方針を決めた後、余は合成機まで来ていた。子供達は助けたが（と言っても二歳位までだが）今のままではまた似たような事になるだろう。

つらつらと考えながらも作業を進める。「大きなふくろ」にいた巨人達の死体を合成機にまとめて放り込む、この死体を使い新しい種族を創るのだ。

彼らは強靱な肉体と莫大な魔力を秘めた種族だった。正直奇襲で無かったらこちらの敗北の可能性も高かった。そんな優秀な「素材」だ、食料を確保し、優秀な素材を得た今こそ新たな種族を創るチャンスである。もっともファンタジー世界では有名で、ドラクエにも出ることも多いが。

先ずは前から欲しかったが食料事情が厳しく、食料生産に適しているとは言えないので見送っていたドワーフだ。

ソードワールド版の見解だが彼らは小柄だが、強靱な筋肉と高い精神力をもち、手先の器用さを生かして優秀な装飾品や武器や防具を作り、さらには戦士としても優秀な者達だ。

その小柄で強靱な肉体は、狭い鉱山でその力を発揮して大量の鉱石を発掘し、素晴らしい装備を生み出してくれる。しかもその生業が好きだとゆう種族である。まさに富国強兵にふさわしい優秀な鉱山夫であり頑固な鍛冶屋でありタフな戦士である。

欠点は上で言った通り食料生産には相応しいと言えず、むしろ大量の酒を消費する大酒飲みである、と言った所か。

次はエルフである。とは言ってもドラクエではなくこちらもソードワールドの、であるが。

彼らは華奢ではあるが森を住処とし、レンジャーとしても優秀で魔術師としては最高の能力を誇っている。

ただ今回必要と判断したのは魔術師としてではなく、レンジャー

としてである。これから先、富国強兵の為に森の切り出しなどは必ず行われる、しかし伐りつばなしではいつか森が無くなるし、ただでさえ環境の悪い魔界が環境破壊でさらに酷くなるのは御免である。だから彼らには魔術の研鑽と森の管理を任せる事になる。

合成の前の能力追加はその辺をいじりながら材料を追加していく。「さて、と」

準備が終わり、合成機が動き出す。今回は今までとは違い、一度に男女200人ずつの400人を創り出すためか、少し時間がかかるようだ。待ち時間を酒を飲みつつす。ふと思いつぶやいた。「憎い相手だったとはいえ、よくやったもんだ……」

ウイグルから始まり、混乱で死んだのが5〜6百人、余自ら始末……いや殺したのはこちらも5〜6百人程、殺しも殺して無双系ゲムみみたいだ。

「……ッグ！」

自分が作り上げた凄惨な光景を思い出し吐き気がするがこらえた。涙が出そうになるがこちらもこらえる、冷静になったら今まで思考の端に追いやっていた怒りや罪悪感、悲しみや悔しさ、向けられた怒りと苦悶と哀願の表情、その全てが、おれ……余をさいなむ。

魔界の生活はかなりつらい、いつでもどこでも暗い、見上げる度にまるで深い穴を覗くかのような感覚を受ける空、突如吹き荒れて作物や動物や仲間までも狂わせる障気、まだ治水が出来てないので豪雨だとすぐに氾濫する川、突然噴火する火山や突発的な地震、そしていつ襲ってくるかも解らぬ強力な魔物の群れ。

空を見すぎて心が体から離れて帰ってこれない子供達がいた、障気に当てられ完全に変質し見境無く暴れて殺すしかなかった娘達がいた、洪水で流された男達がいた、マグマに灼かれ、地面にできた輝に呑み込まれた者がいた、夜中に襲われ、余が対応するまでに喰われてしまった者達がいた。

余は全知全能ではない、出来ることしか出来ない。ベホマズンやザオリクにも限界はある、死体がないものや自らが変質してしまえ

ば命を助けられない。だから何も出来ぬ余の目の前で大切な者達が死んで行くのを見るしかなかった。魔界に来て村を作り始めて約十年この間の期間は地獄のような日々と毎回毎回後悔と挫折と無力感に悩ませられる。

無力故に無い頭を必死で動かし常に生き残る手段を考え続けた、死体にも慣れてしまった、だが仲間達の死は常に余の心にのしかかった。三人に分かれる事が出来てからは必ず一人は起きていた。

「しかも人の死体を資源扱いか昔じゃ考えた事もないのに落ち着いてやつちやうもんな」

俺が余になつて10年、相当冷たくなつたと思つてしまふ、割り切らなきゃいけないと解つていても慣れはしない。

「うん、終わったか？」

合成機がベルを鳴らしたので出来た連中を並べて…ん、なんかおおい？

あ、タルタルがいる。

巨人の行く末 前編（後書き）

すいません寝落ちしそうなので、前半は終了とゆつこととで、後半は
また明日お楽しみください。

巨人達の行く末 後半（前書き）

では後半です。

巨人達の行く末 後半

タルタル、彼らは名作RPGファイナルファンタジー11に登場する種族である。

体は小さく（と言うより育たない）手先は器用で魔力も高い。ただ華奢で体力も腕力もない、そんな連中だ。

しかし、星の神子を中心に国を作る経営力と魔術都市を作る手腕があり、滅びかけた国を勤勉さと努力で復興させたりする種族だ。

欠点は体力と腕力の無さと、一部の人物のエキセントリックな言動であろうか。

作られた理由は多分ドワーフの小柄とエルフの魔力なんかが設定時に混ざった上に材料が余っていたんだらうか？あの機械はかなり大ざっぱな所が有るので多分そんなものだろう。

しかし…エルフとドワーフとタルタル、…あれ？もしかしてロリ要員増えた？

ま、いつかと変なことに消費される思考リソースを整理して待っている彼らの様子を見る。

どうやら先頭にいる奴が一族のリーダー格らしい。すでに方針が出来ているので、タルタル以外はリーダーに名前を付けて、悪魔神官長に任せる。

タルタルは…ああ、いつか作ろうと思っていた研究所に努めてもらい、悪魔神官達の負担を減らそう。

エルフのリーダーはデイドリッド、ドワーフはギムリ、タルタルはリミララと名付ける、ただタルタルはリーダーは星の神子と名乗るため、この名は引退後に使うことになるだろう。

悪魔神官長に住居の縄張りなどをまかせ、次の事を始める。

巨人達は強い力をもち、優れた魔力と知性を持っていた。しかし女性が生まれにくいという種族で欠点があった。

生まれにくい女性を補うため（しかも女性を使い潰すことが多かつ

たらしい) 彼等は年中略奪をしていた。それが残虐性を更に加速させていたのだろう、何時かは破綻していた可能性は高かったし、事実余に危険判定をもらい滅亡に追い込まれた。

だが、その欠点を余は合成機を使い修正出来るのだ。その上で念の為に人格形成前の子供を使うのだ。

今妊娠している者は産んで貰ってから引き取ることになる、今は中絶などは出来ないし、…例え親がアレでも産まれてもない子供に責任をとらせるのはナンセンスだ。

人数は、今生きている子供は320人程度、産まれてもない者は1000人程、ならば320人は性質の変化だけに留めて残りを纏めて女性にしてみえばいいか。女性を増やしリーダーが女性なら無茶な事はしないだろう。そう期待したい。

設定画面で性質を変えていく。凶暴さを抑え知力を上げる、女性が生まれるようにする人数比は三対二くらいでいいか。更に同族以外では子供が出来ないようにする。まあこんなものだろう。

彼等の世話はこの村で行う、ウイグルでは彼等に対する怨みが強すぎて、せつかく矯正した人格がまた歪むかもしれない。誰にとっても不快なら避けておく方がいい。

こうして余は巨人を矯正して行く間にも時は過ぎ、小さいトラブルはあるものの順調に勢力をのばしていった。

ウルフ族は子供が大人になり、また人口を増やしている。

悪魔神官はお祈りしたり内政したり医者をやったりと大忙しだ、たまに不埒者がでると取り押さえて去っていく。無駄に闘気とか出さないでほしい。

元奴隷達はウイグルを中心に勢力を広げ、人口と原始的だが商業の中心となっている。

エルフ達は森の管理を堅実にこなしてくれる、彼等が来てから水害は減っている。それだけで十分だ。

ドワーフ達は期待通り西の山で村を開き、様々な物を運んでくる、

富国強兵にはやはりピッタリだった。副作用としては魔界大麦からエールを作る事が出来るようになったため、最高すぎて素晴らしい。タルタルは持ち前の好奇心と勤勉さで研究所の規模を拡充している、時間と予算があれば学園都市も作ってみたい物だ。

巨人達はすっかり落ち着いて、昔のギラギラした様子はない。戦士や土木作業で安定して役に立ってくれている。

そういった様々な事を飲み込み、時は進んでいく…。

500年後の各種族詳細とバレンヌの詳細、および地形（前書き）

そう言えばバーン様視点の簡単な説明しかしてなかったので、500年後のそれぞれの現状を報告します。

500年後の各種族詳細とバレンヌの詳細、および地形

バレンヌ帝国の人口：現在340万人前後、相変わらず魔界独特の殺傷力の高い災害に増える人口も多いが、亡くなる者も多い。

開拓団は出す物の、下記に書いたように騎乗可能な生物が居らず、物流が滞るために現在はこれ以上広がれない。

帝国の軍備：帝都バーンと商都ウイグルに常備軍が駐屯している。装備は相変わらず鋼製だが、日本刀が欲しくなったバーン様がドワーフ達に大ざっぱな作成方法を教え、通常のロングソードだけではなく腕に自信のあるバーン近衛団を中心に刀の所持者も広がっている。

馬っぱい乗り物が余らない（合成機で創っても、ケンタウロスやジヤミみたいになる）ため、騎乗兵はいない。デスパロットやクックルーで乗り物にならないか挑戦中。なお、バーン様が何か思い付いたらしく騎乗可能生物を合成するらしい。

軍の主力は農業から解き放たれたウルフ族。

内政：相変わらず農業優先だが、南の海沿いにバーン様の命令で造船所が出来ており、ガレオン船やシップなど様々な船の作成や艀船技術獲得を目指している。

ついに ねんがんの がっこうを つくったぞ！ と言うことで現在は最低限の教育を誰でも受けれるようになり、教育水準は上がっている。

商業は、いつの間にかゴールド金貨等が開発され、商業流通は始まっている。

硬貨発行は小屋がランクアップした際に併設された造幣局から自動的に出てくる。ゴールド銀行は気づいたら出来ていた。

なお、硬貨を鑄つぶそうと試してみたが失敗しているため、不思

議な力に護られている模様。

1ゴールド＝1000円

1シルバー＝100円

1ブロンズ＝1円

位、

なお、商品の値段は各地でことなり、例えば鋼の剣はゲームだと1000ゴールドを越えるが、ドワーフ村では600ゴールド程である。

各種族現状

ウルフ族：多民族の人口増加により、あんまり得意ではなかった農業から解放され、本来得意とする軍隊や警察にシフトしている。ただ、牧畜に目覚めた物達がいるため、全員がメイドや軍属ではない。相変わらずのハーレムだが、搾り尽くされる先輩達を見た若いウルフ族達は所属すれば結婚から逃れる事の出来るため、軍に志願している。それが良い男を調教：育成したい女達の罫だと知らずに。女子の一番人気はメイド。

悪魔神官族：タルタル族のおかげで様々な研究や攻撃魔法、内政などの負担が無くなった。

その分を教育や神官としての仕事に費やしている。

悪魔神官10ヶ条の掟は今尚生きており、誰も知らないが素手での格闘もかなり強い。

軍隊としては後方担当、主計や軍医をこなす。

エルフ族：森の番人として頑張っている。使う魔法がエナジーボールなどソードワールド系だという事以外は問題無い。軍隊では斥候から弓や魔法の火力支援、森林でのゲリラ戦など幅広い活躍をする。

ドワーフ族：山にドワーフ村を建設し、酒を飲んだり穴を掘ったり武器を鍛えたりしてる。盗賊の鍵の技法は関係ない。

ソードワールド2.0も混じっているらしく炎も効かないため消防などでも活躍している。

軍隊では前線で敵を蹴散らす力強い戦士である。

タルタル族：研究や内政などで成果をあげている。ただ時々ま明後日の方に進むのは如何なものか。

オートマトンなど自動人形を作成している。

軍隊では後方での火力支援を主にしている。

新巨人族：相変わらずデカいが性格は大人しくなり、気は優しくて力持ちになった。

その力を生かして建築や軍隊など力の必要な職についている。ただし頭も良いため、教職に就く者もいる。

繁殖率は低めにされたが、地味にハーレムなため問題は無い。

軍隊では前線での蹂躞をむねとする。

その他：元奴隷達、ハドラーやザボエラなどの種族。本来強力だったが更に強力な巨人に圧倒され、奴隷となっていた。

しかしバーン様により解放され、様々な職につき、軍事も様々なところにいき、特定の物はない。

バレンヌ帝国の場所：バレンヌ帝国は北アメリカに似ている大陸にある。場所はフロリダ半島の根元のメキシコ側の方にある。

500年後の話

あの一連の騒動にけりが付いてはや500年、心配していた巨人達への差別などは少なかった。

バーン村は探索隊しか被害は無かったし、ウイグルとは接触しないようにしていた。また恨みを持ち越さないように同じ巨人達でも余が新生させた罪の無い者とした。

まだ人口もソコまでではない時に競争心ならともかく、復讐心で足を引つ張られるのはゴメンである。

かなり強引な方法も採ったが、500年という長い時間がその恨みを削ってくれた。

軍備もそこそこ整え、探索隊を出して周囲の地形を確認し、新たに村を作る所を探し、軍と余が周りのモンスターを排除をしていき、安全が確保してから軍屯と民屯で開拓村を広げ、国を大きくする。

番所を作り治安を維持し、病院を作り怪我人や病人を癒やす。研究所では新たな発見が報告されている。

トラブルはもちろん有るが巨人達みたいな大きい事件はない。しかし、余の国が大きくなる一方で、大きくなる事で発生する。

「末端までに物資が届く時間が掛かりすぎる…か。」
国が大きくなった結果輸送力の限界が来たのだ。

乗れる動物が見つからずこれまでは巨人達の大八車で対応していたが、それも限界に達したようだ。

今はクツクルー等の乗れそうな動物を探したり、船を作って輸送手段を確保しようと頑張っているが、船はまだ時間が掛かりそうだし乗れそうな動物探しはもっと大変だ。

魔界牛や魔界羊は戦闘力を持っていたが、馬は魔界を生き残るためラムポーンやケンタウロスみたいになってるしで乗れるものは無いのだ。それゆえになんとか合成機で作ろうともしていたが捗らな

い。

しかし、タルタルを見た余は思い付いた。自衛出来る戦闘力と見た目によらないパワー、粗食でも耐えれそうな乗れる動物。FF乗れるマスコットキャラの一つチヨコボだ。

チヨコボは人懐っこくFFTではチヨコメテオでの戦闘をしたり、FFでは騎兵の乗騎としても使っていたし、？のバツツの相棒として旅ができていたので粗食も耐えれるだろう。

魔界の環境に耐えれたなら乗騎として大いに役に立つ。

早速合成機の前にいくがレシピでは作れないみたいなので、ファジー合成を使う。

まずは鳥類だがクックルーを使う、黄色は…まあ絵の具でいいか。後はタルタルの髪の毛で良いだろう。??ではチヨコボ好きも居たらしいし。あと野菜を入れて合成スタート！

そんなこんなで何回もトライ&エラーを繰り返し、一月程でチヨコボは生み出された。そして、数を増やしたチヨコボは輸送に、軍に、探索に素晴らしい活躍を発揮してくれた。そのおかげで我が国はさらなる発展と拡大を遂げたが、広がったがために、強敵にぶち当たった。

首狩り族を中心とした連合軍である。さらにはその後ろにいる強力な存在である。

魔界統一のための必要な戦いではあるが、余を遥かに超越するの強敵と、新たな仲間との出会いがあるとは今の余には解らなかつた。

第二部、大陸統一大戦、開始。

闘争の気配

余の征服活動ははつきり言って解りやすい。

探索部隊が異種族の村を発見したら、余の親衛1個連隊と共に出陣し、村を訪れてその村の最強の戦士、もしくは魔法使いを指名し、それを叩き潰す。それも、圧倒的な力の差を見せ付けてだ。

魔界は過酷すぎる環境のため、大抵は力の強い者の傘下に収まる。そのため、大抵の場合はこの方法でけりが付くのだ。

…しかし…

「これほどの力の差を見せつけてもまだ降らぬか」

この村ではすでに戦士達は皆倒れ、村長の首をつかみ最後の勧告をしているがまだ首を縦に振らぬ。

「一族すべてを殺さねばならぬか…」

余は無駄な事は嫌いだ。しかし、後の災いを避けるためにこの村を完全に潰さなければならぬならそれは躊躇わない。すでに部隊は村を囲んでいる、一声かければ皆殺しも容易い。

「例え…」

この期に及んで何かまだ言いたい事があるようだ、死にゆく者の最後の一言くらいは聞いてもかまわんか。

「例え…我が一族を滅ぼ…しても…北の…山…の…
北の山に？」

「サ…ラマン…ドル様が…か……な……ず…」

…力尽きたか。サラマンドル？火蜥蜴？その程度か？しかしそれにしては 村長の態度があれだったか。

「まあ良い、者共、根切りにせよ。あと北の山とやらに斥候を出せ
余の指示を受けた兵達が動き出し、村を殲滅していく。余は今
これ以上仕事ためルーラを帝都バーンに帰還する。

ルーラ中にも考えるが、まず北の山って何だろう？サラマンドルってくらいだから火山か？

…この大陸は北米大陸に近い形をしている可能性は高い。今までの探索部隊の情報を纏めるとだいたいそんな感じだ。

まあ、地上世界も日本列島みたいな形をしているし、魔界は日本以外の世界地図部分ってゆうのも 解りやすいか。

まあ、それはさておき思考を戻す。北米大陸で火山…なんかひたすらに嫌な予感がしてくる。

「まさか…なあ」

余は不安を振り切るように頭を振り、帝都に帰還した。

二週間後、情報収集が終わり、帰還した斥候の報告を聞いたが、あの村の北の山にはそれらしき魔物はいないとのことだ。

ん…、やっぱりなんか嫌な予感がはれない。火蜥蜴くらいなら問題ないが、やはりドラゴンくらいは想定したほうが良いだろうか？ その後は一年程は何も無かったが、念のためあの辺には村を造らせず監視を強化しているが、今は異変は起きてないがいずれ何か起こるはずなので監視と斥候での調査を強化している。

しかし、そんな余の行動を嘲笑うかのごとく違う方向から報告が入るのだった。

「港が襲撃を受けた!？」

余は急いで港の方に向かう。道々で兵を集めながら向かうと港が炎上しているのが見えた。

襲撃をしているのは…マーマンか？魚介類が今更何故？兎に角迎撃のため兵の一部を船台に向かわせ、マーマンの流入が続き、激戦が繰り広げられている浜辺に向かうのだった。

視点変更、三人称

エルフのヒルドは浜辺で繰り広げられている激戦の中にいた。

彼女は村では唯一魔法が苦手なエルフだった。少なくとも彼女は彼女以外に魔法の使えないエルフを知らなかった。

毎日がつまらなく、森の管理という皆が頑張っている仕事にも興味は無かったが、弓と短剣は一人前以上だった。

だから彼女は知り合いのいない軍に入隊した。皆はもう少し考え
てから行動しろと言ったが彼女は気にしなかった。何故なら彼女は
馬鹿にされたら見返してやらないと気が済まない気質の持ち主だっ
たからだ。

軍では力が全てだった、幾度かの戦いを経験し力を見せつけた彼
女は小隊を率いるまでに昇進し、帝都の港を警備していた。港は最
新のガレオン船の研究が進み、これからの帝都バーンの発展に大き
く関わるこの場所を守る大事な仕事に、彼女はほこりを持っていた。
その日もいつもと変わらない日が続くと思った。しかし、監視
塔にいた彼女の遠い先までよく見える瞳は海の中の不信な姿を捕ら
えてしまった。

「ん〜？」

初めはでかい魚かと考えていたが、かなりの数がいたし、その影
が手に武器を持っていたから彼女は声を部下に命令を出した。

「敵襲う〜！半鐘を鳴らあせえ〜！戦闘用意い〜！」

その声に反応出来たのは一部だけだった。しかし、半鐘が鳴り他
の小隊も警戒体制に移り、最低限の役目は果たせたと彼女は思った
が、部下の反応の遅さに舌打ちが出そうだったが、あとで注意する
事にした彼女は弓に矢をつがえ相手の出方を窺った。

第一撃はあちらであった。水面に顔を出した魚男の一体が、目立
つ所にいたヒルドにヒヤドの魔法が飛んでくるが、彼女の迎撃の矢
はヒヤドを貫き通し、見事ヒヤドを放った魚男の眉間を貫いた。

「先制攻撃い確認。反撃開始い〜！」

その彼女の号令が聞こえていたわけでは無いだろうが、各小隊が
反撃を開始した。あちらに攻撃的の意図が在るなら遠慮は一切無用
である。

勿論ヒルドや、彼女の率いる小隊も反撃の矢を矢継ぎ早に放ち、
小隊付き魔法使いはイオやギラを放ち魚男に放った。

しかし、敵は多く海岸に橋頭堡を築き、そこから上陸を開始して
いる、地上の警備隊も応戦しているが奇襲の動揺が続いていて、敵

を海に押し込められていない。

「すみません！魔力切れです！」

戦闘開始から一時間、まず魔法使いの魔力が切れた。撃ち続けた矢玉も残数が少なく、監視塔入り口のバリケードも限界に近い。

「いつまででてくんの？」

この一時間、彼女の小隊だけで100人は仕留めた気がする。だがまだまだ敵は多く、しかも援軍はまだ届かない、村で一番落ち着いている、もしくはスーパーマイペースと呼ばれた彼女も流石に疲れて来たため焦りがみえてきた。

だが運命は彼女を殺さなかった。

「バーン様だ！！」

ルーラで港まで飛んできたバーンが浜辺に参戦したのであった。

「カラミティエンドA！！」

バーンの手刀から放たれた斬撃の衝撃波は真っ直ぐ飛び、先にいた魚男をたたつ斬り。

「数が多いか」

その一言でいきなり小さく、無数に分裂し、その一人一人が高速で飛行しながら強力なレーザーを放ち、次々と魚男の骸を量産していく。ものの10分足らずで、ある程度浜辺を制圧したバーンは両手に魔力を集め敵本隊が潜む海面に魔法を叩き込む。

「極大爆裂呪文！！（イオナズン）」

島が無くなりそうな爆発を叩きつけられ、海中は地獄と化し、魚男達は海面に浮かんできた。ヒルドはそんな規模の爆発魔法は見たことが無かったのだとても驚いたが、あのバーン様ならもつと凄い事も出来るハズ！！と感動していた。

主将らしき魚男は息も絶え絶えに、バーンに向かって話し掛けた。

「キ、貴様は一体……」

「余の街をおそつた愚か者には言う必要は無いが、特別に教えてやるわ」

彼女は胸を張り、まるで世界に宣言するかのように傲慢に。

「余こそこの秩序無き魔界に光をもたらすもの。そう、余こそがバーン、大魔王バーンなるぞ」

彼女は世界の支配者のごとく堂々と言い放った。

自分が起こした水しぶきのせいでブラウスが透けているのには気づいては居なかったが。

《竜》の脅威

海岸一帯には死が撒き散らされていた。浜辺には焦げたものや射抜かれたもの両断されたものが投げ出され、海面には耳から血を流しているものが浮いている。

誰もが今終わった事ではなくこれからを考え始めた時、《ソレ》が現れたのだ。

ヒルドは海を見ていた。別に暇だからとかそんな理由ではない。彼女は弓を撃つた後は残心が大事と習った、だから彼女は最後に撃つた敵を見るために敵のいた海を見ていた。

だから最初に気づいたのだ。飛んでいるバーンの真下で盛り上がった巨大な波を。

「危な…」

しかし、彼女が気づいただけでは意味がなかった。

彼女の声は少し、間に合わなかったのだ。

視点変更、バーン

「危な…」

その声が聞こえたのは余が今度の事件の後始末を考えている時だった。

その声の主を思い出し、軍に入っていたのを思い出し時の流れを感じた。

エルフ村で見たときは小さかった子だったが、今は頑張っているみたいだ。せっかくだからと色々ネタを仕込んでいたが、元氣そうで何よりだった。が教えたものを自分の力に変えたのが心配だ。

そのようにはつきり言って油断しまくっていた。それが原因で余は初っ端から大ダメージをうけた。

イオナズンによる爆撃の為にある程度海岸から遠い場所で、これまたある程度の高さで飛んでいた。…《奴》にとって最高の位置に

余は陣取って居たのだ。

『その頸、貰った!』

いきなり余の足下の水面が爆発し、そこから巨大な影が飛び出して来たのだった。

余はとつさに回避を試みたが、あちらが速く、余も注意をしていなかった為に直撃では無いものの、左手を丸ごと食いちぎられたのだ。

「何い!」

慌ててベホマをかけて左手を復元すし、更に高度を上げ追撃を避ける。

『この匂い、間違いない。我が盟友たるサラマンドルの配下の村を襲ったのは貴様か!』

現状を把握する。目の前で海面から鎌首をもたげてこちらを睥睨する巨大な竜。その科白からは先の村への襲撃の報復、そして敵の同盟者としての攻撃と思われる。

「ふむ、今更か。いつ反応が有るか考えていたが、なかなか時間が掛かったな」

余の挑発に対して敵は熱くなっている。

「軍勢を集めるのに時間が掛かっただけだ!今日は挑発だけの予定だったが、それ以上馬鹿にするならばこの海竜リヴァイアサンが牙に引き裂かれると思え!」

…ああ、どつかで見たかと思えば口ト紋の海王リヴァイアサンか、異魔神に引き裂かれた奴みたいだなフォルムだが。

「海竜とはいつても所詮はでかい海蛇、牙以外に何も無いではないか。その程度で余に刃向かうとは愚かしい、大人しく降れば丁寧に扱うがどうだ?」

「言ったな!ならば海竜リヴァイアサンの力を思い知るが良い!」

こうして、帝都バーンの沖合でバーンは初めて《竜》とであう。

果たしてこの戦いの勝者はどちらになるのか、今はまだ、誰も解らなかつた。

海竜リヴァイアサン

海竜リヴァイアサン、その姿は100メートルにもなる巨大な海蛇だ。ロト紋では初代は異魔神に負けてデカイアメーバに、二代目も異魔神に負けて2つに引き裂かれていた。

正直余からすれば割とマジでデカイ海蛇な感じだったが、今目の前にいる巨大な姿のなんとこの威圧感か。漫画のイメージだけではしょぼそうな先入観があったがそれは違う、やはりダイの大冒険仕様の所為だろうか？

『動かんなら我からいくぞ！』

焦れたのかあちらから仕掛けてくるようだ、さて、すでに海面から出ている状態で何が出来る？

『空中だろうが海に出て来た時点で貴様は既に敗北している！！』
リヴァイアサンはすぐに海中に潜り、高速で移動する。それだけではなく通り過ぎた後の波から水のカタターが高速で飛んでくる。岩を萃め盾にするがほぼ素通りで貫通し、全く盾にならない。見た

目通りかなりの威力だ。直撃すれば余とて真つ二つになりそうだ。

しかし、何百と飛来するがまだまだ隙間が多い、グレイスし放題だ。だがしばらくすると海面全体が泡だったように白くなり、海面一帯からカタターが飛んでくるようになる。少し厳しくなってくる。おびたらしい数でとんで来るそれをあるいはかわし、あるいはフェニックスウィングではじく。

隙を見てはイオラや収束ベギラマを撃ち反撃をするが、海中を高速移動するリヴァイアサンに直撃はしない。海中にイオラを作ればまた違っただろうが今は難しい。

千日手になりそうだがイオラの衝撃自体は伝わっていると信じてい。そんな事を考えつつ回避し続ける、と、突然足下の海面が膨れ上がりそこがまるで塔のように伸び上がりそこからカタターが撃ち出され始める。

それを切欠にしたのか次々水塔が作られ余を包囲していく。カッターは既に視界一杯に飛び続け、一手ミスしただけで直ぐに切り刻まれるスリルを楽しみながら魔力をためる、次の瞬間水塔の一つからリヴァイアサンが飛び出しこちらに向かってくる。溜めた魔力を解放、

「極大閃熱呪文！！（ベギラゴン）」

寸での所で開いた口の中にベギラゴンをたたき込むが勢いが止まらない、回避をしたいが周りはカッターだらけである

体を捻りベギラゴンで視界を塞がれたリヴァイアサンの直ぐ横を掠める。掠めただけだが皮膚が切り裂かれている、洒落にならない威力を感じながら鱗を避ける。ベホマをかけながらカラミティエンドをくり出すが鱗を何枚か剥ぎ取る程度のダメージしか与えられていない。

リヴァイアサンはそのまま他の水塔に潜りまた様子を見ているようだ。水塔を含めたカッター攻撃は収まらない、余は能力を使い飛んでくるカッターを散らす、散った水滴が散弾銃のごとく飛んできて余計危ない。

あれ？普通にピンチ？…よけいな思考をカット。全く、口ト紋仕様ならミスティックパワーで巨大化して無理やり止める事も出来そうだが、あいつ堅いしパワーも今の余をはるかに上回っている。

ベギラゴンのダメージもかなり軽減されているようで、泳ぐ速度は変わらない。なんとゆうタフネス、ガルダンディーの竜なら跡形もないだろうにケロツとしているとは。

余はしばし考えたあと魔力をためる。今度は更に消費が多いがこの魔法なら状況を一変させることが出来るだろう。

魔力を溜めつつ回避を続ける、かすったりしたところが切れるが今ベホマのために使えば溜めた魔力が無駄になるために、能力で切れた所を萃め治すが、かなり妖力を消費するので速く出てきて欲しい。

溜めている魔力に警戒していたらしいリヴァイアサンだったが、

いつまでにとっても直撃を食らわない余を見て、再び水塔から飛び出してきた。そのアギトが余に当たる直前、余の魔法が完成した。

「ひょうが」

かなりの魔力を持つて行かれはしたが、魔法が発動した瞬間余を中心に超低温の世界が生み出された。海も、水塔も、カッターも全てが凍りついており、新しいカッターは撃ち出されない。

「何だとおおおお!?」

あまりの光景にリヴァイアサンが吠える。だが、その際は致命傷につながる!

「百万鬼夜行!」

本来なら幻想郷ではないので宣言など必要は無いが、今は体力も魔力も妖力も 足りない今は、気合いしかないのだ、今気力までつきたら本気で危ない。

相手の体力と魔力、さらに闘気もまとめて直接削る。

「ミツシングパワー!」

妖力を使いすぎたせいでリヴァイアサンの四分の一も大きくなれないが今はそれで良い。

「こ・れ・で・死ねい!」

残った闘気で最後のカラミティエンドを叩き込む。

… 奴の硬さの秘密はまず間違いなく闘気にある、あれだけの硬さと魔法無効化に近い、今の余の魔力では抜けない防御。あれはおそらく《竜闘気》だ。まあ竜の闘気なんだから無ければ逆におかしいが。だがその竜闘気さえ減れば今の余のカラミティエンドでも通るハズ!!

そして、その一撃は、確実に、リヴァイアサンの体を上から下まで切り裂いた。…が、

「つつ!浅いか!」

しかし、浅い。

「ぬぐううおお!!我が鱗ガアア!!」

下手にダメージが入った分余計に怒りに火が付いたようだ。余の

魔力もそこをつき始めたためひょうがも解除された、既にリヴァイアサンは海の中である。

表面だけは平静を装って余は静かに問う。

「その程度か、やはり海蛇よな、底が浅い」

あえて余は挑発する、これで引かねばあとは最終手段である。今も百万鬼夜行の効果は続いている、其処だけが頼りであるが。

『おのれ！この痛みと怒りは必ず晴らす！！我が牙が貴様を常にねらっていることを忘れるな！！！！！！』

リヴァイアサンは沖に向かっていく。∴虚勢は通じたようだ。

「……………つかれた」

余は疲れきつた体に鞭を入れながら帝都に向かう、妖力すら空に近いせいで飛行も安定しない。

ようやく館に帰った後も余には悪い知らせが待っているとは、今は考えてもいなかった。

強襲！イロコイ連合軍

強力な力をもった海竜リヴァイアサンをなんとか退けた。

外見は取り繕いまともだが内面はかなりキツイ、たったあれだけの全力戦闘をしただけで体力も魔力も妖力も空っぽ寸前だ。速く帰って寝たい所だ。

しかし、その願いは叶わない。館には今のウルフ族長リンディや悪魔神官長アークマなど、現在の首脳陣がそろっており、アークマが代表に報告をする。

「開拓村が襲撃を受けている！？」

どうも状況は休む暇をくれないようだ。

最初の襲撃から海竜撃退までがだいたい3時間もたっていない、余が出陣してから一時間程で開拓村襲撃の報が入り、それから次々と襲撃と援軍を求める伝令が入り続け、現在27の有る開拓村の半数に近い13の村がほぼ同時に襲われているらしい。

この情報を聞いた余は建国以来初めての総力戦を命じ、ウイグルの常備軍を各地に派遣させる。同時にドワーフ村やエルフ村をはじめとする各地に人数を出すように指令を出す。

軍の合流点はウイグル、帝都バーンにいたるには二方向を険しい山で囲まれるために海か、もしくはウイグルを抜いて来るしか道はない。仮に山越をするにしてもまずは山向こうの街を攻略しなければ補給が続かないだろう。

合流させた連中はある程度集まった時点で各地に派遣するしかない。戦力の逐次投入は下策だが攻撃範囲が広すぎる、魔力と体力はなんとかなるが妖力は自然回復を待つしかないので複数に散って同時に対処する事も出来ないし、もしリヴァイアサンや未だ姿を現さぬサラマンドルが出現した場合、余が相手をしないと対処出来ないために力を温存せねばならないだろう。

大体の指令を政権首班のリンディに伝え、細かい所を修正するよ

うに指示をして、余は寝室に向かう。

はつきり言えば限界である。風呂も着替えも無しでベットに倒れ込む。よく威厳を守って乗り切ったと自分を誉めたい。

…それにしてもダイも紋章が手にいった後ガス欠になっていたが、余も初めての全力戦闘で速攻でガス欠である。…実に笑えない。

なんとかしなきゃな〜と思ううちに…余は眠り…に…。

目が覚めたら一週間後の夜だった。笑えない。

起きた余が会議室にはいると待ち受けていたリンディから報告がはいる。

「敵勢は少なくとも十万を越えるか」

「はい、各地に現れた部隊を合わせるとそのくらいになる模様です」
十万か…少し多いか。まだ陥落した村は無いらしいが幾つかの前衛拠点は陥落したらしい。

「また、魚人軍もたびたび港を襲撃し、警戒のために帝都の軍を動かせません」

「ふむ…」

ここで説明だがバレンヌ帝国は常備軍1万5千、また総力戦体制においては5万近い兵力を投入可能だ。

しかし、臨時徴兵の兵士は常備軍と比べてやはり練度に差がある、敵が倍近い数だと厳しい。

「また、海竜などは確認されていません」

リヴァイアサンはかなりのダメージを食らっていたししようがないとしても…。

「ふむ…ふむ、サラマンドルとやらもか？」
と質問するが、

「はい、それらしい姿を見た者は今のところおりません」

うむ、最初のリヴァイアサンはまず間違い無く陽動だろう。しかし、なぜここまで姿を見せない？

「まあいい、でてこぬならそれはそれで好都合だ、詳細な敵種族はどうだ」

まあ出てこないならなにか理由があるのだろう。しかし、今は原因究明は不可能だ、余も何時正体不明のサラマンドルや復讐に燃えるリヴァイアサンを相手どらねばならぬかわからないため帝都を離れない、そのために情報だけでもは手に入りたい。

「バーン様からいただいたこの魔物事典によりますれば」

- ・シャーマン族
- ・ヴァンパイア族
- ・鬼面導師族
- ・くびかり族
- ・てつきゆうまじん族
- ・ライノソルジャー族
- ・ソルジャーブル族
- ・リリパット族

以上が主要構成の連合軍で自身の名前をイロコイ部族連合軍と名乗っていたらしい。

「……………もう一度言ってくれ」

「あ、はい。他にかいこつやくさつた死体、あとさまよう腰ミノやさまようかわの腰巻きなどを前衛にしています」

「がいこつは良い、くさつた死体も問題ない。…さまよう腰ミノってなんだ、さまようかわの腰巻きと違ってあれか、鎧が無いからか。余は変な想像をかき消し、後をまかせて会議室をさる。」

リンディ達は有能で部隊配置や政治などを任せても問題ない。余はリヴァイアサンクラスの敵を葬るための策を考えよう。

余の国の中では威力の有りすぎる超高密度魔法言語は使いづらい、勝った後に焦土しか無いでは意味がない。となると…

「極大消滅呪文…か」

みんな大好きメドローアである。しかし問題がある。

「右手は問題ないが左手は火達磨になるんだよなあ」

一度も成功したことが無い。理由は簡単だ。余は炎魔法と相性が良すぎるのだ。

最低出力のメラを使ってもマヒヤドを蒸発させてしまい、失敗してしまふのだ。

「あまり自信は無いがアレを使うか」

余は訓練施設内でおおきな袋から一振りの刀を取り出した。

様々な材料を合成機に入れれば、入れた材料はストックされる。

画面にはストックされた材料の名前が出てくる。それを利用しさまざまな鉱石を見つけていたが、そのときエビルメタル鉱石を発見したのだ。鉱脈が細いのであまり採れないが。

なんでもエビルメタルは黄金の爪などに使われている非常に強い金属らしい、余はそれを使いドワーフ達に一振りの刀を打たせたのだ。

もちろんただ打って貰ったのではなく、習得したい技が有ったからだ。

「余に、アバン流刀殺法が使えるか…」

アバン流刀殺法、ご存知勇者アバンが生み出した流派の剣を使った技で、勇者ダイや魔剣士ヒュンケルが使った事で有名だ。これに余の力と闘気を合わせればリヴァイアサンの敵も対抗出来るだろう。

「大地斬や海波斬は習得できたが、空裂斬がなあ…」

アバン流刀殺法自体は前から再現しようと思った時間で大地斬と海波斬は再現できた。しかし空裂斬はイメージしづらい、やはり目隠しで生活してみるか。

「四の五の言わずやるしか無いか」

袋からタオルを取り出し目を塞ぐ、そして、空裂斬を習得するためにそのまま修行をするのだった。

明かされる事実！サラマンドルが来ないわけ！

イロコイ連合軍との戦争は長期にわたりそうだ。

あれから一月が経過し戦線は膠着に持ち込んだ。余の修行と妖力回復をしたかったからだ。

戦闘自体は防衛側ゆえの地の利を生かしたゲリラ戦と防壁により各村の陥落は防げている。が、各地の補給線は寸断されており、気を抜いたら戦線は直ぐに崩壊するだろう。

リヴァイアサンは直接港に攻撃をして来ないが、余を海上に引っ張り出すためにハラスメント攻撃を続けられており、こちらも無視出来ない。

サラマンドルは相変わらず不気味な沈黙を続けている。何を企んでいるか解らないが、警戒をしなければならぬだろう。

さて、ここ一月で余は空裂斬を習得する事ができた。何が大変だったかといえ ば光の闘気である。

余は大魔王かつ妖怪ボデイなので正直暗黒闘気の方が馴染むのだが、空裂斬は相手の見えざる弱点を光の闘気で破壊する技のため光の闘気は必須技能なのだ。

余は大魔王かつ妖怪ボデイだが、心は元は人間であるし最低限の人間性を持っているハズなので頑張った結果光の闘気を身につける事に成功したのだ。

アバンストラッシュもA B両方が放てるようになった。

しかもこの一連の修行でパワーセーブはまだまだだが、今まで以上に瞬間最大闘気を増やす方法を思い付き、実現可能になった。詳細は戦闘中にまた説明したい。

最初に百万鬼夜行をしかけ、海波斬で省力化しながらウォーターカッターを迎撃しながらリヴァイアサンを誘き出し、誘き出した所に全力全開で最大出力のアバンストラッシュを叩き込めば、いくら奴が竜闘気に護られているとしても上手く行けば一撃必殺を決めれ

るだろう。

一月休んで妖力も全開したし体調も万全だ。今こそイニシアチブを取るときだ。

余は現在の軍の中で一番の弓手であるヒルドの小隊を最後の切り札として随行させ、余はリヴァイアサンとの戦いのために海へと出陣した。

港から船に乗り、しばらく沖に向かう。

「あのお、バーン様あ。私達ではあんな怪獣相手はムリですよ」

…まったく、この娘はいつもこれである。

ヒルドはエルフ族長のデイドリッドの三女だが、生まれてこの方魔法が成功したことがない。そのためか余ですら認める弓の腕を村一番程度と勘違いしている。

だが彼女の腕前は才能と努力により磨かれ、すでにバレンヌ帝国一である。具体的には弓版女ゴルゴである。

さらに彼女が小さかった頃に、デイドに相談を受けた余が訓練内容を見ていたためかなり良いはずだ。間違い無く国中で5指に入る実力者だが、その性格により誰もそれを生かせかないのだ。

この子は追い詰められなければ本領を發揮出来ない、だから間違い無く激戦の起こる余の近くに置き経験を詰ませたいのだ。

「ヒルドよ、今は余の戦いを見るだけでよい。だがいざとなれば頼むぞ」

その言葉にヒルドは緊張しきりの顔で頷いた。…小隊員でリンデイの孫のエリオに、そんなときは手のひらに入って書いて飲み込んだら良いと言われて実行しているが、それは違う気がする。

そんな光景を後ろに余は甲板を蹴って飛翔し、船から距離を取る。そして、大音声を上げる。

「余は大魔王バーンである！海竜リヴァイアサンよ、貴様の得意な海に来てやったのだ！余に挑戦してくるが良い！！」その声に答えたかしばらくたつと30メートル先にリヴァイアサンがその巨大

な鎌首を持ち上げた。

「おお、小さ過ぎて声を出すまで気づかなんだ。我の力に怯え陸上で縮こまっているかと思えば、なかなか肝が座っているな。その小さい体を肝ごと食らってやるわ！」

リヴァイアサンの体から竜鬪気が発せられプレッシャーがかかる。しかし、余は戦う前にきいておきたい事があった。

「まあ待つがよい、少し疑問なのだが良いか？」

リヴァイアサンは竜鬪気を撒き散らしながらこちらを伺うが、その口を開ける。

「ならば冥土の土産になにか一つ質問に答えよう」

「簡単な事だが、サラマンドルは何故出てこぬ？貴様の同盟者なら貴様と同じくらい強いのだろう？それが何故出てこない」

その言葉にリヴァイアサンは何でもないことのように言う。

「何だ、そんなことか。ならば答えるが妻は出産後に少し体調を崩してな、今休んでいる」

.....はい？

決着の時

産後？…へ？…サラマンドルって火竜じゃないの？いや？はえ？
こ、混乱している！〜13までの思考をカット。

う、うるたえるんじゃない！大魔王はうるたえない。

情報を纏めよう。

・リヴァイアサンとサラマンドルは夫婦。

・サラマンドルは産後の肥立ちが悪く戦に出て来てない。

「うむ、一年前ゴロに産気づいてな。二月前に可愛い卵を生んだは
良いが肥立ちがな」

「ああ、そうか」

どうしよう、かなり気まずい。…まあ今更休戦してサラマンドル
が復帰しても困るし、リヴァイアサンは今倒すのがベストだろうが
…。

「プロポーズはかなり緊張したが無事に受けてもらえたし、我は幸
せだった」

語りはじめやがったし、決心が揺らぐ前にやってしまおう。…余
は進しか道が無いのだ。

「もう良い、だいたい解った。」

語りを遮った余にリヴァイアサンは不服そうに自分で頼んだくせ
にと呟くとこちらに向き直る。

「ふん、とりあえず冥土の土産に満足したようだな。ならば心安ら
かに死ぬが良い！」

リヴァイアサンが吼えると同時に口の中から光が溢れる。…まさ
か！

「喰らうが良い！！コレが我が奥義！！竜闘気砲だ！！！！！！」

リヴァイアサンが吼えた瞬間光が余に向かって来た。

「あぐうう！！」

光が見えた瞬間から高度を上げていたが、膝から下が光に飲まれ

消し飛んだ。回避仕切った瞬間にベホマをかけて回復する。魔法力はエルフの飲み薬をいっぱい持ち込んだ為に余裕がある。魔力を消費しても妖力と闘気を温存する。

ここでリヴァイアサンは海中に潜り始める、おそらくはまた海中からのウォーターカッター作戦だろう。しかしあれをやられる前に余は百万鬼夜行を展開する。これでリヴァイアサンの生命力を能力で散らすのが先か、それとも余がかわしきれずやられるかの勝負になる。

百万鬼夜行の効果は直ぐに見れた。明らかに弾幕量が下がっている。しかし何本も水塔が立ち、弾幕は高密度な事に間違いは無い。

余はエビルメタルで作り上げた愛刀三枚卸しを逆手に持ち、回避しながらアバンスストラッシュの待ちに入る。

最後のダメ押し of 闘気増加手段は一気に闘気を消費する。例えば電気自動車のガソリン消費量とV99気筒エンジンのガソリン消費量くらい違う。つまりほぼ一瞬くらいしか持たない究極の手段だ。

だがこのくらいしなければ一太刀で絶命に追い込むのは難しい、ミッシングパワー+カラミティエンドでは少し力不足…いや射程不足であった。この技法の集中力が高いためミッシングパワーを併用は今は無理だ。だから一瞬の隙が欲しいが…。

…すでに何分たっただろうか。すでに一時間以上リヴァイアサンがずっと私のターンだ！と言わんばかりに空中に出てこない。やはり《ひょうが》を気にしてるか。

弾幕の壁にカイザーフェニックスを打ち込み一瞬隙をつくり、エルフの飲み薬を使用。危なかった魔力が完全回復するが、精神的な回復は無い。そろそろ焦って出て来て欲しいが…と、余が見ていなかった一本からリヴァイアサンが飛び出す！

余は迎撃体制を取ったが、やはり一瞬が足りない。

リヴァイアサンの牙が余に迫り…。

視点変更、ヒルデガルド

私は仲間ハズレにされていた。理由は簡単、エルフのくせに魔法が使えないからだ。

母デイドや二人の姉はとても魔法が上手いし、父は優秀な自由騎士だ。家族は私に優しいが、私は自分をみそつかすだとしか思えず、勝手に独りで傷ついていた。

そんな時、あの方にであった。私達を生み出し、護り、導いていくあの方。大魔王バーン様である。

バーン様はとても小さいがとても強く、様々な事を知っておられる素晴らしい方だ。そんなバーン様はいつも泣いていた私を慰めてくれた上に、生きるアドバイスをくれたし、更にとても凄い魔法の言葉を教えてくれたのだ。

「なにヒルド？魔法がまつたくつかえない？ヒルド、それは魔法以外にとても凄いことが出来るようになるからだよ。逆に考えるんだ、「魔法を使わなければ良い」と考えるんだ」

私にとって魔法が使えない自分は無価値だった。しかし、この言葉は私の価値観をふつとばしたのだ。

私はバーン様に弓なら使えろと一生懸命アピールした。そしたらなんとバーン様に訓練していただけたのだ！

バーン様の訓練はおつきい岩を弓で射抜けとか、ベギラマを弓でかき消せとか、ゴーレムの核を闘気を込めた矢で貫けとか、教えた三種類全部の技を一矢にて放てとか、かなり大変で全部出来るようになるまでに《一週間》もかかってしまった。

たまにバーン様が首を傾げていたのは何だったんだろうか？

たった一週間だったが夜になると、バーン様は私にいろんな御伽噺をしてくれた。りゅうのお話だったり猫の神様のお話だったり色々な、聞いたことの無いお話しをしていたのだ。

最後の日、帰る前にバーン様は私に魔法の言葉を教えてくれた。「つらいことや、苦しいこと、様々な試練がお前を襲うだろう。だが負けるな。この言葉は何の力も無い、自分を騙す事しかできない

言葉だ。しかし、嘘は最後まで突き通せば本当になる。嘘と嘘がぶつかったとき最後に残った物こそ真実なんだ」
その魔法の言葉は、

「だからどうした」

「余はこれで帰る。…頑張れ。絶対負けるな」

私は挫けそうになっただけならいつもその魔法を使い乗り越えてきた。だから…。

「隊長！こんな波の中で援護て無理ですよ！安全な所に下がりましたよー！」

エリオ君が何か言っているが「だからどうした」。

「危険過ぎるぜ、あちこち飛んでる水を食らったら死んじゃうぞ！」
従軍神官の「アミ」バが何か言っているが「だからどうした」

「私達の力では手も足も出ません！悔しいけど足手まといになるまえに引き上げましょう！」

ウルフ族のスバルが何か言っているが「だからどうした」

私は今バーン様の為に海竜に一瞬の隙を造るためにいるのだ。この弓を打ち続けた日々は無駄じゃない。この程度のことには出来て当然だ。

「その答えはYESである」

いつか聞いたことのある声が聞こえた気がしたその時、水塔の一つからリヴァイアサンが飛び出しバーン様に襲いかかった。

今、この瞬間こそ最大のチャンスだ。

「バーンストラッシュウー！」

私の全身全霊を込めた矢は放たれた。全てを使い果たし、へたり込む私の耳に、気のせいだろうか空に穴が開く音が聞こえた気がした。

視点変更、バーン

余が振り返り、最終手段を発動させようとした瞬間、飛来した矢は見事にリヴァイアサンのくちを閉ざし、頭が衝撃で上を向いている。この隙を待っていた。

「左手に暗黒闘気、右手に光の闘気……！」

このフリーズで気づく人は余のする事に気づくはずだ。たしか余の生前の偉人もいつていた。「光と闇が合わさって強く見える」と。光と闇の対消滅に伴う莫大なエネルギーが余の体の隅々まで広がる。そのエネルギーを三枚卸しに込めて精神を鎮め解き放つ！

「アバン、ストラァーッシュー……！」

……そして、その一撃は見事にリヴァイアサンの首を跳ね飛ばすのだった。

「……終わった……か」

一瞬で大半の闘気を消費したせいかわ、少し虚脱感がある。下を見ると収まってきた波の中をガレオン船がむかつてきている。

その舳先で手を振るロリ巨乳エルフ・ヒルデガルド - を見つけ降りていく。あやつが殊勲賞だな、と考えながらも余の心は次の戦いを想うのだった。

戦いは続く

リヴァイアサンを下し一息ついた余だったが、戦争はまだ終わっていない。むしろ夫を殺されたサラマンドルの猛攻も考えられる。戦いは一つの節目を越えたが、激戦は続く。余は攻勢に移るために軍備を整えるのだった。

…時はたち、あれから10年。戦線は一進一退の攻防が繰り返されていく。

意外だがサラマンドルは積極的に前線に出て来る事はなかった。しかし、余が前線に出ると必ず現れては被害を増やすのでなかなか前線に出れない。だがあやつが出るときは余も前線に出陣し、被害を増やした。

サラマンドルは火竜で間違いなかった。色は意外だったが蒼かった。これは赤より熱い色だからだろうか。

性格はクールタイプでリヴァイアサンのように熱くならないので、とことん退き際を見定めるやつだった。

あやつと余は12戦12引き分けと、完全に互角に近い戦いを繰り返した。理由は簡単、周りの被害を気にしてお互い全力が出せないのだ。

何度か戦う度に少しずつ話をしたが、あまり余を恨んでは居ないようだ。弱肉強食はしょうがないと割り切っている。

あと卵がまだ孵らずにいるため心配しているが、卵が生きていることは解っているそうだ。

サラマンドルやリヴァイアサンは所謂能力持ちらしかった。今は亡きリヴァイアサンは《海を操る程度の能力》、サラマンドルはな

んと《核融合を操る程度の能力》だそうだ。おかげで全力戦闘時の対処法はまだ考えつかない。

血液も魔界のマグマと同じ成分だとかでなお悪い。しかし、戦局全体はは余の方に傾いてきている。

確かに総兵力はあちらが上だが、継戦能力の差が顕著に出始めたのだ。

バレン又帝国は前線に出る兵力は半分程だが、生産力をあまり減らさずに戦争を毎日でも行える。しかし、あちらは兵力が狩人や農民の男性が基本で、常備の戦士階級や祭司階級も、余の常備軍より数も練度も装備も水を開けていた。防戦中も出陣して後方への浸透でゲリラ戦をし続けて、一年中プレツシャーをかけ続けた。

一年二年ならば生産力が減ってもなんとかなっただろう。しかし、10年もほぼ農繁期ですら休ませずに戦いを強要した結果、イロコイ連合軍から脱落していく部族が出始めたのだ。

余は政戦両略でイロコイ連合軍を切り崩し、あるいは踏み潰し、あるいは寝返らせて戦い続けた。そして、遂にサラマンデルの本拠地、いまのイエローストーン自然公園にあたる場所に聳え立つ、恐らくは天地魔界最大の火山、グレートボルケーノにたどり着いたのだった。

超巨大火山の麓にはイロコイ連合軍の残党、シャーマン族の部隊が展開している。この一戦が終われば、少なくともこの大陸には余を脅かす勢力は存在しなくなる。だが、余はサラマンデルを倒せるのだろうか。

近くにいるヒルド小隊を見る。10年の激戦で誰も喪わずに成長していった。皆は真っ直ぐにイロコイ連合軍を見つめ、何時でも開戦出来る体制で待っている。

彼女達はこの十年で驚くほど成長した。ヒルドはアバン流は武器を選ばないと思い出し、自分なりに解釈したアバン流弓殺法を驚くほどの速度でマスターし、次々と敵を倒し、広い視点で部隊を指揮して戦果を挙げていった。ただ、なんか偶にだが、飽くまでも偶に

だが、絶技を使っている節がある。頭の上にW T Gでも開いたんだろつか。…まさか…ねえ。121才、ロリ巨乳。

遊撃でリンディの孫のエリオは愛槍ストラダと共に戦場を駆け抜ける魔法戦士だ。アバン流槍殺法と雷系で敵を倒す様は、まるで無双ゲームみたいだった。婚約者のキャロとルー…え〜つとル・ル。ル…ああ、ルー子がいるが、部隊の大半から狙われている。20才、そろそろ大人の階段を上り、墓場まで一直線コース。

前線で一人で壁を張るスバルは細いくせにひたすら頑丈だ。解らなかつたブロキーナ流は教えなかつたが、何故かオーラナツクルを覚えていた。…この子はあんまりかもつて無いのになあ。25才、戦闘機人ではない。母に結婚について押され、エリオが気になるよっだ。

従軍神官のアミィバ、彼女は神官として、またかなり大変凄腕の医師でもある。様々な医療技術を最前線で行い、沢山の者を助けている将来有望な子だ。ただ、医療中に「ん〜？間違つたかなあ〜」と言うのは止めて欲しいし、患者さんを木偶と呼ぶのはツンデレだと信じたい。

257才、最近エリオに素顔を見られたとかで騒いでいたが、素顔を見たところで減るもんでも無いだろうに。

魔法火力担当のクピピ。タルタルの彼女は高いセンスを有する魔法使いだ。なんとメドロアを習得したのだ。ただ、燃費の所為で一発しか撃てないらしいが。29才、崖っぷちが近づいて来た所為か、エリオを見る目が肉食獣だ。

敵勢一万少々、対する余の軍勢は抑えを残して一万五千、精鋭を集めた彼らの役割は余を火口まで戦闘させずに到達させることだ。

その後、余とヒルド小隊でサラムンドルを討つ。簡単な作戦だ。…しかし、大魔王がパーティーを組んで竜討伐とは…。

余の軍勢から突撃の喇叭が吹き鳴らされチョコボ騎兵を先頭に突撃する。イロコイ連合軍はシャーマンがアンデットを作り上げ迎撃する。

…余のこの大陸に置ける最終戦争が始まったのだった。

蒼火竜サラマンドル

火山の麓で二つの軍勢がぶつかり合う。一つは立ちふさがる敵を倒すため、もう一つはそれを阻むため。二つの意思はぶつかり合い、せめぎ合う。

ただ、共通していることは、互いに大事な何かを守るために戦っているところだろうか。

そんな事を考えながら余は愛チヨコボを走らせる。戦闘はすでに佳境にはいり、余の軍勢の先手は敵本陣にチェックをかけている。あとは乱戦に持ち込み、敵本陣をすり抜けて、火口に向かえば良い。余の後方に少し遅れてヒルド小隊が付いて来る、余も含めて皆が赤チヨコボに乗っている。

グレートボルケーノは超巨大火山であり、今なお各所で爆発的噴火を繰り返している。徒歩ではなかなかたどり着けないし、飛べば若干ながら妖力を消費する。

そのため、数が少ないが、山や崖を問題無く移動できる赤チヨコボは最適な移動手段だったのだ。

敵陣を突破し、火口を目指す。追っ手が放たれたがエリオとスバルがブロックする。

サラマンドルとの戦いは火口で行われるはずだ。その際飛行手段のある余はともかく有効打を期待出来るのは、メドローアを使えるクピピと強力な弓手のヒルドだけだ。アミィバは余達の回復リソースだ。ボス戦で回復役無しとか縛りプレーはいらない。だから比較的手の開いているエリオとスバルは追っ手を食い止めるために残ったのだ。

赤チヨコボの強靭な脚力は、走りづらい山肌をまるで平原を行くかのごとく進む、途中少し休憩を挟んだ余一行は遂に火口に到達した。

あまりの高さにかなり酸素が薄い。火口自体もまるで地平線が見

えそうなサイズだ。

その巨大な、巨大すぎる火口には並々とマグマがたまり、あちこちで小爆発をおこしている。

火口の中心にかなり大きな島があり、そこに蒼い鱗の巨竜がみえる。……………あんにやろう、寝てやがる。

うーん、真ん中まで行ける石橋が有るが、マグマの所為で気温が高すぎて余以外は渡れそうにないなあ。まったく、仕方ない。こやつらは援護のためにここで待機させるか。

ヒルド達を残して余は飛んでいく。他の奴なら熱さでスタミナが削られそうだが、灼熱地獄でも活動可能な鬼ボダイの余なら、魔界のマグマがかかってても熱いお茶がこぼれた程度のダメージだ。

しばらく飛んで島に到着、まだサラマンドルは起きない。寝起きが悪いらしいがここまでひどいとは…。

今のうちに島を確認する。と言ってもテーブル場のデカイ岩があるだけだ。

島の中央部に白い卵が一つある、あれがなかなか割れない卵らしい。…まあ、余が勝った後で無事なら余が世話をしよう。

はあ、やることがないし起こすしかないか。息を吸って…。

「こら〜！！早く！！お！き！ろ！〜！！！！！！」

ふう、サラマンドルの方に目を遣ると目が覚めたらしくもぞもぞした後、大きな欠伸をしてこちらを見る。

「…ん…バーン…か、ちよっと待って…今…起きる」

完全に目が覚めるまでにまだ時間がかかったと言っておく。

「やあ、小さな大魔王。ここまで来たって事は遂に決着を付けるときが来た、ってことだね。キミと喋るのも最後かと想うと寂しくなるね」

「それは余とて同じ事よ、奇妙な友情を感じる相手だ、やはり余の部下にならんか？」

余の最後の降伏勧告にサラマンドルは少し寂しそうに頭を横に振る。

「残念だけどね、誇り高い我々竜族は最後まで戦って死ぬのがモツトーなんだ。だからそのお願いは聞けないな」

「そう…か。残念だ。」

「ただ、一つ良いかい？」

「ふむ、何か言い残す事でもあるか？」

余の言葉にサラマンドルは頷いた。

「この子のこと頼んでも良いかな、たぶん私は負ける、けどそれは良いんだ。私がキミより弱かっただけだから、ただ、この子の事が気になってね」

「良かるう、バーンの名においてこの子を立派に育てると誓おう」

その言葉を聞いたサラマンドルは空を見上げる、相変わらず真っ黒な空だ。帝都なら偶にだが星や月も見えるが、ここは噴煙で何も見えない。

「ああ…、安心した。」

その言葉と共にサラマンドルの身体から力が抜け、地面に倒れる。「貴様やはり身体が…」

かつてリヴァイアサンは言った。妻は産後の肥立ちが悪かったとドラクエ？の光の玉をくれるドラゴンもりゅうおうの卵を産んで亡くなった。恐らくは自らの生命力を卵に引き継ぐ為だろうが、それで燃え尽きたのだろう。眠ってばかりだったのも最期の力を温存するために、本能でやつついたらだろう。

「…残念だよ、ホント。死ぬときは…戦いの中って決め…て…たのに」

…麓のシャーマン族もたぶんサラマンドルの最後が近いと気づいていたんだろう、だから、最後の敵だけを通すために、またサラマンドルに殉じるために、戦いをしていたのだろう。

「…さあ、私の…頸をとってくれ…」

逝きそうになるサラマンドル、だが余は慌てて止める。

「待て、この子の名前はなんだ」

サラマンドルはキョトンとした後苦しげにわらう。

「ククツ…まだ…考え…てなかった…よ。ま、間抜け…な話だ。
………頼む、君…がき、決め…てくれ、私に…は時間…が…無い」
最期に近いサラマンドルに近づく。名前は…後で考えよう。

「そう…君の…手で死にたい…んだ」
ミッシングパワーを使いながら闘気を合成する。妖力をすべてミッシングパワーにつき込んだ余は、サラマンドルとほぼ変わらぬサイズになる。

サラマンドルは目を閉じている、狙うのは首だ。

「カラミティエンド！」

爆発的な余の闘気はオリハルコンを切り刻む最強の剣となり、サラマンドルの頸をはねた。最後にリヴァエアサンと眩き、首も動かなくなった。

サラマンドルの死体は燃え上がり、焼き尽くされていく。そして炎が消えた後に一組の石が落ちていた。余はそれを拾い上げ卵に近づく。

「…熱いな」

卵を持ち上げておおきな袋にいれる。

待っていたヒルド達には戦闘終了を知らせるために麓に向かわせ、余は帝都にルーラした。

帝都に帰った余は館の合成機の前に立つ、普通的手段では子の卵は孵らないと直感したのだ。

話を変えるが、竜の騎士は何で構成されていただろうか。竜の肉体と魔族の魔力、そして人の心である。

余は合成機の前で手首を切り、余の血液を有るだけ注ぐ。ふらつく所からベホマをかけて血液のみを回復させる。…我ながら器用だとおもつ。

それを魔力が尽きるまで繰り返し、卵を入れる。これで竜の肉体を持つ卵に魔族たる余の魔力と、人としての心が入るはずだ。

合成機が動き出す。その光景をぼくとした頭で見る。しばらくすると合成機から女の赤ん坊が出てきた。

金の髪を持つその子を余は胸に抱きかかえ、メイド達に服を用意させ、着替えさせてから族長達の待つ会議室へと向かう。

会議室に入ると一斉に視線が赤ん坊に集中する。代表でリンディが余に問いかけてくる。

「あの、バーン様。その赤ん坊はいつたい？」

余は皆に告げる。

「この子は余の血を分けた娘だ」

会議室に沈黙が漂う、真っ先に回復したのもリンディだった。

「恐れながら、お名前は？」

余は歩きながら考えた名前を発表する、この金の髪に存在する立派なあほ毛はこの名前しかないと思っただのだ。

「この子の名はアルトリアだ。大魔王たる余の娘、竜王女アルトリアだ。」

この宣言に会議室の者達は様々な表情でリアクションをしてきていた。

月日は過ぎゆく

アルトリアは可愛い。

開幕からとばしているがなんかそれで良い気がしてきた。

余もすでに500歳オーバー、自分のお腹を痛めた訳では無いがアルトリアの一挙一動が可愛くて仕方がない。

流石に母乳は出せないから乳母をウルフ族から呼んだ。

まあ、夜泣きやらなんやらも有ったが、余の分裂3交代作戦で問題無く対応できた。

しかし、余の想像をしないトラブルが余を襲った。あんまりにもアルトリアを猫可愛がりしたもんで悪魔神官達が諫言してきたのだ。「バーン様、お子様が誕生してはしゃぐ気持ちは良く解りますが、あまりの可愛がりすぎは逆にストレスになってしまいますぞ。少し御自重された方が…」

むう…確かに一理ある。しかし、まだ乳離れもしてないのにそんな…ねえ。

「乳離れもされておられぬ今はともかく、将来的には甘やかしすぎはアルトリア様ご自身の為にならぬかと思考します」

「た、確かに魔界は甘えん坊が生き抜くには辛い。それでも余も親だ、愛情を持って子供に接するのが当たり前だろう?」

余の苦し紛れも通じない。むしろとどめを食らった。

「それはその通りです。しかしよろしいのですか?」

「い、いつたいなにがだ?」

「将来構い過ぎてウザイとか言われても」

…この言葉に余は敗北した。かまいたいけどウザイは嫌だ。

だから余は悪魔神官に教育係的なじいを派遣するように命じた。

そこで余は気づいた。いや、気づいてしまった。この子も成長し、いつかは誰かを婿に連れてくるんだろうと。

むう…仕方が無いとはいってもやはり寂しいし悔しいし、まだ生

まれたばかりなのにすでに結婚式の親の気分だ。

………さてよ、成長するからどこぞの馬の骨にかっさらわれるんだ。ジョースター卿も言っていた、逆に考えるんだ。ならば逆に考えれば育ちきる前に成長が止まれば良いんだ。たしかカリバーンを抜いたからアルトリアは王として不老になっただよな。余にはインチキマシンの合成機が有る、本人が生まれるくらいなんだから別に宝具くらい作れるはずだ。…なに、子供の成長する権利を妨害していいのかって?…ここは魔界、何時でも悪魔が微笑む時代なので問題ない。…早めに余が親の敵ということもつたえないとなあ。

さて、決めたからには早速行動有るのみだ。戦闘力は低いがとにかく大量にそれっぽい分身して材料を集めよう。

考えられる材料は刀身にはオリハルコンだろう、鞘は光の鎧にも使われていたブルーメタルで良いだろう。まあ、それだけでは足りないからいろいろレアな材料を合成機に突っ込んでいくことになるだろう。

すでにこの大陸における覇権は握った、ならば10年かそこらは自由にアルトリア専門の時間とさせてもらおう。

そして月日は無情に流れていった。

余の娘アルトリアは赤ん坊から成長し少女になった。

ぶにぶにのほっぺはすべすべ滑らかに、手足もスラリと伸びた。

昔は余を見上げていたのに今や余が見上げるようになってしまった。…胸も負けた。

「どうしました?母上」

決意の日から14年、余は結局ほぼ付きつきりでアルトリアと行動を共にしていた。

アルトリアも小さい頃は何時も余について来たがる子だった。やはり美味しいモノを食べるのが好きなアルトリアのために料理スキ

ルも鍛えまくった。

剣術を始めとする戦闘術や政治経済など帝王学も余が手ずから教えた。剣術修行の間のキリツとした表情は格好良かったし、帝王学の勉強中の真面目な表情はたまらない。

研究所に大金（予算10倍）を払い急いで（5徹6徹当たり前）作らせたカメラで色んなアルトリアを写した。ニコニコしながらついてくる小さいアルトリア、シヨックを受けた時に一緒にしおれるあほ毛、初めてのおねしょ、様々な物を写し、大体月産アルバム1冊のペースでアルバムは増えていった。今は動画を撮れる映像スフィアを研究させている。

「母上？…あの、どうしました？」

10歳の誕生日、余は遂に本当の両親のことと、両親の敵は余だということアルトリアに伝えた。アルトリアはシヨックを受けて部屋から出なくなった、余もダメージを受けて寝込んだ。その後色んな騒動があり、アルトリアは余を受け入れてくれた。あの日の出来事を思い出すと今でも涙が出てくるくらい感動した。

「や、やはりこのような可愛い鎧、私には似合わないのですね…」
ああ！つい回想に耽っていたらあほ毛がしんなりしてきた！

「そんなことは無いぞ、余の可愛いリアよ。余がデザインし、現代最高の鍛冶師が鍛えたお前のための鎧だ、お前以上に似合うものはおらぬ。さあ、帝都の皆が待ちわびている、その姿を見せてやるが良い」

その言葉を聞き、安心したようにアルトリアは微笑む。

鎧は原作の青い鎧だ、ちなみに他に黒と白と赤がある。

鎧もかなりレア素材を使いまくった。本体部の基礎は光りのドレス、青いところは糸状に伸ばしたオリハルコンとブルーメタルで籠手はミスリル製だ。刺繍は余が様々な呪文を縫い込み対魔力をさらにあげている。

今日はアルトリア14歳の誕生日、そして初陣の日だ。今日のために建設させたコロッセウムにて余とアルトリアは中央部に立つ。

スタンドは満席、さらにコロツセウム舞台の下にも席を設けたが
そちらも満席だ。

何十万の瞳に余とアルトリアはさらされている。余は慣れたもの
だがアルトリアは流石に緊張している。

余が手を上げるとコロツセウムのざわめきが消えた、典儀官がこ
の舞台の題名を上げる。

「これより偉大な大魔王たるバーン様による御息女アルトリア様の
騎士叙勲の儀を執り行う」

その言葉と共にアルトリアが余に跪く。…ここが痛い。

「…余の娘にして王女アルトリアよ、汝はこれより余に忠実な騎士
として、《永遠に》余に忠誠を誓うか？」

余はアルトリアに問いかける。あと《》の中が一番大事なのは言
うまでもない。

「はい。私アルトリアは娘として…騎士として母であり大魔王たる
バーン様に永遠の忠誠を誓います」

よし！言質は取った。あとは剣を渡すだけだ。典議官が赤い布に
被われた一組の剣を持ってきたので受け取り、布に被われたままア
ルトリアに突き出す。

「ならば余はその忠誠を受け入れよう、この剣はその証だ、受け取
るがよい」

アルトリアは受け取った剣の布を取り払う、共に青と金の鞘。引
き抜く刀身は黄金色。

《勝利すべき黄金の剣》カリバーン

《約束された勝利の剣》エクスカリバー

誰もが知っているだろう宝具だ、一組両方造るのに国家予算並み
に物資をつぎ込んだし見つかったオリハルコン鉱脈も使い切った。
だが余は反省していない。

アルトリアが両方の剣を高く掲げると共に言い放つ。

「誓約は成った、私は大魔王バーンの娘にして剣！私こそ竜王女ア
ルトリアだ！」

瞬間、コロッセウムを中心に爆発したかのような歓声が帝都中に響いた。

それから1500年と忠臣ゲット

さて、唐突だが時間がめちやくちや飛んだ。なぜならあまり動きがなかったからだ。

この間はたいてい北バレンヌ（現実の北アメリカに相当）全土への入植と開拓、カリブ諸島の領有くらいしか動きを取れなかったからだ。

何故これほど時間がかかったかと言えば、今は亡きサラマンドルの住処だったグレートボルケーノの所為である。

サラマンドルが死んでからあの火山は割と頻繁に大噴火を繰り返したのだ。

その火山灰は帝都にまで達し様々なところで有毒な高温ガスによる被害が続出し、対応に時間がとられまくったのだ。

しかも一度は余に恭順した元イロコイの一部が、この噴火をサラマンドルの怒りとして反乱したのだ。

その鎮圧はアルトリアに任せたが（余は怪我をしたりしないか心配だったが、経験を詰ませた方が良くと思う悪魔神官に説得された）、噴火が起こる度に反乱や街道が寸断されたりで全く開拓が出来なかった時期が500年くらい続いた。

その500年の最後の噴火はシャレに成らなかった。大陸全土を破壊するかのような噴火は、帝都でもマグニチュードが計測不能という余の人生の中でも聞いたことのない大震災を引き起こし、余の城以外は瓦礫の山となり、備蓄の食料などが無ければ完全に国が崩壊しかねない大打撃をうけた。

その復興にまた100年ほどかかった。その後グレートボルケーノを見に行つた余とアルトリアは驚愕した。なんと火山が完全に吹き飛んでいたのだ、比喻ではなく根本から丸ごとである。

グレートボルケーノのあった所には巨大すぎるクレーターとあちこちに残る数百メートルくらいの岩山：火山のかけらである。正直

あんなもんが帝都に降らなくて助かったと思つた。

グレートボルケーノ跡はその後冷え、小規模な火山こそ残つた物の、衝撃で盛り上がったクレーター外円部は優秀な鉱床が多数発見されたし、クレーター内部も少しずつ草や木が生えて来たため様子を見ながら開拓を進めた。

その後余が率いる近衛軍は中部バレンヌ（メキシコあたり）を制圧し、アルトリアの開拓軍は北バレンヌ中部を進軍、諸部族を征服し遂に西海岸に到達した。なお、この開拓軍を率いるアルトリアには余が信頼出来るヒルド達もつけたし、手乗りサイズの余がアルトリアの荷物に混ざっていたのも言うまでもない…見つかったときアルトリアに苦笑されたが。

その後は開拓軍は現実のサンフランシスコの有る場所に開拓都市アルトリアを建設。その開拓都市アルトリアはさらなる開拓の最前線として機能し続け、アラスカ地方開拓など、西から北バレンヌ大陸を開拓していった。

一方の中部バレンヌを狙う余の目標はパナマである。開拓都市を西海岸に建設するためには大量の資材が必要だ。

チヨコボ鉄道や最近完成した魔列車などの陸路の輸送手段もあるが、やはり一番輸送力があるのは海路を使った輸送だ。

東海岸からの海路はパナマ運河の有無が大きく左右するため、余はアルトリアより早くパナマに到達し、運河採掘を始めた。

ミッシングパワーでデカいスコップやツルハシをふるい、邪魔な岩をイオナズンで吹き飛ばし、山は能力で散らし、カラミティエンドで邪魔者を切り刻み、土砂は纏めて萃めておいてあとで巨人達が片づけ、都市と港湾と要塞建設に使っていた。

能力と魔法を使いまくっていた所為で何時の間にか妖力や魔力や闘気量が爆発的に増えていた。おかげで、よほどの長期戦でなければガス欠は無くなつた。

何故ここまで急いでいるかというところまで解っているかも知れないが、アルトリアのためである。

開拓軍が行軍中は食料はもちろんあまり美味しくないレーションである。さらに、本来なら降伏した集落で宴なども開けるかもしれないが、大噴火と大震災でどこの村も逆にレーションを配給したら大喜びするくらいで、宴を開く余裕はない。

アルトリアが食事の度にあほ毛がへんにやりして「また：レーション…」としよぼーんとしてるのを見ると思うと、胸が張り裂けそうだ。

開拓都市を作り、そこに港を建設すればこのパナマ運河を使って、帝都から様々な食料を初めとする資材と人材を派遣できるのだ。アルトリアの為ならば多少の苦勞も嬉しいものだ。

そんな感じでまずは北バレン又全域を支配下におき、パナマ要塞を南バレン又大陸を征服する拠点として整備した。

ジャングルや高い山々など今まで以上に征服までの道のりはキツいだろう。だからこそエルフのレンジャーや地質学者を密かに送りこみ、地図や対ジャングル戦闘の経験を詰ませた。

解ったことは南バレン又全域に巨大国家マチュピチュがあると言うことで、黄金の飛空艇などの様々な兵器や魔界の神への信仰などのある中央集権国家である、と言うことだ。

もしかしてオーパーツ文明なんだろうか？かなり手ごわい相手になりそうだ。この2000年期は彼らとの死闘を繰り広げる事になるだろう。

それはそうとして、余がパナマ運河を作っている最中にあるモノを拾った。

地下から噴き出した障気溜まりからソレは産声を上げた。そして手近な生命に取り憑こうとしたところで余が捕まえて屈服させたのだ。

大分原作より早いとその暗黒生命体を余は《ミスト》と名付けた。まあ多分間違いは無いだろう。

ミストには取りあえず余の分身の一つをあてがい身体とさせたが、やはり専用ボディを与えたい。

そこで余が目を付けたのは口ト紋の異魔神ボディである。あれは世界樹のエキスから創られて、無限の再生力をもつスーパーボディだ。あれに凍れる時の秘法を使えばまさに無敵だ。

世界樹自体は征服した部族の一つに生えていたので（ブラックマ―ジ族）二株もらい（普通のと何故か白いの）、それを帝都で育てていたためにエキスを取り出すことはできる。

後は合成機にて暴走しそうな所をパージして、本来のバーン様の姿を模して造り上げた。

さらにパワーアップのために、サラマンドルが落としたり石を埋め込んだりと、乗りについた研究所の連中といじりまくった結果がこれだよ！。

まあ、そんな感じのボディを作りミストに授ける。感動し、更なる忠誠を誓うミストに余は影武者としての名前をつけ、ミストバーンと名付けた。

将来転生者達にはミストこそ本物のバーンと信じるだろう、しかしそこが余に有利に働くのは間違いない。

余は地上に出た後をシミュレートしながら、南バレンヌ大陸を眺めるのであった。

番外編 あの人その後と現在のバーン様たち（前書き）

今まで出てきたキャラのその後のダイジエストです

番外編 あの人その後と現在のバーン様たち

ウルフ族

・アルフ：初代ウルフ族長。姉御肌というか親分肌というかとにかくサツパリした性格。

誕生してから60年の間ウルフ族長としてよりメイド長として、影に日向にバーンと苦勞を共にしてきた。

64歳の時に引退するもご意見番として影響力を発揮していたが、障気嵐に巻き込まれ魔獣化、バーンに討たれる。

墓はバーンの城の近くにある。なお、旦那の名前はザフィーラ。

・リンディ：激戦だったイロコイ戦争において政権首班として活躍した。

直接戦闘より魔法戦闘が得意で、政治工作も得意だった。彼女の手腕はバーンも信頼しており、国家運営方針の骨子を組み立てた後の肉付けは彼女に任せっきりだった。

リンディ茶と若さは最後まで健在。最後は曾孫に囲まれて亡くなった。享年77歳。

・エリオ：リンディの娘フェイトの息子。《絢爛舞踏》ヒルデガルドの小隊員で遊撃役。

婚約者二人のプレッシャーが怖すぎて逃げるために9歳から従軍した。

10年に渡る激戦を生き抜き魔法戦士として開花した。

戦争後はヒルド以外の小隊員がハーレム要員と成っていたので、勝利の宴の時に喰われた。もげる。

その後は家庭と軍務を両立し、近衛軍司令にまで昇進したが58歳の発情期に腹上死した。

・スバル：いつも元気一杯な前衛役。お姉さんのギンガも軍人で彼女に憧れて軍に入った。兄は野球選手になったがあまり興味が無かった。

基本猪突気味だったが、ヒルドたちの注意を受けて改善し始めた。何故かオーラナツクルを習得しており、近接戦は彼女の独壇場だった。

戦争後はエリオの所に押しかけて結婚に持ち込み、一杯子供を生んでいた。

彼女は海に目覚めたらしく同志と共にバーンに直訴して海賊ウルフに進化した。

海軍提督として同志で兄の親友のカツヲイソノと共に様々な航路を開拓した。

享年69歳。

悪魔神官族

アークマ・デテクール：初代悪魔神官長で熱烈以上の狂信者。

悪魔神官教典や隠された秘伝の悪魔神官十ヶ状などを作り上げた。

さらには過酷な悪魔神官長選定の儀を作り、これを次代の悪魔神官長を育てる門とし、さらにそれを自分もやり通した。

グレートボルケーノ最大の噴火の際に障気に吞まれ、自我を失う前に自害した。

享年1024歳。

・悪魔神官長選定の儀：バーン様への揺るぎない忠誠を確かめるための儀式。

悪魔神官長に成るために連続で、エルフ村（寿命が長くロリが多い）に10年、ドワーフ村（女性全員がロリ）に10年、タルタル自治区（全員ロリシヨタ）に10年間赴任して教会業務を行う。ただし、一度でもバーン様以外に萌たら死ぬ呪いが掛かっている。

・アミィバ：悪魔神官の女性。初めは教えられた医療技術を使って治療していたが、それに飽きたらまず自分で新しい医療を作り、それを実際に試すために、従軍神官になる。

《絢爛舞踏》ヒルデガルド小隊に配属後様々な場所で医療活動を行い、多くの患者を癒してきた。

エリオの事はからかいの対象としてしか見て無かったが、素顔を見られてしまい苦悩する。

結局殺すことも出来ずにいたために愛する事にして、エリオと結婚した。なお、エリオを最初に喰ったのはこいつ。

享年950歳、彼女の残した秘孔大全集はのちの悪魔神拳に大きく影響した。

タルタル族

・リミララ：初代星の神子、タルタル研究所所長も兼任して様々な研究成果を発表し、バレンヌ帝国全体の発展に関わった。

享年74歳。

・クピピ：小さい身体ながらバーンも認める魔法の天才。アミからも「お前は天才だぁー！」と言われていた。

攻撃、回復、補助と三拍子そろった魔法を使いこなし、バーンが習得を諦めたメドロアを実現した。

「くの」&可愛い口調と裏腹に毒舌家、ベリーが好物でチョコボ好き。チョコボ好きか講じてmyチョコボのStarLight号を所有している。

婚期を逃しそうになったときに、小隊員からラブコールをうけるエリオを見つけ妥協。妥協といった割に子供がたくさん産まれた。

享年92歳。

ドワーフ族

・ギムリ：ザ・ドワーフといった風情の初代ドワーフ族長。

酒と鍛冶仕事が三度の飯より好きなおっさん。ドワーフゆえに嫁さんはロリ。

ドワーフ村の酒場にはしょっちゅうバーンが出没していた。

享年1013歳。

エルフ族

・デイドリッド：深い森のエルフ族長。

本人にはあまりレンジャー技能は無いが魔術師としては最高峰に有った。

旅の魔族の自由騎士バーンと紆余曲折を経て結局、2男3女を授かる。

享年1654歳。

・《絢爛舞踏》ヒルデガルド：現在バーンを除けばアルトリアやミストバーンを含めまバレンヌ帝国軍最強と言われる青い目をもつエルフ。

前半生は省略、リヴァイアサンを仕留めた後に、バーン流殺法（アバン流殺法）を完全マスター。近接は刀殺法、遠距離は弓殺法でサクサク倒す。

魔法を使えないが、精霊手を初めとした青の絶技まで使用可能のために、ハンデにもならない。

身体スペック的にはアルトリアやミストバーンに全く歯が立たないにも関わらず（それでも互尊で降下作戦がクリアできる）、圧倒的な多彩な戦術でその差を覆す。間違い無く決戦存在級とバーンは見ている。

現在は1611歳。まだまだロリ巨乳なため、何時まで生きるかバーンも解ってない。たまにバーンを窒息死させかけるのが玉に瑕。

主要人物

・大魔王バーン：我らがロリ大魔王。基本的に酔っ払っているが、

真面目な時や行事の間は外に酒精を散らしている。

戦闘力は莫大。光と闇の闘気による咸卦法やアバン流殺法、原作バーン様の技や各種ネタ技をマスターし、莫大としか言えない魔力と各種魔法を使い、遠近共にアホくさい戦闘力を誇る。

厄介なことに能力である密と疎を操る程度の能力により、同スペツクの分身を三体まで作成可能、まさにチートだが、まだまだ強くないならねば危ない。

親バカでアルトリア博物館やアルトリア誕生日記念公園などを作ろうとして娘に怒られている、開拓都市アルトリアは意地で名付けた。 出没場所の良い酒のある酒場である。 現在はアルトリアにも太陽を見せたいの一心で太陽の研究をしている。

・竜王女アルトリア：みんな大好きセイバーさん。

産みの両親は蒼火竜サラマンドルと海竜リヴァイアサン。その加護のおかげか完璧な耐火対冷防御を持ち、水の上に立ったりマグマを泳いだりできる。

母の親バカぶりに苦笑しつつも満載でもない模様。

恋人は出来たことが無いが、本人も気にしてないし、そんな気も無い。

尊敬する人は母上。

戦闘方法は正統派、アバン流殺法も含めて小細工ごと相手をねじ伏せるタイプ。

魔法は直接使えないが、魔力放出で大量消費している。さらに闘気放出を覚えてグランドクロスを使うこともできる。 竜魔人に変身してもバランスみたいにゴツくならず、アーマーみたいに鱗がでてくる感じになる。

・《大魔王の影》ミストバーン：バーン様に忠誠を誓う暗黒生命体。まずは士官学校に入れられてしごかれている。

ボデイは問答無用で改造されているが、改造されなければパワー

アップ出来ないので有る意味ご褒美。ネタを思いついたらまた改造される。

埋め込んだ石はかなりのレア物。

マチュピチュ脅威のメカニズム

時間は前回からさらに15年たっている。

ミストの教育とやつの直属の軍団整備に時間がかかったのだ。

ミストの軍団はすなわち魔影軍団なのだが、これに満足な数を揃えるのに時間がかかったのだ。

編成はメインにさまよう鎧、部隊長に地獄の騎士といった壊れても大丈夫な連中と、知能の無いアンドロイド系統とそれを指揮するしにがみ貴族の混成軍だ。

何故この軍団が完成するまで時間をかけたかといえ、マチュピチュがマジで古代高度技術国家で、かなり機械化していたのだ。

奴らの軍団は主力がメタルハンターやキラーマシン、メタルドラゴンなどの自立型の兵器や人食いサーベルやアロン、ツツンと言った武器種族がメインらしい。

さて、敵の中でドラクエでは見ない名前に気づいた方もおられることだろう。

連中は二つの勢力が統合された軍勢らしい。一つは空中要塞都市マチュピチュを中心とする古代機械文明であり、もう一つは異世界よりジャングルに到着した巨大な剣から溢れ出す武器種族文明…カジオー軍団だ。

カジオー軍団とはマリオRPGでの敵役の軍団でラスボスはすなわちカジオーと呼ばれる存在だ。

カジオー軍団はいくつかの軍団とそれを率いる軍団長からなる。そして余が一番危惧するのは奴らの物量である。

どちらの文明も己の兵士を工場から無尽蔵に吐き出し続けるのだ。まともに消耗戦に巻き込まれたらマヴラブの人類対BETA並みに圧されかねない危険がある。

しかも偵察部隊は生身の生物を見た者が居ないので、下手に国交を結ぼうとするとおかつに我らの存在を明かして危険になりかねない。

い。

しかも仮にあちらが生命体を皆殺しにしている連中だったりした場合、お互いに殲滅戦になりかねない。

今はお互いの勢力に空白地帯が有ったおかげでまだ接敵こそしていないが、余の勢力は南バレンヌ大陸に到達しているし、マチユピチユもじわりじわりと勢力を北上させいるためにいつ接敵するかは解らない。

急いで戦力を拡充し、さらにこちらにも大量に展開出来る魔影軍団を作ったのだ。

∴戦略はこちらでイニシアチブを取りたい。余の文明圏内に侵入されて虐殺でも起きたら大変だからだ。

パナマには要塞を建設したが、相手は空中戦力も存在しているために心許ない。

一応余も黒チヨコボによる空中騎兵団を作ったが、黒チヨコボはなかなか産まれず数が少ない。

海上にも艦隊を展開させるが、どうなるかはわからない。

パナマからミストの部隊25万を先発させ、後詰めにアルトリアの軍団12万を展開させる。余の近衛軍5万と余自身は殿軍だ。

もしもミストの軍団が機械軍団に歯が立たないならミストと余の軍勢を入れ替えて、余の超高密度魔法言語で勢力丸ごとぶっ飛ばすしかない。

ミストは肉体的疲労が無いので、将来余の影としての仕事をさせるための各種勉強と、カイザーフェニックスやカラミティエンドなどの原作バーン様の技の数々や原作バーン様の言葉づかいなどを24時間体制で教えつつ、魔影軍団の指揮や編成やら補給やらもさせていた所為で、なんか本体がしなびていた気がするが余は気にしない。

まあミストの努力の結果で魔影軍団は無事結成されたので何も問題ない。

∴バーン様、準備万端、すべて整いました。あとはバーン様の号

令を待つだけです」

ミストの報告をうけパナマ要塞のテラスからアルトリアとミストと共に姿を現す。

テラスから姿を見せた余に対し、総勢40万にも達する軍勢から視線が集まる。

「余の忠勇なる兵士達よ！今や時は満ちた！この南バレンヌ大陸にはびこる有象無象を蹴散らし、誰が大魔王に相応しいかを教える時が来たのだ！！」

余の声に少しずつ兵士達のボルテージがあがっていく。

「余は諸君に問う！余の鍛え上げた兵は無個性な機械じわものに劣るか！余の精兵は機械に殺されるか！余の強兵は機械に蹂躪されるか！答えよ！……」

「否！」

まずはアルトリアが声を上げる。

「否！」

ミストがそれに続く。

「否！否！否！」

眼下の軍勢が万雷の如き声で応える。

「ならば進め！そして余の名を！最強の大魔王バーンの名を！無知蒙昧な機械共に刻み込め！！！！！！」

その言葉にミストが動く。ルーラにて自らの軍勢の前に出現し、号令を発する。

「さあ、共に進め！バーン様の僕たる我が魔影軍団の精鋭よ！勝利の栄光をこの手で掴むのだ！」

そして魔影にが進撃を始めた。そしてこれが激戦の合図となるのだった。

大魔王の力（前書き）

色々とお騒がせしました。練り直したけっかこうなりました。また何かあったら感想にお願いします。

大魔王の力

ミストの魔影軍が進軍したのを見届けた後、余とアルトリアは今後の最終調整に入った。

「よろしいのですか母上、ミストは囷としても。ミストは確かに強力ですがかなり危険では無いでしょうか」

アルトリアの懸念は最もだ。しかしミスト自身も納得しているし、現在の魔影軍団もそれを前提に編成した。

ミストの軍勢のコンセプトは消耗を前提とした長期戦の編成である。本来のバーン軍で言うところの不死騎団も編成に加わっている。各地の工房で鎧が作られてはさまよう鎧にされて、各地の戦場後からはアンデット兵が作られている。

ミストには日食が無い所為で凍れる時の秘法こそかけてないし年齢が若すぎて暗黒闘気量も少ない。しかし、疲れもダメージも知らない異魔神ボディと奴に埋め込んだ太陽の石があれば敗北は無いだろう。

もつとも太陽の石は魔界に太陽を作る際に重要な役割が有るだろうから、ミストが暗黒闘気を完全にマスターしたら取り出す予定だが。

「アルトリア、心配なのは解る。だが奴も男だ、自らの力でこの戦争に影響を与えたいだろう」

「それに今回は速戦で行くと伝えた筈だ。ミストの軍団が敵主力を引きつけている間に本拠地マチュピチュと巨剣に乱入せねばならん」
アルトリアは渋々頷いた。連中は個々の戦闘力自体は大したこと無い。しかしマチュピチュはキラーマシンを量産化しており、本格的に戦時量産体勢に入った場合でこずりかねない。カジオーに至ってはボスキャラまで量産出きるのだ。時間をかける訳にはいかない。

「それでは私の軍団は予定通り6日後にマチュピチュへと進軍いた

します」

「うむ、戦果を期待しておるぞ。ただ、怪我だけはせぬようにな。余の可愛いリアよ」

「母上…、お気持ちは嬉しいですが、もう私も子供じゃ有りません。もつと信頼してほしいです」

ムスツとしたアルトリア。少し機嫌を損ねたようだがそこも可愛らしい。

アルトリアの超竜軍団はその名に反してチョコボ騎兵隊を中心にした機動性の高い軍団である。超竜軍団なのはアルトリアが竜の騎士でも有るからだ。

今回の作戦の要はアルトリアと選抜山チョコボ隊だ。マチュピチュは山岳地帯にあり軍団全てを投入すると時間がかかり機を逃す。それゆえに先発としてアルトリア達がマチュピチュに乱入し、軍団はその後に続いて行く。

後続にはタルタル研の技術者が配属され、マチュピチュの技術力をなるべく根こそぎ手に入れるつもりだ。

「それよりも私は母上が心配です。数の少ない近衛のみで巨剣を指すなど無謀です」

アルトリアとミストがマチュピチュを攻略している間に、余は近衛を率いて巨剣カリバーを目指す。

最近余り最前線に出なかつた所為か、民衆の間でマスコット扱いはされても最強の大魔王として見なされないコトが偶にあるのだ。これはいけない。余が目指すのは武力にて天をも掴む最強の大魔王であり、みんなの人氣で天を掴む最愛の大魔王では無いのだ。

まあ人氣自体は良いとしても、威厳を見せるためにも余の実力を国民に見せる必要がある。だから近衛にTV局まで配置したのだ。

「リアよ、何も心配はいらぬ、母の力を見るが良い」

胸をはってアルトリアに宣言した余に、アルトリアはため息を付くのだった。…失礼な。

さて、あれから3週間がたった。予定通りミストが敵主力を引き付け、アルトリアがマチュピチュを陥落させた。予想通り生命体は居なかったようだ。巨剣からカジオー軍団が何回か派遣されたがミストが合流したアルトリアは全てを跳ね返した。

今余は巨剣カリバーの根元を目指すために敵軍団の前に一人で立っている。近衛は後方でTVスタッフを護衛している。

カジオー軍団前衛はヤリドヴィツヒとケンゾール、後衛にはユミンパ、上空にオノフォースとなっている。各部隊はオリジナルと量産型とハイパー達が混在しており、こやつらを通せばアルトリア達が危険になりかねない。

「何だチビ、我らカジオー軍団の前に立ちふさがってタダですむと思ってるのか？」

「今なら無視してやるから早くどっかいけ」

敵軍団のそこかしこから怒声が聞こえる、しかし余とて子供の使ではない。どけと言われて退くわけにはいかない。

大きく息を吸い、大音声を放つ。

「雑魚共に用は無い！カジオーを出せ！そうすれば貴様等は助けてやるっ」

返答は爆笑、完全に見た目でナメられている。おのれ。

「退かぬのならば食らうが良い！帝王：いや神に等しき炎を！」

さて、話はそれるがここでバレンヌの宗教を説明する。

バレンヌに有るのは唯一つ、その名もバーン教である。名前がまんまなこの宗教は初めは悪魔神官だけが信仰していたが、悪魔神官達が余が残した言葉を纏めて聖書を作り、国民に配布したことにより信仰が全国に広がった。

夏と冬には帝都バーンにて三日三晩の大規模な祭りが開かれ、毎回数十万人が参加している。余も屋台でたこ焼きなどを食べるのが楽しみだが、何故か余は中心部のイベントには参加させて貰えないが悪魔神官曰わく「バーン様に内緒にする事で一体感が増えるから」

と言うことで、よくわからないが底まで言われるので見に行ったことはないがかなりの寄付が集まるらしい。

まあソレはさておき信仰であるが、萃香が東方キャラのためか知らないが余のステータスに信仰力が加わり、それを消費して今まで使えなかった魔法も使用可能になった。

ゆくゆくは太陽作成に利用出来ないか考えている。

余の周囲の温度が上がっていく。よの魔力に当てられているためだ。

「これが！！余の究極魔法！！！！」

余の体から灼熱の魔界の炎が吹き上がる。荒れ狂う炎は巨大な不死鳥を形作る。

「これが余の - 究極火炎呪文 - メラガイアー、ゴッドフェニックスだ！！！！」

巨大な不死鳥はカリバーまでの敵を全て飲み込み、蒸発させていく。カリバーまで到達する直前余は上空に向かわせてオノフォースを撃墜した。

あとに残るはマグマとかした大地と巨大なカリバー、実戦使用は初めてだが威力は充分だ。

「…ドラクエ的に不死鳥ってフェニックスじゃなくラーミアだけだな…」

敵の居なくなった元草原に余の声が虚しく響くのだった。

戦後処理とこれから

あの後には簡単に片が付いた。

カジオーと直接対決した訳ではない。どうも余のゴッドフェニックスを前に不利と判断したらしく、カリバーがどっかにすっ飛んで行ったのだ。

正直ゴッドフェニックスは回復に信仰が必要な神力を消費する割に威力が低い。高密度魔法言語の方が威力も射程も効率も全てが良いが威嚇としては充分らしい。

カジオーの武器製造のノウハウはかなり欲しかったが本人が逃げ出してしまったのはどうしようもない、マリオ氏に討たれるだろうカジオーの冥福を祈る。

一方マチユピチュだが、エクスカリバーを食らいまくったせいで浮遊していた空中都市が撃墜され都市全域が破壊された、おかげで技術接收には時間がかかりそうだ。

最悪タルタル研の作成している自動人形に応用が出来れば良いし、壊れたキラーマシンなどの数からいって、エビルメタルや鎧の魔剣などに使用されている対魔法金属の鉱脈などが有るはず。それを回収見つけられれば良いのだが。

余の威信も特別番組を組んで生中継で全国に放送されたから回復しただろうし、ある程度機械技術も接收できた。一番大きいのは新たな開拓地を確保出来たことだ。

被害も囿とした魔影軍団こそかなり被害をうけたが超竜軍団は被害軽微、近衛は直接戦闘無しとこれも問題ない。

以上をもって考えれば遠征は成功したと自信をもって言えるだろう。…ただ、追加分を含めたさまよう鎧の制作費や長距離遠征の補給線維持などに予想以上に予算を取られてしまったため、採算を取るのに時間がかかりそうだし、ジャングルを切り開きすぎれば魔界の環境は更に悪化するだろうから余計に時間がかかるだろう。

まあ原作まで時間は腐っておるし、竜の騎士三人掛かりでも負ける気がしないので焦りは無い。じっくりやればいいだろう。

…二千年で大陸2つならこの先余裕があるように見えるが、実は现阶段…というか見通しが立ってないというか、地続き以外…大陸外に打って出る事はこれからもっとも技術が発展しないと無理だ。

海岸ならばまだ大したことはないが、沖に出ると船を襲って船員を食べるダイオウイカや首長竜の群れ、船を惑わした上に帆を焼き払うメラゴーストやマネマネ、海流も風も無い地球より広範囲なサルガッソ海 e t c e t c …。

陸ならばどうとでもなる実力の魔物も船という限定空間しかない場合、手の付けようのない災厄となるのだ。

それだけではない。魔界は晴れる日がほとんど無い為に自分達の居場所も把握出来ないし、羅針盤を作っても磁気がそこら中で狂いまくっているために役に立たない。

これら諸々の原因があり、現在使用可能なのは沿岸を伝って行く航路のみである。

アラスカからシベリアへ行く事は可能とは思われるが、年中平均気温が100 を下回る氷結地獄みたいな場所であり、まともな生活はかなり難しい。

これ以上は広がれないため、現在は内政をして地道に行くしかする事がないのだ。

しかし、それは余りにも暇だし時間の無駄である。そのため余は太陽作成の研究と並行して異次元への移動を研究する事にした。

旅の扉などが作成出来れば移動の心強い助けになるし、地上界に行けばミストに凍れる時の秘法もかけれるし、太陽研究も捗るだろう。

もし天界に行ければ魔族の神に魔界環境の改善を直訴できるかもしれない。

今後の事を考えれば必要な研究だ。暇潰しにもちょうど良いだろ

う。

そんな事を思いながら合成機の前に立つ。大陸を2つ制覇したし文明も発展している。なにかポーナスや目新しい物が有るかもと考えたのだ。

「……………ドンぴしゃと言うべきか、御都合主義と言うべきか……………」

あつたのだ、異世界移動マシンが。

ただ様々な制限や代償があり、そう何度も使えるものではない。作成する資源は問題ない。制限もドラクエ世界にのみ移動可能ということだけだ。ただ制限が《転移先の一年がこちらの千年になる》と《転移先から帰還するには現地で一年過ごさねばならない》ということだ。

わずか1日を過ごすだけで2年以上かかる計算である。かなりきつい

一度転移してしまえば千年は此方に干渉出来ず、もしかしたら内乱や敵対勢力の侵略、天変地異などで国が崩壊するかも知れないし、余の影響力が無くなってしまっているかもしれない。

それに何より帰ってきたらアルトリアに恋人が居たと言われたら正気を保つ自信が無い。…お母さんはそんなチャラ男は反対です！…全く。

ならば余は余とアルトリアが不在でも、一万年立っても揺るがぬ国を作り上げよう。そしてアルトリアも一緒に異ドラクエ世界に冒険に出れば良い。そしてそこで様々な思い出が出来るだろう。

そうと決まれば後は実現に全力を尽くそう、フフフフフフフ…

……………
…余が合成機部屋から出たのは夜更けだった。

万年帝国を目指して

異ドラクエ世界を目指すことを決めた余の前には様々な難問が立ちふさがっていた。

余の分身が残れば解決しそうな問題が多いが、それにも不安があり今回はその方法は採りたくない。

これから出発するのは他の大魔王や魔王、破壊神といった今の余から見ても苦戦しそうな面子が揃っている。

もちろん余とて大魔王としての矜持や鍛えた実力に自信はある、だが余に太陽のある地上を闇に閉ざしたり自らの魔界を作ったりはできない。下手に油断をすれば殺されなくとも封印されたりするかもしれないし、ダメージを受けすぎて何年も帰れない状態にされるかもしれない。それ故に全力戦闘が可能な状態で転移に臨みたい。

余は転移後の世界にてかなりの迷惑をかけるのは間違いない。だからこそせめてラスボスを倒すくらいのはしたいのだ。

まあ一緒にアルトリアも連れて行くので大概のことは問題ないと思うが、万が一ともいので用心を重ねたい。

次にこれも大事だが、未来にて《勇者ダイに敗れて余とアルトリアが死亡》という可能性がある。

この時、魔界にはバーン様とライバル関係にあった冥竜王ヴェルザーがいた。

ヴェルザーは強欲らしいのでバーン様亡き後、バーン様の領土を占領して回っていた可能性は高いと思う。

厳しい魔界環境にて速やかに新たな支配体制が確立されるのは問題無い。しかし、占領されたバーン領でソ連邦が占領したベルリンみたいなことが起こるかもしれない。

余は、余の愛する国民がそんな目に遭うことを許容出来ないし、そんなことをさせるつもりもない。こちらも万が一を考えて余がいなくても国が続いて行く体制を築く必要がある。

原作まで時間のある今こそが好機である。出発まで何年掛かっても余に頼りきりの体制を修正し、何万年も生き抜く国家を作り上げよう。

万年帝国にまずなにが必要か考えよう。アルコールを補充し頭の回転数を上げていく。

まずは政治体制だが今のバレン又憲法を作った際、余が参考にしたのは現実で最強だったアメリカと母国日本だ。

国民が政府首班を選挙で選び、余がそれを承認し、承認された総理大臣が余の全権代理として政治家達から各大臣を任命し、それをまた余が承認する。

議会は長期の議員の上院と短期の下院に別れ、下院の方が優先度は高い。

勿論裁判所は参審制で弁護士なども完備し、警察や検察などと共に三権分立をしている。

ただやはり魔界は力〃発言力といった慣習もあり、議会での議案はいざとなれば乱闘で《力付くで》可決したり否決したりができる尚、合法である。

人権ではなく知類権（明確な意思疎通が条件）があり、全ての知類は余とアルトリアの王権の下に平等である。

………うーむ、かなり大ざっぱに上げてみたが、これ以上いじる所が見当たらない。

千年くらい前に帝国が拡大してから作った憲法と法律だが、当時かなり考えて作り上げただけにいじりようが無さそうだ。細々と自浄作用が働くように法律を足したり引いたりは常にやってるのでこれ以上は無理だろう。

ならば次は反乱や内乱を防ぐ措置だが……。まずウルフ族と悪魔神官などの余が合成機で産み出した種族は安牌だろうが、問題はそれ以外の元征服民達だ。

現状で不満を持っていたり国家ぐるみで差別をしたりとかは無い。しかし余という重りが外れた時、様々な民族紛争が起きる可能性は

ある。

…これにはよりバレンヌ帝国国民として取り込み、一体化を進めて行くしか無いだろう。

もし反乱が起きればそれを鎮圧する武力が必要だ。新たな力とさ
らなる文化の多様性の為にウルフ族などは更なる進化をさせよう。

あれから時は過ぎた。様々な下準備のために一年近くかかったが、
ようやく準備が整い議会に提案できる所まで持ち込んだ。

最初に相談した現政権の連中は泣くは倒れるは大騒ぎだった。

アルトリアにも反対されたが押し切った。余の持てる技術を総動員
しての説得の前にはアルトリアとていちころだ、余の涙目＋上目使
いは無敵である………プライドさえ捨てればだが。

議会でも余の長期不在に大反対がおきた。議会初の満場一致の否
決だったが、力付くで可決した。

襲い来る非戦闘議員の用心棒を蹴散らし、古強者の武闘派議員を
叩きのめして可決させ諦めさせたあと、余は合成機より生まれた各
種族を様々な形に進化させた。中にはコンボがきまり想定外の進化
を遂げた連中もいた。

内訳は、

ウルフ族

・海賊ウルフ族（水上用アップグレード）

・わんこ族（戦闘力大幅ダウンで奉仕力大幅アップ）

・妖狐族（魔法力と寿命大幅アップ、繁殖力大幅ダウン）

エルフ族

・ダークエルフ（各種ステータス寿命アップ、繁殖力ダウン）
といった具合である。

ドワーフ、タルタルは劇的な進化は無いが、各種基礎ステータス
が上がっている。悪魔神官はいろいろ出来るが、ステータスアップ
も含めて拒否された。「我らはバーン様を想うだけで強くなれます
！」とのことだが…まあいいか。

そして今回の目玉は二つで、まずはコンボで生まれた《白狼天狗

族》である。ステータスと寿命の大幅なアップと飛行能力、さらには烏天狗などにアップグレードが可能な上に「〜程度の能力」まで習得可能なスーパー種族だ。ただ、進化できるほど経験を持った者も人工から見れば少なく、妖狐やダークエルフと同じく繁殖力が大幅ダウンしているのが欠点だろうか。

もう一つは戦闘ウルフ族で、奉仕に向かないほど不器用で日常でかなりドジをするが、戦闘力を増大させた上に《真狼化》により巨大な狼に変身するのだ。

変身したら強力なプレス攻撃と耐熱能力を使えるようになる。

彼ら生活力が低下したためか繁殖力も低下せず、人数も確保可能なために軍の主力を担うだろう。

時は過ぎ各種族を産み出し更なる帝国の安定を目指して500年、不満を解消してトラブルの種を消して回って更に500年。ようやく異世界に転移出来ると判断出来た。∴これで原作バーン様の誕生日まであと七千年である。

ヴェルザー関連などを考えればやはり誕生日までには帰って来ないので、実質あと7年しか移動出来ない。

それを過ぎれば最悪で、地上侵略出来ずに余の消滅か世界消滅である。急がねばならない。

地上への進撃路の確保など、様々な言付けを残す。あまりにいろいろと言付けを残したためかアルトリアが苦笑している。

気を取り直して転移機を操作する。これから移動するのは余とアルトリアだけだ。転移機が作動し始め、皆が少し下がる。余はアルトリアの手を握りながら皆に最後の言葉を残す。

「皆、余の留守を頼む！」

言いたい事は残りはこれだけである。総理大臣が頭を下げたのを見た後、余の視界は光で包まれた。繋いだ手のみが、余とアルトリアを確認させるのだった。

塗り替えられる世界

視点・三人称

突如現れた魔王バラモスにより、世界は恐怖のどん底に落とされた。

絶望を振りまくバラモスと彼の率いる魔王軍の前に、世界の多くの国は団結して戦いを繰り広げたがじりじりと押され続けた。

劣勢を覆すべくアリアハンはかの国の大英雄、勇者オルテガをバラモス討伐の為に派遣した。

だが頼みのオルテガさえもネクロゴンド火山にて魔物と相打ちになり、世界の希望は喪われたように思われた。

だがオルテガには一人娘があり、アリアハンで最後の希望、新たな勇者として大事に、かつ厳しく育てられた。

彼女は人々の期待以上に強く成長し、16歳の時にバラモス討伐の為に旅立った。

そして今、彼女たち4人はネクロゴンドの大地に聳えるバラモスの居城を前に最後の休息をとっていた。

視点変更・勇者アリス

アリアハンを旅立ってから二年、ついに此処までたどり着いた。

お父さんの敵で、世界を滅ぼそうとするバラモスに遂にチェックをかけた。

後は城に攻め込み奴の頸を取れば総てが終わる。それもこれも皆仲間が居たから出来た事だ。

あの旅立ちの日にルイーダの酒場で出会った3人が居なければ、今の私は無かった。

あの日、王様はたった50ゴールドと少量の装備を私にくださった。

はつきりいつて舐められて居るのでは無いかと思って、大臣さん

に聞いてみたら予算不足と言われてしまった。

父が行方不明になった後、私の一家は国からお金を貰って生活をはじめとするしていた。私を訓練するためにもお金がかかり、私の旅立ちに合わせて仲間候補の選定や訓練、また凄腕で信頼できる傭兵を雇い彼らの衣食住を保証したり、各国に勇者：私が通る際に色々融通して貰うために根回ししたりと、少なくない金額を使ってしまったそうだ。

ただでさえ鎖国で貿易が途絶えて歳入が減った上、私の為の更なる出費がかさみ、年々細くなる予算で余ったのが50ゴールドその他だそうだ。

そんな事を聞いたら怒るに怒れないし、そのおかげで私は素晴らしい仲間と出会えたのだ。ならばなにも恨むことは無い。

僧侶のラナちゃんは私より年下のふわっとしたピンクの髪の女の子。

優しい彼女は的確に私たちの傷を癒やし続けて支援し、大の大人も真つ青な怪力で魔物をたたき伏せた：素手で。実は怒らせたら怖い子かもしれない。

戦士のリアさんはもの凄く強い剣士だった。強いだけではなく美人だし良い匂いまでする超人だ。

私もかなり出来る方だと思っていたが、彼女はもつとすごかった。彼女に師事したおかげで魔力放出でブーストしたり、バーン殺法という強力な戦闘術までマスターできた。

ただ、余り保存食暮らしが続くと：何というか色が雑になってやさぐれた雰囲気になっちゃうから注意が必要だ。

最後は自称大魔法使いのスイカちゃん。

この子はちっちゃいけど天才で、色んな魔法を使いこなしている上に魔力切れもしたことがない、まさに大魔法使いと自称するだけの力をもっている。

ただ、性格：というか行動力が有りすぎてエキセントリックな感じがする。

一人称も余なんて（実力はあるけど）偉そうだし、えつちな本を読ませようとしたり（えつちなのはいけないと思います）靴下にガーターベルトを履かせようとしたり（現在装備中）、珍しい物を貸すとなかなか返してくれないし（最後の鍵とか）、たまに（日常でも戦闘中でも）2〜3人くらいに増えてたり、その言い訳が能力のちよつとした応用とかヤーパンニンポーカラテとかだったりと本当に変わってる。

ただ実力は本物だし、冒険に行き詰まると的確な助言をしてくれたり、色んな情報を集めてくれたり、眠れないときの抱き枕にちよつど良かったりと大活躍をしてくれるいい子だ。

仲間達とこつやつて夜を過ごすのも最後かも…いや、最後にしなければいけない。

明日はバラモスを倒して世界を救うんだ、平和な世界を取り戻したら、その時に後の事は問題無い。

みんな元の生活に戻るだけで会えなく成る訳じゃない。今はバラモスに集中しよう。

考え事をしていたら時間がたっていたので、見張りの交代の為にリアさんを起こし、私も休むことにした。興奮で眠れるかは解らないが明日は決戦、体調は万全にしなければならぬ。

私は抱き枕のスイカちゃんを抱き締めながら夢に落ちるのだった。

視点変更・バーン

今、余と一緒にこの世界の勇者であるアリスが眠っている。

様々なドラクエ世界の中で余が選んだのはドラクエ？の世界だった。

余が異世界に行きたかった理由は 魔界に太陽を照らし、成長の限界に達した余に、新たな風を吹き込ませるためだ。

この世界には世界を闇に包んだ実績をもち、ホイミスライムが大量に詰まった賢者の石を作ったり、世界に大穴を開けたりと、空間に作用する力のスペシャリストと思われる大魔王ゾーマの居る世界

だ。

その力を解析出来れば魔界に太陽計画を大いに進めるだろう。

外にも精霊神ルビスや神竜など拉致：じゃない誘拐：でもない、
：まあ協力を得られればとても助かる神様が居る世界だ。様子見を
含めて問題無いと判断したのだ。

久方ぶり：本当に久方ぶりの太陽を拝み、障気の混ざってない空
気を堪能出来、その素晴らしさをアルトリアと共有出来ただけでも
来た甲斐があった。

転移したのはアリスの旅立ちの一年前のアリアハンだった。

方針を少々考えてみると、最終的にはかなりのコネを持ってそんな
勇者パーティーに同行しようと思ひ立ち、ルイーダの酒場を目指し
た。

酒場に居た間にある程度太陽に関わる研究も進んだし、アリスも
可愛らしい。実に素晴らしい冒険も出来た。冒険は非常に有意義
だった。

遂に変な顔のバラモスをボコリ、ゾーマを倒す局面を迎え余は思
う、これが終わった後こそが本当の旅のはじまりだ。

気合いを入れた余はアリスを抱きしめ返して睡眠に入るのだった。

バラモス城の悲劇

視点・三人称

バラモス城：、それは世界を滅ぼそうとする魔王バラモスの居城である。

彼が最初に攻め落としたネクロゴンド地方に築き上げ、地上滅亡を目指す彼の居城として難攻不落を誇っている。

魔王バラモスはとても強い。様々な魔法を使いこなし、プレス攻撃を含めた多様な攻める手段、更には強力な再生力を誇るなど、まさに魔王の名に恥じない力を秘めている。

そんな彼をもつてしても団結した地上を滅ぼすのは至難の業だった。

だから彼は攻め方を変えた。力押しを進める一方で各地に謀略をめぐらせた。

その結果、サマンオサに送り込んだボストロールにより勇者サイモンは死亡しサマンオサも連合から脱落した

ある錬金術師に取り入り、様々な素晴らしいアイテムを作らせ、それを量産化して戦力を増やした。

エンジンベアに送り込んだ小物により、エンジンベアは更に排他的に出来た。

卑弥呼に化けたヤマタノオロチは順調に恐怖と絶望をばらまいた。欲深な人間を騙してエルフ達を襲わせ、更なる対立を作らせた。

各地に魔物を蠢動させて補給路を寸断させて、各国の連絡をズタにした。

強力な戦士たちを生み出せるダーマ神殿こそ謀略に巻き込めなかったが、大なり小なり各国の継戦能力は削ぎ取られており、勝利は時間の問題に思われた。

しかし、そこで大きな誤算が出てきた。アリアハンの勇者アリスである。

勇者オルテガに居城まであと一步まで攻め込まれ、四天王のサラマンダーと相打ちになった時、バラモスはアリアハンにも謀略の魔の手を伸ばし、幼きアリスを暗殺しようと試みた。

だがアリアハンの狂信的な勇者保護と、情報秘匿の為の国家の首が締まる程の徹底した鎖国により、失敗に終わっていた。彼女が旅立った時にそれが把握出来なかったほどである。

彼女を見失ったツケは大きかった。

ヤマタノオロチが討ち取られ、彼女の旅立ちを知って追撃を出そうとしたが、船やルーラを駆使して移動した上、その少人数さに足取りを掴めなかったため、彼らは常に後手に回らざるを得なかった。アリアハンは各国と国交を取り戻して勢力を取り戻しつつあり、ノアニールやシャンパーニを奪回したロマリアは攻勢を強めている。遂にエジンベアのポストロールまで討ち取られ、サマンオサは解放された。

恐怖によりバラモスに協力していた人間も反抗し始め、各地の諜報網は寸断された。

総てのオーブが集められ、不死鳥ラーミアも蘇った。

オルテガの時とは違い、魔王バラモスは確実に窮地に立たされていた。

勇者達がネクロゴンドを超えた事を知ったとき、彼は厳戒体制を敷き、いつでも迎撃出来るように配下を集め、24時間体制で待ち受けていた。

彼は地下の玉座で今か今かと勇者を待っていた。

そんな彼は突然の爆音と共に崩落した瓦礫に押しつぶされたのだ。

視点変更・勇者アリス

「勇者様、初弾命中しました！」

木の上に作った簡易観測所に居るラナから携帯念話に連絡が入った。

「スイカちゃん、当たったって」

私は後ろで大きな筒をいじっているスイカちゃんに声を掛けた。

「ほう、さすが余だ。初弾から命中とはな」

自慢げなスイカちゃんにリアさんが話しかける。その手には先程より大きい砲弾がある。

「は…スイカ、次に行きましょう。次はこれに魔力を込めてください」

「うむ、6号玉ならイオナズン6発はいけるか」

何か危険な会話がされている、リアさんはああ見えて猪突気味だし、スイカちゃんは派手好きだ、ああいう大掛かりな仕掛けは好きなんだろう。

今彼女がぶっ放したのは《2012年式改魔力注入型投石砲》という、魔力の詰めやすい石に魔法を込めて、その石をイオ系魔法をつかって筒から打ち出す道具だ。

弾に値段がかかって量産化されなかった物の再利用らしい。

投石砲はバラモス城にあまりにも大勢の魔物が居たために、どうやって攻略するか考えていたときに、スイカちゃんが「こんな事もあるのかと！」って何処かから取り出してぶっ放したのだ。

「ねえ、私もやって良いかな？」

面白そうにしている二人を見て、私もやりたくなってきた。

「よし、では勇者よ、ギガデインを6発込めるのだ！」

私がギガデインを込めた弾が着弾した後、巨大な雷が次々と辺りの魔物に降り注いで、当たりは更に混乱している。

「よし、ならばとどめだ」

スイカちゃんは私を観測所に上げて、ラナちゃんに魔法を込めさせた。僧侶なんだからバギクロス？それともニフラムだろうか。

魔物はまだこちらに気づいてはいないようだが、流石にそろそろばれるだろうから、大勢を巻き込めるのならありがたいんだけど…。

魔法石に込める魔力はスイカちゃんによって強化され、通常よりも威力が強い、一体何が有るんだろうかと思っていた時、最後の1

2号玉が放たれた。

「…うわ〜」

着弾したバラモス城を中心に「死」の津波が広がる、それに触れた魔物がバタバタと倒れていく。

「うむ、流石に100倍に増幅して、放つとかなり効くな、ザラキ」
そんな物を込めて撃つたんだ。12発の百倍だから普通の1200倍…、そりゃあみんな死んじゃうよね。

「…なんだ、勇者らしく余に怒るかと思ったが、静かだな」
なんだ、そんな事か。

「確かにアレな光景だけど、私達の標的はバラモスだしね。消耗はおさえないもん」

「…そうか」

スイカちゃんは納得した様子だ。確かにあんなに一方的に死を定めるのは心が痛む。だけどバラモスを倒さなければ世界はいずれ滅びる、こんな所で私達はやられるわけにはいかない。

「じゃあ、行こっか、私達の目指すべき敵、魔王バラモスへ」

スイカちゃんと一緒に木から飛び降りる。そう、バラモスを目指すために。

崩れたバラモス城から、バラモスの死体が出てくるまで、後2時間…。

その名は大魔王ゾーマ(前書き)

今回はちょっと短いです。

その名は大魔王ゾーマ

視点・三人称

魔王バラモス討たれる！！その知らせは瞬間に世界を駆け巡った。

長年に渡り世界を恐怖に陥れた怨敵は討たれた。これで夜の闇に怯えずにすむ。

世界は歓喜に包まれ、士気を失ったバラモス軍は各地で滅ぼされていった。

全ての驚異は失われ、幸せの時代が来るかに思われた。だが、アリアハンのごく一部におけるある騒動が、更なる深遠の闇を窺わせるのであった…。

視点変更・勇者アリス

私達はその時アリアハンに凱旋し、玉座で王様にバラモスの首をお見せしていた。

崩れた城からバラモスを引っ張り出すのはめんどくさかったが、それでも魔王を討ち果たしたことにより高揚感の溢れた私達の前には意味が無かった。

あんな勝ち方でも勝ちも勝ち、昔から勝てば官軍とえらい人も言っているのだ。

玉座で王様にお褒めの言葉をいただいていたまさにその時、誰も予想していなかった事が起きた。

大魔王ゾーマである。

突然の攻撃で広間の兵士達は皆吹き飛ばされた。スイカちゃんもマホカントをとっさにつけなければ全滅していただろう。

スイカちゃん自身もダメージを受けたらしく、あちこちから煙りを上げてうずくまっている。

その騒ぎの中で名乗った者の名前こそ大魔王ゾーマだった。

ゾーマの言葉は私達に絶望を与えるのに十分だった。王様はめっ

きり老け込み、兵士達は恐怖し、ラナちゃんは慌ててスイカちゃんを回復させ、リアさんはスイカちゃんの口に薬草を詰め込み、スイカちゃんは窒息死しかけていた。

正直私達のパーティーはあんまり驚いて居なかった。何故かと言われれば話は簡単で、バラモスの最後がアレ過ぎてまだ何か居るんじゃないかって疑っていたからだ。

多少なりとも疑っていたおかげで今後の事は直ぐに決めれた。ゾーマが世界を脅かすならゾーマを倒せば良いのだ。

この事を皆に話した所、驚かれたものの全員が賛成してくれた。

「しかし勇者よ、行くのは構わんが相手は異世界からの侵略者、ギアガの大穴に入りゾーマを倒せば恐らく帰ってはこられんぞ」

「うん、だからあえて皆に聞きたいの。帰って来れなくてもゾーマ討伐に付いてきてくれるかを」

皆の顔を見ながら話す。私は覚悟が出来ているが、もう家族にも会えなくなるのだ、迷うのは当然だ。

「余は行くぞ、ゾーマには興味がある」

スイカちゃんはいつも通り即決だ。たまに悩む時もあるが、無駄なことなく即断で決める彼女はいつも眩しい。

「アリス、今更そんな事を聞くのは水臭いですよ。私の剣は本来唯一人の方の為の剣です。しかし友人であるあなたの為に振るうことになんの躊躇いがあるのでしょうか？」

リアさんのあり方はまさに剣そのものだ。凜としていて同性の私でも憧れてしまう。

「わ、私も！私も勇者様に着いて行きます！」

ラナちゃんは昔からいつも私の後ろを追いかけてくる。その安心感からか、本当は甘えちゃいけないけど、ついつい甘えてしまう。

「じゃあ出発は今日から一週間後。今のうちにお別れはしてね。…みんな、後悔しないようにね。」

こうして私達のパーティーは一旦別れ、それぞれの家族と最後の団欒を楽しんだ後、ギアガの大穴に突入したのだった。

視点変更・大魔王バーン

余がゾーマに感じたことは畏怖だった。

地底世界アレフガルドから遠距離で、しかも余をねらって全力で放った訳でもないその一撃は、広い分薄くなつたとは言え余の全力のマホカントを貫き通し、余にダメージを喰らわせたのだ。

やはり余は慢心していたらしい。どこぞの英雄王は慢心してこそ王であると豪語していたが、余に慢心は間違いなく死亡フラグであった。

この事だけでもこの世界に來た甲斐があつたと言うものだ。

ゾーマとの死闘の気配は深まり、余の闘争本能は大いに膨れ上がっていった。

地下世界アレフガルド

視点・三人称

地下世界アレフガルド…、精霊神ルビスにより生み出され、見守られし世界。

今のところはラダトーム周辺部しか無い小世界と言える場所だ。しかし、ルビスに見守られ、民は平和を謳歌していた。

だがある時、闇の世界の深遠から大魔王ゾーマが現れた。

大魔王ゾーマ…、彼の力は絶大だった。

彼がこの世界に乱入した際にできた傷口は今なお癒えずに、全ての生者をこばみ続ける裂け目を生み出し、あるうことか精霊神ルビスを封じ込め、太陽すら奪って見せた。

人々は抵抗し続けたが闇は晴れることはなく、名のある勇者達も皆が冥府の門をくぐることになった。

抵抗しているものもいるが、大魔王には抗うことすら出来ず、アレフガルドは恰好の絶望の供給地となり、ゾーマを阻める者は誰もいなくなった。

しかし、新たな希望がアレフガルドに舞い降りた。

地上滅亡を目論み、地上を恐怖に叩き込んだ魔王バラモスを討ち果たした勇者アリスとその仲間達だ。

闇に潜む玉座にて大魔王ゾーマは強い光を感じていた。

(…黄金色の眩い光が一つ…翡翠に輝く強烈な光が一つ…少し弱い光がもう一つ…そして…)

大魔王ゾーマは地上にいた勇者達をも感知していた、だが光に満ちた世界での感知は彼を持ってしても難しく、力の輪郭を感じる程度だった。

だが闇に閉ざされたアレフガルドにおいては、詳細な力を感じる事が出来た。

(…最後は歪な力だ…人ではありえぬ長く生きたもの特有の全てを

飲み込む深い闇…そして辺りを灼き尽くすばかりの太陽の如き闇…
ゾーマの長き生のなかでも感じたことのない力だ。

眩い光の持ち主は叩き潰してきた、暗き心の持ち主は皆ゾーマに従った。

(…気になる…が…どちらにせよ意味はない…)

確かに《今回》の勇者達は今まで戦ってきたどの勇者より眩い光をはなっている。しかし…。

(儂の力の前には皆同じよ)

確かに眩い光は感じる、だが所詮はそれだけだ。

一年程彼らは世界を巡り、光は強まり、王者の剣を初めとして武器を集め、ルビスは封印を解かれ、アレフガルド中に希望の光が溢れ出している。

先ほど配下のキングヒドラは別の光と相討ちになり、勇者達はこの玉座にあと一息まで到達している。

ゾーマは傍らに控えていたバラモスブロスとバラモスゾンビを向かわせる。更に光を強くするために。

(強き光が世界を覆うほど、希望の火がが大きければ大きいほど)

ゾーマは知っている、人々の強さとたくましさ、愛と希望に満ちた彼らの勢い、そして…脆さも。

(それを失った時にこそ、完全な絶望に世界は落ちるであろう)

今までアレフガルドでゾーマに挑んだのは、誰でもたどり着けるだろう勇者だった。

だからいつかきつとゾーマを討てるという希望が残った。

だが今回の勇者は違う、異世界より現れて、前人未到の、まさに破格と言っても過言ではない業績を残した。

だからこそ、彼女達が無惨に殺されれば、人々は心から敗北し、溢れ出した絶望はゾーマを更なる高みに引き上げるだろう。

耳に心地よい戦闘の音は途切れ、いよいよ祭壇に生贄が登る。

「大魔王ゾーマ！」

勇者の声を聞いても彼は玉座から動かなかった。いや、動く必要

がなかった。

「儂の名はゾーマ。闇を統べる大魔王だ。」

一言一言がまるで重石のように勇者達にのしかかる。

「束の間の希望：という名の夢は楽しめたか？時は来た、我が生贄として絶望に沈むが良い」

ゾーマは座ったまま片手を掲げる。次の瞬間に広大な玉座を飲み込むばかりの巨大な火の玉が生み出され、ゾーマはそれを指だけで飛ばした。

絶望を刈り取る為に敢えて低速：常人から見たら高速だが：に放たれた大火球をそれぞれが防ぐべく盾や剣を構えるが、何を持ったとしても死体すら残さず蒸発させる大火球に驚愕している。

進路の床も壁も柱も蒸発させながら大火球は進む。

「カラミティウォール！！！！！」

着弾する寸前、前に躍り出た小さな陰が何者すら消滅させる不可侵の壁を展開するが、即座にたわみ、かき消していく。

それは単純な魔力の差に、不敗の絶対防御が屈した瞬間だった。

「ッ！！フェニックスウイング！！！」

しかし防御障壁は火球を小さく刷ることは出来ていた。だからこそ、不死鳥の名を冠する手刀で逸らすことが出来た。

「勇者！光の玉を使え！！！」

声に反応した勇者が懐から竜の女王から受け取った、光の玉を取り出した。

そして勇者の掲げた光の玉が眩い光を放ち、大魔王ゾーマを守る闇の衣：沈殿した障気を剥がしていく。

ゾーマは生きのびただけでなく、小癩にも力の一部である闇の衣を引き剥がされた事に驚愕と疑問、そして久し振りに現れた勇者達が想像以上に強力だったことに喜びを感じた。

（小癩な抵抗、だが奴らを絶望に落とせば、今被われた分などお釣りが帰るわ！）

彼は玉座から降り立ち、灼熱化した床に降り立つ。しかし降り立

った所から強烈な冷気が吹き荒れ、熱かった室内の空気も一気に零下に落ち込む。

改めて勇者の前に立ちふさがった大魔王は口を開ける。

「なにゆえもがき 生きるのか？滅びこそ我が喜び。死にゆく者こそ美しい。さあ、我が腕の中で息絶えるがよい！！」

《赤い目》を見開いた大魔王《絶望》が、今、勇者達の前に降り立った。

闇の深淵の死闘

視点変更・三人称

第二幕の口火を切ったのはリアだった。

彼女はその身に翡翠色の闘気をまとい大魔王に斬りかかる。

だが大魔王は動じない。リアがたどり着く前に片手を向ける。

「《凍てつく波動》」

向けた掌から放たれた黒い闘気がリアを飲み込み、そのまま弾き飛ばした。

「！、よくもやったな！」

反対側からアリスが斬りかかるが、大魔王はもう片手をかざす。

「《マヒャド》」

放たれた巨大な氷柱が勇者を貫かんと向かう。勇者はかるうじて盾で直撃こそ避けたが、彼女もまた弾き跳ばされた。

「カイザーフェニックス！」

両手を使い、無防備となった大魔王を、大魔法使いが追撃する。

だが、大魔王はそれすら無効化してしまう。

口から放たれた極寒のブレスが不死鳥をかき消し、大魔法使いは吹雪に包まれた。

吹雪が過ぎ去ったあと、柔らかい光がスイカを包む、間一髪でラナが発動したベホマが傷を癒した。

「エクス…《約束された》」

「ギガ…」

吹雪のおかげで体制を整えた二人が、己の最高の一撃を解き放つ。

「カリバー《勝利の剣》！！！」

「デイン！！！」

極光と雷光が荒れ狂い、大魔王を打ち倒さんと突き進む。

流石の大魔王も迎撃が間に合わず、両手に闘気を集め、それをもつて防がんとしたが両手に深手を負い、青い血液を飛び散らした。

勇者達と大魔王は共に力を尽くして戦った。まだ僅か2ターンも
しないうちに、氷柱を凌いだ勇者は盾を構えた左腕を折り、戦士は
竜闘気すら浸食した障気の波動に苛まれ、大魔法使いは全身に凍傷
と裂傷を受け回復されて、大魔王は両手に深い傷を受けた。

だが、これはあくまでもこれからの激闘の前座である。勇者達は
勇気を振り絞り己を鼓舞する、大魔王の障気は益々吹き荒れる。

そう、これからが戦いの本番である。

視点変更・勇者アリス

- - - 強い。漏れ出た言葉を呟いたのは誰だったか、私かもしれ
ないし、他の誰か、それこそ大魔王自身が呟いたのかもしれない。

後方でラナちゃんが賢者の石を振りかざし、みんなを回復させる。
賢者の石を使っただって事はスイカちゃんは大丈夫らしい。

私達が回復する一方で、大魔王の腕の傷は見る見るうちに癒され
ている。

仕掛けたいところでは有るが、ギガデインとエクスカリバーを直
撃してあのダメージである。それに思っていたよりも反応も早い、
バラモスプロスって奴の二倍程度の反応と考えていたが、それより
更に早かった。

(おまけに決め技の一つのカイザーフェニックスまでかき消しちゃ
うんだから反則だよね?)

まったく、前座二人(二匹?)は結構シヨボかったのに、いきな
り無理ゲーみたいになった。

以前にスイカちゃんから借りたゲームというもので言えば、魔界
村をやっていたら、いきなり主人公がスペランカーさんになったみ
たいだ。

ウジウジしてても仕方がない。賢者の石のおかげで左腕もくっ付
いたみたいだし、また突っ込んで見よっか。

一瞬だけ辺りの配置を確認して走り出す。カイザーフェニックス
を防がれたスイカちゃんが一瞬で魔法を組み、解き放つ。

「二種合体魔法バイバーハ！」

途端に私達に薄い光の幕がかかり、更に力が溢れてくる。

「更に！二種合体魔法ピオルト！」

スイカちゃんも更に魔法を重ね掛けする。私は身軽になったその勢いでゾーマに迫る。

ゾーマは真つ向から迎撃するらしく、魔法などは唱えない。

「もらったああああ！！！」

当てる事を優先させ、コンパクトなスイングはゾーマのロープを浅く掠める。

カウンターで迫る轟拳を盾で受け流し追撃を狙う。後方からリアさんが回り込み、近距離で乱戦に持ち込んだ。

しかしこの大魔王かなり身が軽い。この服ってみかわしの服じゃ無いよね？

変な事を考えた所為か、拳を捌きそこねて一撃貰ってしまう。

なんとか踏みとどまったが、肋が何本か逝かれた気がする。

ゾーマは片手からマヒヤドを放ち、私にトドメを指そうとしていたが、リアさんが割り込み、その腕を切り払った。

射線から若干ずれたおかげでなんとか直撃は避けたが、巻き込まれた左肩の鎧が砕けてしまっている。

ゾーマがブレスを吐きそうになった所でスイカちゃんが突然現れ、ゾーマの顎を下から蹴飛ばし暴発させる。

ラナちゃんもベホマをかけてくれたので私も再度突っ込んだ。正直、遠距離で勝てる気がしないのだ。

ブレスが暴発したため、一瞬の隙ができており、リアさんは首を狙う。

だが第三の瞳は機能しているらしく、ニヤリと笑ったゾーマは先程自分を蹴るために飛び上がったスイカちゃんの足をつかみリアさんに叩き付ける。

スイカちゃんは能力を使ったらしく、途中でかき消えたが、リアさんもバックステップで間合いを取らざるを得なかった。

リアさんが離れた所で私が再度接近戦に持ち込めた。

同時にゾーマの頭上にスイカちゃんが萃まり、カラミティエンドを仕掛け、リアさんが間合いを詰めて斬りかかる。

「《凍てつく波動》！」

必殺と思われた攻撃は、全身から放たれた障気の波動により皆が弾かれて回避された。

私とリアさんは吹き飛ばされるだけですんだが、頭上にいたスイカちゃんは天井に叩きつけられ、一瞬意識をとばしてしまつたらしく、落ちてきた所を無防備に腹にもろにアッパーを食らい、また天井に叩きつけられる。

今回はかろうじてラナちゃんのバギマに吹き飛ばされ、アッパーをかわす事が出来たみたいだ。

吹き飛びながらスイカちゃんは自分にベホマをかけている。かなり器用だと思う。

しかしこの凍てつく波動とかいうのだがかなりきつい。物理的な衝撃波によるダメージと補助魔法の解除、更には障気の浸食ダメージといやらしい感じだ。

しかも障気を食らうと回復魔法の効き方も悪くなるらしく、ラナちゃんが必死に振っている賢者の石の回復量もホイミ並みに下がっている。

特にアルトリアさんは深刻で、輝いていた鎧は黒ずみ、剣閃もかなり鈍っている。最初にまともに食らったのが原因だろう。

スイカちゃんは色々な耐性があるらしく、ほぼ旅人の服の防御力でゾーマのプレスを食らい、凍てつく波動に巻き込まれ、私の鎧に罅が入る轟拳をまともに食らってまだ生きている。

だが障気の浸食は有るらしく、ベホマにかける時間が増えている。ラナちゃんは効果範囲から出てるためノーダメージだ。

ラナちゃん以外は鎧と服がかなりボロボロになっている。人前にでれる格好じゃあない。

あ、そうだ。

私は再び光の玉を掲げ、辺りに光をまきちらす。思い付きが当たったらしく、私達を浸食していた障気が被われ、傷こそ残ったが幾分すっきりした。

「……………わからぬ、何故に何度も立ち向かえる？何故力の差を見せても希望を無くさぬ？」

今の際で私達を攻撃して来ないと思っただら、考え事をしていたらしい。

「分かるまい！生きることを絶望としかとらえられぬゾーマには！この余の体を通してでる力が！！」

なんだかスイカちゃんも刻の涙を流しそうだ。

「……………？なんだか解らんが儂には解らぬ。…さらなる絶望を見せれば変わるか？」

スイカちゃんのセリフを完全にスルーしてゾーマは魔力を高める。ゾーマの魔力が高まると共に、辺りの気温は更に下がっていく。

「気づいているかは知らんが、先程のマヒヤドなど手加減したものに過ぎん」

すでにこの時点でゾーマを中心に吹雪が吹き荒れている。

「今から放つのはオリハルコン製にしてもヤケに固かった王者の剣を消し去った魔法よ…編み出すまでに三年かかったが、威力は保証しよう」

視界が白く染まり、体温が低下する所為で意識が遠くなってきた。慌てて魔力と闘気を巡らせて意識と体温を保つ。

白い視界の中で光る赤い瞳の目線の先に居たのは確か…ラナちゃんだ！

まずい、後方から潰すつもりか！？私がかじかみ言うことを聞かない体に活を入れ、射線を遮って盾を構える。防げるとは思えないが、無いよりましだ。

「リア！勇者！タイミングを合わせろ！！！！！！」

いつの間にか私の横にスイカちゃんとリアさんが立っている。

リアさんはエクスカリバーとカリバーン振り上げ、スイカちゃん

の両手には炎が巻き上がっている。

確かに護るより相殺の方が分が良いかもしれない。私も全身の魔力を雷撃に変換し、王者の剣に力を込める。

「その些細な抵抗を打ち破り、頼みの神官を討てば希望も潰えよう。勇者達よ、儂の力を知るがいい。これが儂のマヒヤド、アブソリュートだ」

遂にマヒヤドが解き放たれた。今までに見たことがない、辺りの景色を歪めながら凍気が迫る。

「ジエミニカイザーフェニックス！」

「ダブルカリバー！」

「ギガストラッシュ！」

私達の持てる力を振り絞った一撃は、確かにゾーマのマヒヤドを食い止めた。だが、余りにも威力がありすぎた。

激突した瞬間に起こった大爆発は私達を飲み込み、纏めて吹き飛ばした。

今の一撃でゾーマの城は完全に崩れ、瓦礫の中の私が気が付いた時は、二つの人影のみが立っていた。

一つは爆発に巻き込まれ、傷だらけになりながらも未だ健在な大魔王。もう一つは私達が盾になったおかげか、ほぼ無傷で大魔王を見上げるラナちゃんだった。

「気が付いた様だな勇者アリス。あれを受けてなお生きている上にまだ絶望しないとわな」

闇に閉ざされた空の下、ゾーマは私に話しかける。

私は瓦礫を押し退けながら立ちとうとするが力が抜けてしまい、王者の剣を杖代わりにして立ち上がる。

大魔王がいるんだ、おちおち寝ては居られない。

「その目、未だに堕ちぬ。何故何度も立ち上がる？勝機などもはや一厘にもみため、絶望を受け入れてしまえば楽になる、世界などはどうなるかと構わんではないか」

確かに勝機は少ないだが、私は諦めない。何故なら…！

「私はまだ生きています！例え世界の誰もが絶望しても！例え私を信じてくれる人が唯一人だとしても！」

力を振り絞り立ち上がる、例えどんなに辛くても乗り越える。朝が来るのをじやまする奴が居るならそいつをぶっ飛ばして希望の朝を引っ張り出す！

「誰かが私を信じてくれるなら！私の中の勇気は消えない！そして、勇気が有る限り私は死なない！！！」

私は剣を振り上げる。王者の剣も罅が入り、あと何度も使うことは出来ないだろう。

だが、ゾーマも傷ついている。相打ち覚悟ならあいつを倒す事は出来るだろう。

「…なるほど、ならば貴様を信じる貴様の仲間が死ねば、勇気も少しは失われるか？」

私とゾーマは距離が開いている。だがゾーマはすでにラナちゃん目の前だ。

「ッ！止め……」

「さらばだ、勇者の仲間よ。守ってくれない勇者を恨んで死ね」

ゾーマが拳を振りかぶる。その数瞬後、鈍い音が辺りに響いた。

闇の深淵の死闘（後書き）

と言っわけで後半に続きます。

そして伝説へ…？（前書き）

おまたせしました。ドラクエ？世界終了です。

そして伝説へ…？

視点・三人称

太陽の奪われた世界アレフガレド。

異世界から現れ、世界を蹂躪し続けた絶望の化身たる大魔王と、異世界から現れ、世界に希望の種を蒔いた勇気の象徴たる勇者の戦いは最終局面を迎えようとしていた。

ラダトームから海を挟んだ島にあるゾーマ城、侵入者を拒み続けたその地で血戦は行われていた。

戦いの余波で魔城は崩壊、最後の戦いはその廃墟で行われていた。肉を抉り取る鈍い音が辺りに響いた。

その時立っていた二つのうち一つは立ち続け、もう一つは膝を着いていた。

そこには拳を振り抜いた僧侶と、膝を着き、苦悶の表情を浮かべた大魔王がいた。

視点変更・???

「クツクツクツ」

いかん、笑いが止まらない。

今余の目の前にはあれほどの実力があり、勇者達を纏めて相手にしてもあつた余裕が無くなり、苦悶と驚愕の表情を浮かべた大魔王がいるのだ、笑いが止まらなくなるのも解るだろう？

ここまでクリーンヒットするとは思わなかったが、この策を使わせたのは余である。

大魔王ゾーマ、彼の力は正に強大だった。

余と比較しても莫大としか言いようのない魔力、全てを見抜き、様々な物事を知る知性、圧倒的な身体能力等々、大魔王の名に恥じぬ力を持つ存在だった。

そう、あくまで「だった」である。

彼が僧侶の一撃を食らってしまった理由、それは現在のゾーマが弱体化しているからである。

超絶な彼の力の源は怒りや悲しみ、恐怖そして絶望といった負のエネルギーが集まり、様々な影響を及ぼす障気である。

ならば対抗するにはどうすれば良いか？それは単純で、希望や勇氣といった正のエネルギーの心を失わず、叩き付ければ自然と弱体化していくのだ。

もちろん前提条件として、ゾーマを光のエネルギーから守り、また力の源でもある闇の衣を剥ぎ取る事、そして希望や勇氣を常に持ち続ける事が必須であった。

その厳しい条件を満たし、勇者達は戦い続けた。

途中、障気を解き放ち、相手に叩き付ける凍てつく波動や、膨大な魔力を消費するマヒャド《アブソリュート0》なる魔法を使った結果弱体化は更に進み、本来ならば避ける事の出来る一撃を食らってしまったのだ。

更にその一撃にはゾーマの最大の弱点と言える回復魔法ベホマがかかっていた事が、致命傷に成りうる一撃をゾーマに与えたのだ。

本来ならば過剰回復により再生不能なダメージを与えるマホイミを使った《閃華裂光拳》がベストでは有るが、残念ながらラナには習得出来なかった。

何はともあれ、大魔王にはかなりの大ダメージが入り、弱体化は更に進行している。

だが、それでもなお大魔王は強大な力を秘めているし、未だに魔力等には余裕がある。

対する此方だが、アルトリアは城の崩落に巻き込まれ、未だに瓦礫の下で気絶しており、リアよりは幾分かましではあるが勇者も傷付いている。勇者の盾や光の鎧はすでに罅が入ったり大きく破損しているし、王者の剣も後一撃が精一杯だろう。

本体は上手く気配が探れないが、チャンスを探っているだろう。

皆かなりイッパイイッパイであるし、少しでも余裕が有りそうな

「エエエ」

狂ったように吹き荒れる吹雪の中で、私はありとあらゆる怨念、憎悪、嘆き、悲しみ、…そして虚ろな絶望の声を聞いた。

声が聞こえる度に私の心が黒く塗り潰され、温度を失っていくのを感じていた。

だが、吹雪は確実に私の体温を奪い、黒く《漂白》された私の頭は危険を感じる事も出来ない。

「光の勇者達よ…、貴様達はよく戦った…。」

闇色の吹雪の中、不思議な声が私の頭に響いて来た。

「我が闇の衣を剥ぎ取り、儂をここまで追い詰めた。これはこの先、何時までも語り継がれる偉業であろう」

不思議と誰かの優しい声は私の心に響き続ける。

「我が腕の中で永遠に眠るがいい勇者よ、貴様の絶望は儂の一部となり生き続ける。貴様達はよく頑張ったのだ…。」

「少しずつ…意識が…遠ざかっていく…。」

「眠れ、最強の勇者、儂を追い詰めた宿敵よ…。」

も…う…終わり…：休んで…良い…んだ。

「諦めるな！」

怒声が響き、意識が浮かび上がってくる。

「諦めるな！勇者アリス！！貴様は貴様の都合で休む事など許されぬ！！！！」

暗黒の吹雪を切り裂き、私をかばうように背を向けて立つ小さい背中。私はそれを知っている。

「…スイカ…ちゃん？」

私の声にこちらをチラリと見たスイカちゃんは再び前を向き直す。その全身からは、凍てつく世界を溶かし尽くしそうな…まるで太陽みたいな炎が吹き上がり、闇を塗り替えていく。

「遅れたのはすまなかった。だが、何時まで休んでいる！」

こんな時でもスイカちゃんは厳しい。

「貴様の身体は貴様だけの物では無い！今や二つの世界の希望その

ものなのだ!!」

灼熱の炎にあてられ、心と体に熱が戻ってくる。

「立て！勇者アリス!!!余が道を拓いてみせる！貴様は世界を救つて見せる!!!」

「ぎこちない身体に活を入れる、剣は握める、まだ、やれる!!!」
「立て!!!」

私は体を庇っていた盾を捨てる。どつちみちこれが最後のチャンスなんだ、全てを賭けなければ大魔王には届かない。

「究極火炎呪文!!!ゴオツド！フェニイイイイツクスウウウウウ!!!」

立ち上がった私の前で巨大な不死鳥が姿を現す、その不死鳥はスイカちゃんの声で私に話しかける。

「共に行こうぞ！勇者アリス!!!」

不死鳥は吹雪を振り撒く絶望の化身、ゾーマにむかって道を切り開いていく。

私はスイカちゃんが拓いた道を駆け抜け、ゾーマを目指した。

私の前で爆炎が開く。巨悪は炎に包まれ、吹雪が収まる。

「これが!」

今までの旅の記憶がよぎる。様々な出会いがあった。そして様々な別れがあった

「これが!!!」

強大な敵がいた。人間の悪い所もいっぱい見た。

「これがああ!!!」

世界の誰もが私達に希望を見て、生きる力と変えてくれた。

「私達！みんなの！希望の！力だああああああ!!!」

そして、私の剣は大魔王の額を貫き通し、大魔王は地に臥した。王者の剣は力尽きたように砕け、柄が残った。

地に臥した大魔王はこちらを見ながら嘲笑う。

「闇が深ければ深いほど、それは燦然と輝く...か」

私を見ながら大魔王は話し続ける

「だが光ある限り闇もまたある……。わしには見えるのだ。再び何者かが闇から現れよう……。だがその時はお前は年老いて生きてはいまい。わははは……っ。ぐふっ！」

大魔王の姿が崩れ、消えていく。

遂に、遂に私達は大魔王ゾーマを倒したんだ。

雲の隙間から光の帯が広がっていき、世界を照らし始めた。そう、世界は、救われたんだ！！

清々しい気分で辺りを見渡す、ラナちゃんが起き上がり、リアさんが瓦礫をふきとばして現れ、スイカちゃんは何かを集める動作をしたり、アチコチうるちよろしている。ちよつと感動が薄れた。

「ま、いつか」

世界は救われたんだ。時間はあるんだ。なら少しくらい気が抜けても良いじゃないか。

私は思いつきり伸びをして、近くの瓦礫に腰を下ろしたのだった。

…それからもちよつと忙しかった。

ラダトームに戻った私は王様から勇者の名前である《ロト》を貰ったあと、城から離れて一人旅にでた。

盾と鎧は壊れたが、なんとか修理が出来た。その二つはラダトームの城に残してきた。

王者の剣は無くなってしまったが、スイカちゃんが持ってきた破邪の剣と言つ剣を代用させて貰った。

スイカちゃんはむしる攻撃力がちよつと上がったと言っていたが、良い剣だけど王者の剣並みとは思えない。

ラナちゃんはラダトームに残つて教会のお手伝いをするそうだ。神父さんを見る目がハートだった。

スイカちゃんとリアさんは戦いの後どこかに消えていた。せめてお別れ位はさせて欲しかった。

そして数年後、びっくりする形での再会となった。

視点変更・大魔王バーン

さて、大魔王を倒した余とアリス一行はラダトームに帰還した。

だが余はすでに様々な活動を分身と共に過ごしていた。

まずは次元の裂け目であるギアガの大穴がふさがる前に竜の女王の城に、地上で太陽研究をしていたかなり薄い分身に「竜の女王の卵」を誘拐させ、閉じる寸前のギアガの大穴に飛び込ませた。

次に光の玉をパクって、ゴールドオーブ（偽）とすり替えた。

ドラクエ？での戦いの原因の一つである光の玉は、元々竜の女王が勇者に渡した物である。

だがラダトーム王は光の玉を所有物として、知らなかったとは言え正当な持ち主の竜王に返還しなかった。

ならば喧嘩両成敗で両方ともゲットして、後の災いを防いでやろうとゆうのだ。

まだまだやることはある。破壊神シドー対策だ。

あれがこの世界に現れたのは、世界が拡張し、強欲な性格の人間が増えすぎたせいだろう。ならば世界の拡張を防げば良い。

この世界に来た主目的は達成したし、まあオマケでやってしまおう。

視点変更・勇者アリス

あれから数年の時がたったある日、一人旅を続けている私の前に突然一人の精霊が現れ私に告げた。

「ルビス様が浚われた!？」

なんとスイカちゃんとリアさんにルビス様が浚われたそうだ。

しかも時間指定で、会いたい場所も指定してきた。その時間に行かないともうルビス様には一生会えないそうさ。

「いったい何で...?」

幸いここからそう遠くではない、今から行けば間に合うだろう。

スイカちゃん達に話を聞かなきゃ。

そして、その祠の前でスイカちゃんとリアさんは待ち構えていた。ルビス様はロープでぐるぐる巻きにされて猿轡をされ、スイカちゃんに肩で担がれている。

「ふはははは、よくぞ来たな勇者アリス。」

スイカちゃんは胸を張りながら祠の屋根の上から私に話し掛ける。
「すいませんアリス。私は止めたんですが、母上は一度決めたら動かなくて」

リアさんが苦笑しながら私に話し掛ける。

「つて母上!？」

「ああ、アリスには話していませんでしたね」

ルビス様誘拐とかより驚いたが、マジらしい。

あんな見た目でも歴とした大魔王で、リアさんの血を分けた本当の母親だそうだ。

どおりで角なんてはえてるんだ。私は出会った時からの疑問が氷解し、すつきりした。

そっかそっかー、とやってたらスイカちゃんに怒られた。無視しすぎたのに怒ったらしくお冠だ。

「ルビスを返して欲しくば余の魔界に自力で来るが良い!」

そう言っつてスイカちゃんとリアさんとルビス様は闇の中に消えていった。

後に残されたリアさんの手紙に謝罪と詳しい事が書いてあった。

スイカちゃんは本当はバーンつて名前で魔界に太陽を作りたいらしい。そのためにアレフガレドを作ったルビス様に協力してもらいたいそうだ。

オマケに時差がひどく、こっちの一年であつちは千年もたつから一年もすればルビス様も帰って来るだろう、とも書いてあった。

「…よし!」

だがちようどころからも暇な一人旅。時間制限は一年、それまでにこっちから会いに行けば流石のスイカちゃんも驚くだろう。

「待っててね!今度は私から会いに行くから!」

目標の無い旅に明確な目標が出来た。希望を捨てなければ必ずやれるはずだ。

「頑張るぞ〜!」

こうして、私の新たな旅が始まったのだった。

~~~~ドラゴンクエスト?・そして伝説へ~~~~

・完・

オマケ〜バーン様の持って帰ったもの

- ・ボス級モンスターの死体：無数
- ・闇の衣が剥ぎ取られる時に回収した衣：一部だけ
- ・様々なレアな魔法のアイテム：沢山
- ・太陽の研究成果：それなり
- ・精霊神ルビス様とお付きの精霊：一セット（レンタル）
- ・アルトリアの異世界冒険記念アルバム：全25巻
- ・旅の思い出：プライスレス

## 大魔王の帰還

視点・三人称

大魔王バーンが異世界へと旅立ってから早8000年。

魔界は新たな勢力が台頭、三極の勢力がある時は対立し、または貿易を続けていた。

地球では存在していなかった大西洋上のアトランティス大陸、アフリカ大陸、ヨーロッパ半島全域を支配下に置く冥竜ヴェルザー。

中華地方を本土として、ユーラシアの過半、オーストラリア、南極を領有する雷竜ポリクス。

主たるバーンが不在ながら、効率的な社会システムや軍事システム、様々な研究成果により国力を上げ続けるバレンヌ帝国。

三者は三竦みになりながら平和と紛争を繰り返してきた。

2000年に渡るその対立に今、一石…いや一岩が投じられた。

大魔王バーンの帰還！！

永きに渡り不在だったバレンヌ帝国の支配者が遂に帰って来た。

その知らせは瞬く間に世界を巡り、知恵の有る者はバレンヌ帝国の動静を見守った。

謎のヴェールに隠蔽された古の大魔王バーン。彼女の動向が世界にどんな影響を与えるのか、それを知る者はまだ誰も居ない…。

視点変更・大魔王バーン

と言うわけで余はバレンヌへと帰還した。

余の帰還を魔力の反応で知ったらしいミストや天魔は直ぐに駆けつけた。

余はミスト等に今までの苦勞を勞い、我が国全てに余の帰還を伝えた。

カリスマEXは伊達では無かったらしく、皆の余に対する敬意や信仰心に微塵も陰りはなかった。

それからが大変だった。

余とアルトリアの帰還を祝う祭りが各地で繰り広げられ、余はアチコチ引っ張り回されて、演説したり酒を吞んだり恩赦をしたり酒を吞んだり神輿に担がれたり酒を吞んだり拝まれたり酒を吞んだりした。

その後、帰還記念週間としてこの一週間は全日休日となるのだった。

祭りの際には帝都バーンのコロッセオにて余VS参加者全員の大회가開かれたり（余に勝てれば一つ願いを叶えてやるのが賞品）政府や研究所で討論会を開いたりして、今の者達の実力や思考を計ったりしたが、実に有意義な一週間だった。

さて、話を変えるが、アリスと別れる時にはあんな感じの扱いだつたルビスだが、彼女はちゃんと説得してこちらに来て貰っている。元々が優しい性格の上に彼女はガチの百合属性の方だった。

こちらで時間が経ってもあちらでは千分の一しか時間が経たないこと、余にも酷い魔界の窮状をカリスマトークで訴えた事、そして再びアリスに助けられて捕らわれのお姫様気分を味わいたかつた事が説得の勝因だった。

ちなみに期限は魔界に太陽が出来るか、もしくはアリスが助けに来るまでである。

さしもの彼女も太陽を一から作り出すのは不可能らしく、いまだ太陽創造の目処は立っていないが、必ず成果を上げてくれるだろう。光の玉を初めとした各種のアイテムはタル研行きになった。

竜王の卵だが、これはこのまま育てて見ようかと思っっている。アルトリアは可愛かったが、卵から育てて見るのにも興味がある。合成機にしても、流石に竜の騎士は一人しか作れないみたいだし、下手な事したら竜の女王にも悪いだろう。

この子には王の中の王を目指してもらおうとしよう。最悪ハドラーが使えなかったら魔軍司令とするかも知れない。

まあどうなるかは余も解らないが、不幸にはなつて欲しくはない。

バラモス立ち退き死体はとりあえず合成機に詰めて置いた。

そして一番肝心なゾーマの知識とゾーマの心だ。

知識は萃めきれず、散佚してしまつた部分はかなりあつた。だがそれでも尚、余に様々な叡智をもたらした。

次元を超える方法（の一部）、新たな世界を作る技法（の極一部）、そして障気を力と変える技法である。

次元を超える為の技術は、今までの研究も含る事で地上進出を可能なまでになつた。これからは安全な次元移動の確立と応用が研究の主題になる。

新たな世界の世界の構築方法だが、こちらはあまり入手できず、せいぜいネギまの《別荘》から時間の停滞を抜いた物を作るのが精一杯だつた。まあ今はあまり関係無いのでスルーしよう。

最後の技術はむしろミストにとって相性の良い技法だろう。

…ゾーマの心だが、正直奴を配下に治められる自信は無い。

あやつは間違い無く絶望の化身だつた。

仮に完全に復活したら魔界を恐怖に落とし入れるのは間違い無い、そんなリスクを負いたくはない。

だが：そこで諦めてしまえば試合終了、そんな事は余の矜持が許さない。大魔王は常に制圧前進有るのみである。

そして余は最終手段に出た。

ゾーマの心を食べたのだ。

あまり美味しくは無かつたが、光に寄りすぎた精神は闇に傾ける事が出来たし、記憶の吸収もより効率的に出来た。

ゾーマ本来の純粋な絶望による心だつたため、復活なども無いだろう…たぶん。

あれからしばらくして、余とヴェルザーとボリクスによる三者会谈がもたれることなつた。

ヴェルザーとボリクスは余に興味があり、余は二者に興味があつた。

この会談がこれからの魔界を左右するだろう事は疑いようのない



事実だ、果たして鬼が出るか蛇が出るか、期待と不安を持ちながら  
会談の舞台に立つ。

その日、魔界に新たなページが刻まれた。

## 会議は踊る

視点・大魔王バーン

さてこの三巨頭会談とでも名付けるべき会談だが、主催者は余である。

やはりと言うかなんと言うか、余が居なかったことはかなり外交にも影響があった。

ミストを始めとした強めの連中が紛争なんかで出ても、流石に竜族相手は荷が勝ちすぎていたみたいだ。

余としては勝てないからこそ様々な兵器や戦法を開発し、軍事力の増強につながればいいかな、と考えていたのだが、コストや被害の拡大しすぎなどの様々な理由でうまく行かなかつたらしい。

火砲は黒色火薬では威力不足、魔力投石砲は弾体が職人技でないと生産出来ない上に材料も少なくなかなり高額になり、結局闘気法や魔法、またはそれを増幅する武器などが我が国でも主力である。

ただ、余の居ない内に爆弾石が採掘出来るようになり、マスケツトやピストルは非力な種族の護身用としては開発されている。周りの魔物なんかも強すぎるせいでマジで護身位しか出来ないらしいが、そして最後はダイの大冒険で使われた最終兵器《黒のコア》である。

たった数発で地上を吹き飛ばし、一発で大陸を沈めるまさに最終兵器だが、その威力故に開発はした物の、使い所のない置物となっている。

この辺は昔から余が口酸っぱく環境問題を言いまくったせいもあるだろう。

話を元に戻すが、そういつた戦力不足の所為もあり、領土こそ奪われなかったものの、関税や排他的経済水域、はたまた外交特権など様々な所で不利を強いられていたらしい。

だがこれからは違う。

奴らに匹敵、もしくは凌駕さえする余が帰還したのだ。

この会談は余の存在と実力をアピールし、バレンヌ帝国をしたに見る体制を覆し、さらにヴェルザーとボリクス両者の実力を余が調べる為である。

勿論喧嘩をふっかけたりこそする気は無いが、奴らが仕掛けてくるなら返り討ちにする気が満々であった。

しかし、流石と言うべきかヴェルザーもボリクスも余の思考の遙か先をいつており、いま余は窮地に立たされていた。

「くふふふふ、ほりゃ、もっと近う寄るが良い」

「…」

「どうじゃ？妾の膝の上は気持ち良かる？」

「…」

「おおそうじゃ！ヴェルザー、おぬし氷菓子を持ってきておったな？早くだしてくりやれ」

「い、いやあれは元々我が輩がバーンタソにプレゼントしようかと…」

「嬉しいわ！大の男が菓子ごときでグダグダと女々しいわ！…そうじゃ、それで良い」

「（…）」

「全く、さつさとだしておれば良かったのじゃ。ささ、妾の手ずからの菓子は美味いか？うむ美味いに決まっておるな？」

「…うむ、美味しい」

「当たり前じゃな、妾の手ずからの菓子じゃからな！ささ、まだまだ沢山有るからの、たとと食べりゃ」

「我が輩の氷菓子…」

「ええーい先程からめそめそとうっとおしい！ほりゃ、会談の邪魔じゃ、妾達の視界に映るな！」

今黒い格好の男が部屋の隅での字を書き始めた。

…先程からの会話で大体把握したかも知れないが、余は現在ある奴の膝の上にいる。

彼女の名はポリクス。ユーラシアなどを支配下に置く雷竜である。ちなみに先程から部屋の隅に居るのはヴェルザーである。

彼女たち位の実力が有れば、力の無駄使いを避けるために普段は人型をとるらしい。

「むう…難しい事を考えておるな？今は妾の事をみてくりやれ？」

ヴェルザーの人間体は黒い格好で黒髪黒目、肌だけは死体のように白い陰気な青年だ。

対するポリクスは豪華な金髪を縦ロールにしたボンキュッボンの豪華なお姉さまタイプだ。先程から彼女の体の一部が余の頭に乗っかって重い。

「ささ、今度は妾が焼いた焼き菓子じゃ。…くうくハムハム食べるのも可愛らしいのう。…その女官！妾の荷物に果実酒が入っており、妾の随行にもって来させよ…ああ、肩が落ちてしまっておるではないか、まったく、慌てなくても酒は逃げはせぬぞ？」

彼女はあつた瞬間からこんな感じである。最初からトップギアが入っている。

先程から何かと余の世話を焼きたがり、嬉しそうに笑ってはお菓子や酒を勧めてくる。

「我が輩もバーンタソとお話してみたいのであるが…」

「五月蠅い！女同士に割り込むではないわ！！」

また彼は部屋の隅に帰って行った。ヴェルザーは余のファンらしく、余にプレゼントをしようとしたり話しかけたりしたがっているが、ポリクスに一喝されてすぐごと逃げ出している。

もしかや竜族は女性に頭が上がらないのがデフォなんだろうか？

以前余と死闘を繰り広げたりヴァイアサンもサラマンドルに頭が上がらず、なんとファーストコンタクト時に巨大海蛇と間違われて食われかけたらしい。

少なくとも神竜の戦いなんて起きずに、ポリクスにこき使われるヴェルザーが幻視出来るんだが、一体どうなるんだろ…って話を戻さねば！

「ボリクスよ」

「なんじゃ水臭い、妾とおぬしの仲であるう？気軽にお姉様と呼ぶかよいぞ？ぞ？」

「い、いやそうでは無くな、ほら外交問題をな…」

会談の主導権はまったく握れない、ここまでペースを乱されるのは初めてかもしれない。キライなタイプじゃないので余り邪険にもしたくないし。

「なんじゃそのような些細な事か。そのようなつまらない事、ヴェルザーの強欲張りの阿呆を張り倒せば済むことじゃ。左様な些事は後にしようぞ？」

そこでヴェルザーが動いた。勢いよく立ち上がり、こちらに走りながら叫ぶ。

「嫌だ！！改正をしたいなら『ヴェルザーお兄さま』と言ってウボア！」

「黙りや！今は妾とバーンが話しておるんじゃ！」

裏拳でヴェルザーは沈黙した。容赦も無駄も予備動作も無い良い一撃だ。

「まったく。ヴェルザーのやつめ…ん？…そうじゃ！」

嫌な予感がしたために逃げようとしたが、腹に手を回されて逃げれない。

「今ここで妾をお姉様と呼べば妾が責任をもって妾の国とヴェルザーの国が課した不平等を廃し、改めて実務の者を向かわせようぞ。」

うむ、それ以外の条件なぞ呑まぬぞよ」

「…それ以外」聞くとえぬ」

その後、改めて行われた政府間実務者協議により、バレンヌにかけられた不当な圧力は無くなった。

だが、余は何か大切な物を失った気がするのであった。

## 原作の足音

さて、三巨頭会談の後であるが、バレンヌ帝国は不平等を粗方撤廃させることに成功し、まずまず成果を上げることになった。

黒歴史にしたい事もあったが、まあそれも良い。だが、問題はその後帰城してからだ。合成機に紙が貼ってあったのだ。

『長い長いバーン人生を満喫しておられるあなたへ』

この字に余は見覚えがあった。最初にこの世界に来たときに合成機に貼ってあったメモと癖が一緒である。

『原作まであと2000年になりました。これからの行動の目安として、合成機に原作までのタイムカウンターが表示されるようになります』

ふむ、大まかな目安が出来ればタイムスケジュールの調整は楽なものだ。素直にありがたい。

『あなたをこの世界に送る際に、最低でも全力で地上制覇もしくは破壊、または敗北しての撤退と条件を付けさせていただきました。』

『何故ならばその世界は《ダイの大冒険》の世界だからです』

『その世界を構成する大きな運命の既決点として、勇者ダイとその仲間達と、大魔王バーン率いる軍勢がぶつかり、死力を尽くして戦い、その結果により世界の命運を決めるからです』

『これから先、様々な介入者達やあなたによつて運命は大きく本来の姿から離れるでしょう。その結果がどうなるかは私にも解りませんがあなたがあなたなら最善の結果を得られると期待しています』

『本来ならば教えてはいけない事ですが、あなたを喪うことは大きな損失と考えて教えますが、あなたが消える、もしくは世界が消える原因は、《勇者ダイ一行の存在否定》すなわち初めから居なかった事にする事です』

『原作からの剥離はすでに織り込み済みですが、ダイ一行の存在を否定し、彼らが生まれなければ世界の根幹を喪う事になるからです』

『だからこそ私はあなたに《真つ正面》から《全力》で《地上制覇》をしていただきたい。原作開始後のタイムラインの中での彼らの戦死などは問題ありません』

『あなたが最良の運命を掴む事を期待しています。転生係より』  
むう…、期待されると応えたくなくなるな。

ヴェルザーがアレだったし、バランが魔界に来たときサクツと殺っちゃおうかと思っていたが、ダイー行の存在否定が危険なら、そのタイミングで殺るのはまずいか。

やはりミストを影武者にして、余がミストの位置につき、介入をしていくか。

しかし、後2000年か…、それ程時間が有れば、今露出して信仰を受けている余をスイカと名付け、ミストをバーンとする時間はあるか。

ああ、ルビス（バーン城の世界樹に住んでる）も信仰を得れば力が増すそうだし、彼女の信仰も増やせるように歌と踊りを覚えさせよう。

ふむ、ならばやるべき事は、

- ・バーン教の名前改修、今までのバーンの部分をスイカに変更。
- ・教科書の書き換え。
- ・ポリクスやヴェルザーへ根回し。
- ・ミストの強化
- ・余のミストの技の習得。

我が国の平均的な寿命は短命種90〜100歳くらい、長命種で1000〜不明くらい、今すでにかなり生きてる連中はだいたい把握しているし、今から変えても多分間に合うだろう。

…さて、忙しくなるな。

……………と言うわけで

原作まで早く後300年程になった。

何？飛びすぎ？そんな事はない。

さてさて、この1700年の流れだが、余のスイカへの名称変更、

余のミストへの変装共にほぼ満点で成功した。

スイカとしての余は完全に偶像化し、ルビスの分霊と共に各地で興行をして回っている。

転移技術がある程度確立し、地上には少数ながら開拓者しに行くものもあり、小さな村を形成している。

地上制覇の足掛かりとして、死の大地の地下にバーンパレスを建設し始めたし、ギルドメイン山脈に鬼眼城を建設し始めた。

後は魔界でも剣でなら最強と言われた魔剣士ヒュンケルも一世を風靡した。

ダークエルフにピサロでも居ないかとたまに探してみるが、みつからなかった。

ただ、暗黒神官の一族にザボエラが生まれたので、彼はタル研初のタルタル以外の所長を目指して、様々な賞を受賞し、数々の特許を持ちエリート街道を驍進している。

こいつは原作でもどちらかと言えば研究者として優秀だったので、この方がありがたいと言えはありがたい。

新しい妖魔師団長候補は三人いて誰にしようか迷っている。

一人は暗黒大神官ハーゴン、余に対する狂信者だが、魔力も体術も魔物支配も得意な奴だ。彼はドラクエ？のボスキャラだったはずだが、ルビスを連れてきた影響か暗黒神官一族に誕生したのだ。

あとの二人は共にFFキャラで、一人は庭に植えてた白い方の世界樹が人型になったエクステス、彼は能力はハーゴンに匹敵するし、軍政謀略なんでもござれではあるが、スローリーな部分もあるし、迷っている。

最後の一人は女性で、我が国の元老院にも名を連ねるシャントットだ。彼女は上の二人を凌ぐ魔力量と魔法技能を持ち、「余のメラだ」が出来るほど強いんだが、なんとと言っても性格がアレ過ぎてコントロール出来るとは思えない。

この三者本命ハーゴン、対抗エクステス、穴馬シャントットと言った感じか。





黄金竜の雷が世界を染め上げ、冥竜が死そのものを叩きつける。同等の力量の持ち主の激しい戦いは、ついに《神竜の戦い》を巻き起こした。

死そのものを叩きつけるヴェルザーは強大で、じりじりとポリクスは押されていった。

三日三晩続いた戦いはヴェルザーに軍配が上がり、鬨気の奔流は傷ついたポリクスに襲いかかった。

鬨気が襲い掛かる瞬間にカラミティエンドを放った事で、逃げ場を見つけた鬨気の奔流はポリクスを傷つけることなくどこかへ弾き飛ばした。

トドメこそ刺さらなかったが、彼女が酷く傷ついていることは間違いない。

余りに速すぎて余も追えなかった、魔界全土を搜索しても彼女はみつからなかった。：彼女の事は心配であり、何故仲裁出来なかったか、その自身への疑問は余を苛んだ。

：ポリクスの領土は余とヴェルザーで二等分し、お互いに魔界の半分を手にし、地上侵攻への準備をすすめた。

その時の余は知らなかった。彼女との再開と、会談を盗み聞いていた者を、だがそれはまた何百年も先に影響が有ることだった。

視点変更・???

地上を征服すればあのスイカちゃんを部下に出来る！

早くしなければヴェルザーに取られてしまう、今すぐ地上を征服するか？…いや、今の俺には力も手駒も足りない。

誰かに気取られてしまう訳にも行かない、…いつそ地上に移って征服の準備をしよう。

300年もあれば大丈夫だ、必ず俺の手にスイカちゃんを掴んでやる！！！！

## 《竜王》を目指して

常闇に沈む魔界。その一角にて二つの軍勢と巨大な力がぶつかり合っていた。

一つは竜王に代替わりし、彼女の方針で竜種のみ軍となった超竜軍団。

もう一つはアルトリアが率い、諸兵科連合を組み上げた近衛軍団。戦いは一方的に進んでいた。

傷つけられ、怒りに狂い続ける竜達は近衛の罾や策に陥り、その巨大なポテンシャルを発揮できぬまま翻弄され、討ち取られていく。ぶつかり合う軍勢の先頭では両軍団長が戦っていた。

巨大な体躯の紫の巨竜はエビルメタルを噛み砕く牙を、あらゆる鎧を紙のように引き裂く爪を、全てを溶かし尽くす地獄の業火のごときブレスを使い、蒼き騎士に襲い掛かる。

だが騎士の表情に焦りの色は無く、額の紋章も輝いてすらいなかった。

彼女は巨竜の牙を避け、爪を受け流し、ブレスを切り裂いた。

彼女が攻撃を避ける度に竜は反撃をくらい、紫の鱗は剥がれ落ち、手傷は増え続けた。

力と体力、生物としても騎士達を圧倒出来ていた筈の竜達は、今まさに為すすべもなく壊滅しようとしていた…。

視点変更・《竜王》

「っはあー!!」

唐突に目が覚めた。

…？ああ、そうか。オレはまた義姉様に負けたのか。

この天井には見覚えがある。模擬戦や模擬会戦があると何時も世話になっている。

「何故だ？何故オレは、オレの軍団は義姉様達に勝てない？」

ヴェルザーと義母様が地上制覇を目指す切欠となり、雷竜ボリク

スが冥竜ヴェルザーに敗れ、冥竜は冥竜王と呼ばれるようになった。あの日から半年、オレは超竜軍団を任された。

義母様は編成をオレに一任し、オレは最強を目指して最強種族たる竜で構成された軍団を作った。

義母様はオレの軍団を見たとき、「…ロマンは大事だと余も思うが…」。「まあ竜は度胸、何でも試してみるが良い」と軍団を認めてくださったが、同時に「コレを最適に編成する事が余からの宿題だ」とオレに宿題を残した。

…模擬会戦の結果は散々だった。

ミスト（義母様じゃない）の魔影軍団には数で押し潰され、ハーゴンの妖魔師団には呪われて皆腹痛で不戦敗、先程の近衛軍団に至っては半分しか居ないのに、オレまでやられてしまう完敗だった。

「…ちくしょう」

オレには何が何でもヴェルザーを倒す理由がある。

あの男は半公式の場で義母様を求めた破廉恥なやつだ。

しかも奴の本性に義母様は気付いておられない。

余りにヴェルザーに近すぎたし、今までポリクスが防ぎ、その所為で気付けなかった奴の劣情の強さ、義母様だけでなくポリクスや義姉様、オレや侍女達までも…いや世界の全てを我が物にするとする欲望や野望、そして何より気持ち悪いのは、義母様以外のそれら全ての命を無価値としかとらえていないあの目である。

仮にも竜王を名乗るオレが今でも悪夢として見てしまうあの目、ポリクスは本能で奴の危険さに気付き、母とヴェルザーを決して近づけはしなかった。

だがその壁は崩れ去ってしまった。

幸い奴と義母様は地上制覇を済ますまでは会談もしないらしい、親友であるポリクスを喪つたのは義母様にとつても苦しかったみたいで、ヴェルザーと顔を合わせたく無いらしい。

この時は今より焦っていなかった、だがある時母が漏らした言葉に、オレは制限時間の存在を知ったのだ。

後300年、何故義母様がその時に地上制覇を目指すのかは知らない。だがオレの目標が、どちらかの地上制覇までにヴェルザーを殺す…ではなく、300年後の地上制覇成功まで、もしくは成功後の会談までに殺す…に変わったのだ。

だからオレは急いで最強の軍団を作り、自らも訓練に訓練を重ねてきた。

「ちくしょう…ちくしょう…」

だが結果はどうだ、最強どころか最弱の軍団ではないか。あまりの不甲斐なさ、悔しさに涙が滲み、枕に顔を押し付ける。

どの位そうして居たんだろうか、静かだった部屋にノックが聞こえた。

「…誰？」

「アルトリアです、入りますよ」

「え、ちよ、待って…」

無情にも扉は開かれた。オレは慌てて顔を枕に埋め直す。

今顔を見られたら泣いていた事に気付かれてしまう。

不作法ではあったが、義姉様は気にはおられなかった。

「目が覚めたようで何よりです」

ぎしり、と椅子の軋む音がする。備え付けの安い椅子に座ったんだろう。

「傷はまだ痛みますか？」

「…いえ、術師の腕が良かったらしく、どこも痛く有りませぬ」

いけない、義姉様の優しい声を聞くとまた涙が出そうだ。

「何故負けたかは解りましたか？」

「……………いえ」

義姉様は優しいが容赦が無い、オレが泣いていた事に気が付いて居るくせに、傷口に粗塩を塗り込むんだ。

オレは意を決し顔を上げる。

「逆にお尋ねします、オレの超竜軍団は間違い無く最強を名乗れる力を持つてゐるはずなのに、なんで負けてしまうんでしょうか」

義姉様は軽く溜め息をはき、苦笑を浮かべながらも私に答える。

「…まったく、私も母上の事を言えないな…。よろしい、ならばヒントを与えます」

オレはベッドに正座をして聞く体勢になり、義姉様は軽く腰に左手を当て、右手の人差し指を立てながら説明を続ける。

「ヒント1、あなたとポリクス、ヴェルザーとの決定的な違い」

義姉様は続けて中指も立てる。

「ヒント2、力で劣る人型種が強力な竜を支配し、魔界の覇権を握っている理由」

薬指も立てた。

「ヒント3、これはヒント1に被りますが、あなたの最大の弱点は何か」

構えを解いた義姉様の手が私の紫の髪を梳く、思わず目を瞑ってしまう。

「…あなたが焦る理由は解るつもりです。ですが焦って道を踏み外せば母上の悲しみはどれほどになるか…解りますね？」

オレは頷くことで義姉様に意思を伝える。

「ならば焦らずに悩みなさい、《貴女》がソレに気付いたら、《貴女》は今の限界なんてすぐに越えるでしょう」

義姉様は席を立ち、部屋から出ていく。

「あ、あの！」

余りの大声に義姉様が振り向いた。

「ありがとうございます！」

私の言葉に、義姉様は綺麗な微笑みを浮かべた後、今度こそ部屋を出て行った。

「オレに足りないもの…オレの弱点…」

もう一度横になると急激に睡魔が襲ってきた。

「明日…考えよう」

そしてオレは意識を手放したのだった。

~~~~~翌日~~~~~

「なあバトラー、オレに足りないものってなんだ？」

いくら考えても解らなかつたので人に聞くことにした。

義母様も「足りないものは外から持つてくればいい」って言うてたし問題無い。

バトラーはキョトンとした後顎髭をいじりながら考え込む。

バトラーはオレの為に、義母様が合成した一人種族だ。

なんでもかなり良質な魔物の材料が沢山有つたからこそ作れたそう
うだ。

義姉様は武器と鎧を貰つたが、オレは最高忠臣、ヘルバトラーの
バトラーを貰つたのだ。

バトラーは凄いい、炊事洗濯秘書掃除整頓雑用監督戦闘他イロイロ、
何でもこなすスーパー執事だ。

義母様曰く「属性が万能家令ミュンヒハウゼンだから」だそうだが、
ミュンヒハウゼンってただれだか解らない。

だがオレはバトラーこそが最強の秘書だと確信している。

「……………姫様、どれからお伝えしましょうか？」

なんかバトラーがオレの心を穿つ槍みたい言葉を放つ。

「僭越ながら…まず身だしなみですな、そのような身体のラインが出る
格好などもってのほかですな。ドレス…とは言いませんが攻めて
アルトリア様…いいやバーン様並にでも女性らしい服を着ていた
だければ多少はマシになるでしょう。次にやはり言葉使いですな、
何時までもオレなどと子供のようににはしたくない、私あるいはあ
たしでもあたいでも妾でもわつちでもよろしいですので、一人称を直
されれば引く手数多の美姫として魔界に鳴り響くかと爺は思います。

他にも…」

オレは逃げ出した。あのままだと日が暮れても説教が続くのが目
に見える。

まったく、オレが知りたい弱点はそんな類の事じゃない、だがほ
かの奴に聞いてもきつと似たような事が返つて来そうだし、オレと
ポリクス達との差を聞いてみよう。

真竜の戦いの時に随行で居たのは…あ、アイツがいた。

「ヴェルザー達とお姫様との差…ですかあ？」

…相変わらずテンポが遅い。というか仮にも他の国の王を呼び捨てとか…。

「んんん？」

彼女はヒルデガルド、実力においてバレンヌNo.2を保持し続ける色んな意味で規格外の怪物である。

見た目こそただのロリ巨乳だが、帝国の初期から居る人物で、ミストと義姉様が二人掛かりでようやく本気になるという、寿命と実力がエルフの規格を遥かにぶっ飛ばした正に怪物だ。

ヴェルザーやボリクスといった連中とも何度かやり合ったが、ミストですら引き分けなのにはぼ追い返しているのだ。

今や帝国で義母様以外で勝てる奴は居ない、誰もが畏怖をもつ義母様の親衛隊の教導団長だ。

コイツはスローだが実力は有りまくる、何かヒントが解るかも知れない。

「うんんんんん？」

……駄目だ、あてになんねえ。やはり何時も
の戦いは本能でやってるんだ。

しょうがない、アイツを頼るか…。

「多分ですがあ……」

後ろで結論がでていた事をオレが知ったのは全てを解決した後だった。

「今の時間は…タル研にいるな」

タル研に到着し、アイツがいるか受付に聞けば、研究室に居ることが解った。

「ザボエラ、入るぞ」

返事を待たずに部屋に入る。

「キヒヒ、おお姫殿下、何故こんなむさ苦しい場所へ？」

「あゝもう、今はオレしか居ない、いつもみたいに喋れよ」

「キヒヒヒヒ、なら遠慮はしないぞい」

「実はだな、かくかくしかじかと言うわけだな」

「これこれうまうま…とな」

ザボエラとの付き合いはかなり長い、世間的に言えば幼なじみという関係が近い。

オレ付きの暗黒神官として10歳からタル研に入るまでの間オレに使え、タル研に入ってから 知恵を借りたい時に相談をしている。

微妙：じゃないなかなり小物臭がするが、悪知恵を巡らせれば魔界有数だろう。

「キヒヒ！相変わらず頭に血が巡らないようですな！魔界のブレインと呼ばれる儂が説明してやろう」

…性格悪いだろ…奥さんと恋愛結婚してんだぜ…これ…。

「わかりやすい順で行くと、先ずは力の弱い竜と知類の差だが、簡単だな。」

「儂等知類は知恵がある。他者を利用し最善を作り続け、敗北や失敗に学び、生きやすい暮らしを作る知能があり、野生の竜にはソレがない、もしくはあっても薄い」

…なる程、確かに竜の頭が獣並のせいだ奇襲やトラップを食らいまくったっけ。

どんなに力があっても、それを十全に発揮できる場を整えるのに優秀な将が必要か…。

「そういうことか、ならばオレの弱点は竜化したときに意識が無くなることか」

野獣の軍団の頭が野獣になれば、軍団を維持するだけならともかく、まともな作戦も立てられずに近衛の時みたいに分断されて各個撃破されるだけ…か。

「ならオレとヴェルザーの何が違うかも解るな、あいつ等は竜化しても意識があった」

「キヒヒヒヒヒヒヒヒヒ、ようやく気づきおったか。だから姫

は頭に血が巡ってないと言ったのじゃ」

「竜は確かに強力じゃ、じゃが頭が悪ければ簡単に屠られる」

「だが姫が《知恵を持った竜》となり、畏なんかを回避して真っ正面から攻撃すれば、ソレだけで勝利をつかめるだろうて」

ならば後は話が早い、竜化しても意識を保てるようにして、次席の指揮官や参謀を作ってもらい、後は訓練と実戦をひたすらにすれば少なくとも負けなくなるだろう。

「姫様、知恵を無くしてしまえば、力だけでは只の畜生になります。比類無き力を持つからこそ、逸れを自らが振り回されずに使いこなせるようにならねばなりません」

「頑張って下さい、儂等の姫様」

最後に真面目にしめたザボエラの研究室から外に出る。

ヴェルザーを殺す大目標に至までの小目標がみつかった。後はそれに向かつて進むだけだ。

後日、義母様に指揮官クラスの竜種をお願いしたところ、アンドレアルと言う竜を生み出し、オレの配下とした。

アンドレアルは姿こそ竜だが知恵をもった竜だった、有る意味オレの目標かもしれない。

さらに知恵の大事さに気づいたご褒美としてバトルレックスとドラゴンソルジャーと言う強力な竜の一族と、幹部としてイヨと呼ばれる女の子が紹介された。

彼女の正体はキングヒドラと呼ばれる竜だ。彼女もオレと同じで竜化すると記憶が飛んでしまうらしい。

彼等を加えた新生超竜軍団は訓練を重ねている。今までは突撃以外何も出来なかったが、アンドレアルやバトルレックス達により戦術に奥行きが出たし、イヨの呪文も皆を支えている。

オレは強くなり、義母様を、義姉様を護らなければならない。

そのための力として、オレは最強の軍団を作り上げている途中だ。いつかオレは全ての竜をまとめ上げ、真実最強最大の軍団を作るだろう。

オレの《竜王》への道はまだまだ遠い。

〈竜王〉を指して(後書き)

竜王・真名《????》

LV45/99(竜化時)

性別・

身長169センチ

体重、3サイズ???

何の変哲もない竜の女王の卵から孵った女の子。

生まれた時にバーンはかなりびっくりした。

紫の髪とピッチリしたボディスーツとマントが特徴で、バーン一家最年少だが最年長に見えるのが密かな悩み。

竜の女王の頼みで養子にした。

《影》の思い

視点・ミスト

暗い：暗い闇の中、《私》は只たゆたっていた。

その中はとても冷たく、常に流れ込む悪意に《私》は身を委ねていた。

《私》の輪郭は常に朧気で、《私》という個を持ったことにすら気付かず、何も考えずにただ存在し続けた。

どれくらい漂い続けたのだろうか？1000年？10000年？それとも100000年？…解らない。

永遠に変わらないように思えたある日、《私》を閉じ込めていた岩盤が破壊され、《私》は魔界に《産まれた》。

本能に従い《私》は体を獲るために近くにいた小さい人影に襲いかかった。

…小さい人影の口が開き声が漏れた。

「見つけた」

赤い：赤い口がやけに目立つその影に《私》は…《私》は…？

目が覚める。

辺りを見回して思い出したが、ここは私の寝室だ。

…だんだん頭がハッキリしてきた。ああ、あれはバーン様と出会い、私が忠誠を誓った日だったか。

毎回思うがちよつとホラーっぽい。

腹部に違和感、布団をめくると我が愛しき主の姿が見えた。

主は気位が高く、御自身から甘えて来ることは余りない、だが、人の温もりを欲しがられる時もあり、たまに私やアルトリア、竜王両王女殿下のベッドに潜り込んでくる事がある。

(悪魔神官に見つかれば粛清ものだな…)

甘えて来られるのも嬉しいし、私も甘やかして差し上げたい。だが両王女殿下は女性だから悪魔神官に見つかっても微笑まれるだけ

だが（悪魔神官は両王女殿下にも甘い）、私のこの体が男性体で有ることが彼等の気に食わないらしい。

もとよりこの身に性欲や繁殖機能などは存在しないし、我が主は永遠の忠誠対象であるが恋愛対象になるものではない。

だが肉体の頸木につながれた物達にはその様に事は解らず、下劣な妄想を元に私を攻撃してくるのだ。

悪魔神官達の我が主への忠誠や献身を疑う事は無い。だがいささか私に対する攻撃が過剰ではないだろうか。

しかし彼等の攻撃の理由は解る。私は敬虔な信者でも有るのだ。信者No.11111番であり、現在の信者会会長も長年勤めている。

バーン様信者会…今のスイカ信者会の規律は大体悪魔神官の掟に沿って作られている、具体的には8条と10条以外は共通である。

彼等は主に触れてしまった私を肅清しようとするのだ。…私が主の影武者で有ることを考慮されて八割殺しまでだが。

悪魔神官はどこからでも私を見張っている、部屋の隅から、遠くの高台から、タンスの隙間から、ドアの鍵穴から…強い視線を感じる。ああ、窓に！窓に！

「ん…あ、ミスト、布団を借りたぞ」

朝日を浴びた主がめを覚まし伸びをする、…ダメージ？再生済みである。

「さて、今日も1日頑張るが良い、ミスト」

「ははっ、全てはバーン様の御心のままに」

さて、今日も仕事を頑張ろう。

現在謁見の時間である。

謁見を行い私がバレンヌ帝国の主であると民と外部に認識させていく大事な仕事だ。

民や商人、貴族や小部族の長達、様々な雑多な者達が様々な雑多な理由で謁見にくる。

返答は私のアドリブか、耳元に隠れている小指大の主が答える。

この時余り主に頼りすぎると、悪魔神官で書記官のキレネンコにボコられるので注意が必要だ。

書記官補佐のシャーマン族のプーチンは踊りと私へ回復魔法をする事が仕事である。

朝一番の謁見後は朝議があり、様々な議題が上がったり対処を決めたりを大臣達が行い、首相が私（正確には主）に承認をもらい決裁されていく。

昼食後はまた謁見である。

午後の謁見が終われば私は自由だ、地上侵攻にむけて修行したり、主に付いて歩いたりキルの本体と酒を飲んだり様々な事をする。

今日はバーン祭り…いやスイカ祭りであり、信者会の会長たる私の演説がある。

この夏と冬の大祭は国の者どころかヴェルザー領からも参加者がくる。

主に関する同人誌、フィギア、写真集、コスプレ、ゲームなどなど、主催している私ですらよくこんなにネタが有るものだと感心するラインナップがそろっている。

最近は何王女殿下グッズやマスターヒルドシリーズなど、主以外のグッズも多数取り扱うサークルも増えたので、祭りは更に盛り上がるようになった。

私の無料配布している今日のスイカ日記は毎回好評だ。

さて、演説の時間だ。

「会場にお集まりの皆様、バーン様からのお言葉です。総員静聴！」
会場が静まった所で私は口を開く。

「諸君、私はスイカが好きだ。

諸君、私はスイカが好きだ。

諸君、私はスイカが好きだ。

眺める事が好きだ、追いかけてこが好きだ、歌を聴くのが好きだ、踊りを見るのが好きだ、ゲームが好きだ、写真集が好きだ、同人誌が好きだ、ネンドロイドが好きだ、涙目が好きだ。

平原で、街道で、森林で、草原で、雪原で、砂浜で、海中で、空中で、泥中で、街中で、この魔界で行われる、ありとあらゆるスイカの行動が大好きだ。

(中略)

諸君、私はスイカを、無敵の様なスイカを望んでいる。

諸君、私に付き従う信者会諸君。君達は一体何を望んでいる？

更なるスイカを望むか？情け容赦のない 神の様なスイカを望むか？ 天真爛漫の限りを尽くし、三千世界の鴉を萌殺す、嵐の様なスイカを望むか？

＼スイカちゃん！／＼スイカちゃん！／＼スイカちゃん！／
よろしい、ならばスイカだ。

我々は満身の力をこめて今まさに振り上げんとする握り拳だ。

だがこの暗い闇の底で幾世紀もの間萌え続けてきた我々に、ただのスイカではもはや足りない！！ 大スイカを！！ 一心不乱の大スイカを！！我らはわずかに1000万人に満たぬ信者にすぎない。だが諸君は 一騎当千の古強者だと私は信仰している。ならば我らは、諸君と私で総兵力一億と1人の萌集団となる。

「スイカ信者会、信者会会長より全会場へ。第16211次スイカ大祭、開幕せよ！…征くぞ、諸君」

会場のアチコチで鬨気が爆発するのを感じる。例年のことではあるが、主の人気は衰えを知らない。

会場の熱気を感じれば、あの暗き闇の中など信じれないような活力を感じれる。

特に今回は主とルビスが飛び入りでゲリラライブをすると聞いていたので、更に盛り上がる事は間違いない。

さて、私も会場を回るか。

…深夜、私は帰城する。

祭りは一週間続く、初日で力を使い果たす訳には行かない。今日購入した物はあとで主グッズ専門倉庫に仕舞わねば。

シャワーを浴びたら直ぐにベッドに入る。バーン様は同じ者のベ

ツドに続けて入る事はない、両王女殿下の所か、はたまたメイドを部屋に連れ込むかは解らないが、明日は目覚めた瞬間命を狙われはしないだろう。

ベッドに入り、今の幸福を噛み締めながら、私は眠りにつく。

(ありがとうございます、バーン様)

この幸せの日々をくださった主を思いながら…。

《影》の思い（後書き）

ミストバーン

LV60 / 150（青年時）

身長・高い

体重・筋肉質のため重い

原作に置ける魔影参謀。その正体はスピリット系モンスターミスト。

原作に置いてはミストが絶頂期のバーンの体に凍れる時の秘法を掛けたものにとり憑き、その体を保管していた。

本作に置いては、原作バーンにそっくりな体（異魔神ボディ）をもらい、影武者としてバーンに使える。

本来凍れる時の秘法を使う予定だったが、再生力や成長力も止めてしまったため、まだされていない。

《鍛冶師》の嘆き

視点・三人称

場末の安酒場、帝都バーンの端にある治安の悪い地区にある、酒の質も客の質も悪い、そんな酒場だった。

そこで一人の魔族の男がくだを巻いていた。

その荒れっぴりと殺気に、普段なら絡むであろうチンピラもただただ遠巻きに様子を窺うだけだった。

彼の名はロン・ベルク、魔界有数の剣士にして、魔族ながらドワーフに弟子入りし、その鍛冶技術を学び、魔界随一の鍛冶屋としてバレンヌ帝国に使っていた男だ。

《使えていた》…過去形である。

地位も名誉もある彼が何故これほどに荒れ、宮廷鍛冶師を辞めたのか、それは彼にしか解らない。

視点変更・ロン・ベルク

昔の話だ…。俺は魔界最強の剣士を目指していた。

確かに俺は強かった。地元でも、帝都のコロッセオでの剣闘でも負けはなく、嘗ての魔剣士ヒュンケルにも匹敵すると言われていた。

だが俺には弱点があった。

人並み外れた俺の闘気出力に耐えられる剣が存在しなかったのだ。

俺は大出力を放出するならともかく、細かい制御が苦手で、剣が耐えきれなければ反動は俺に跳ね返ってきてしまう。

特に最強奥義の星皇十字剣、これは魔界最強の威力の剣技。だと自負しているが、一撃で剣が砕け、反動で手が数十年は使えなくなる程だ。

俺はこの技に耐えきれぬ剣を探し求めた。

それからは魔界全土を名剣を探して旅をした。

斬りつけた相手を眠りに誘う「まどろみの剣」、女性しか使えない「誘惑の剣」、邪を退けるとされる「破邪の剣」、素早く斬りつ

けられる「ハヤブサの剣」、絶大な威力を誇る「破壊の剣」など、様々な剣を試したが、満足できた剣は一つも無かった。

だが収穫はあった。魔界の平均に比べて、バレン又本土の金属精製技術、鍛冶技能の高さは驚くほどだった。

そしてコロッセオでの御前試合でみた二振の剣、アイドルで信仰の対象でもあるスイカちゃんの使った三枚卸、バレン又独自の、刀剣と呼ばれる剣の元祖と呼ばれる剣だ。

美しい波紋、対竜用に計算され尽くした浅い反りかつ分厚い刀身、そしてあの鳥肌が立つほどの剣気。斬る事に関しては他の追隨を許さないだろう。

そして何より蒼の姫騎士アルトリア殿下が使ったエクスカリバーだ。

純粋な剣としても正に最強と思える威力、こしらえや細工の見事さ、剣身や鞘に秘められた膨大な魔力、俺の求める理想が其処にあった。

俺は最初のドワーフ村を目指した。

ドワーフ村では残念ながら今はあれほどまでの武器を打てる奴はいないらしかった。

だが通りすがったスイカちゃんの一言が、俺を動かした。

「欲しい武器が見つからない？逆に考えるんだ、自分で打てば良いんだと」

目から鱗がフィーバーした。

昔にいた奴がアレほどの物を打てたんだ、今を生き、更に技術を進めればあれを越えられるはずだ。

「ねだるな！勝ち取れ！…さすれば与えられん」

ここまで心を動かされた事は今までに無かった。流星に信仰されているだけはある。

俺はドワーフの鍛冶屋「石の王」に弟子入りし、彼の技術を学び取っていった。

今までは壊す事に意義を見いだしていた、だが、物を作ることは

俺の新たな生きがいとなった。

ある時、師である石の王に宮廷から出仕するように促す使者が来た。

だがその当時すでに1000の齢を数え、老齢だった師は要請を固辞し、替わりに俺を推薦した。

その当時、俺は新進気鋭の鍛冶屋として名が売れ始めていたし、師も太鼓判を押して俺を推薦してくれたので、使者も納得したし、俺もエクスカリバーや三枚卸を間近で見れるかも知れないという期待を持っていたから、俺も承諾した。

宮廷に出仕した時に始めて大魔王バーンの姿を見た。

謁見の時や大祭の時も紗の向こうで影しか見えないが、今は直接相對している。

「そなたがロン・ベルクか」

大魔王はやはりかなりの老齢だった。だがその威風はその年齢を全く感じなかった。

「はっ、我が師石の王に替わり、お仕えさせていただきます」

こうして俺の宮廷生活が始まった。

この頃はまだ良かった、希少な原料も頻繁に使えだし、俺の作った様々な武具は大魔王達を満足させた。

それなりに時間がたち、俺は魔界随一と言われるまでに腕を磨いた。

エクスカリバーや三枚卸程の物はまだ作れていなかったが、俺がエビルメタルをつかって作った鎧の魔槍は高性能な武具として珍重された。

鎧の魔槍は残念ながら地上で紛失してしまったが、替わりに新たに防衛重視の鎧の魔剣を作るように命じられた。

だがそれからが地獄の始まりだった。

鎧の魔剣に落ちない塗料でスイカちゃん絵を描いたり、鎧の爪きりを作らされたり、カブトに金槌を付けさせられたり、とある烏天狗に団扇を作らされたり、同じ烏天狗に鎧の万年筆を作らされた

り…。くそ、あのパラッチめ。

そいつの新聞のせいで俺にくる仕事は痛武器やネタ武器ばかりになっちゃった。

アイデアを凝らすのは嫌いではないが、余りにも多すぎて食傷になっちゃった時、その事件はおきた。

「ほう、この武器は素晴らしいな」

…力の衰えた大魔王のために、理力の杖を改良した光魔の杖を大魔王に渡した。

並みの奴が持てば護身に使える程度だったそれは、大魔王の膨大な魔力により、最強級の武器となったのだ。

「このスイカの姿、まるで生きているようだな」

しかも大魔王は威力より彫り物に夢中ときたもんだ。

その後、魔力を威力に変換するギミックをいくつか作らされたが、俺の心は限界だった。

昨年師も亡くなり、大魔王への義理も果たしたと判断した俺は、宮廷鍛冶を辞し、旅にでることにした。

「色々つぶざけやがって！せめて威力を評価しやがれ！」

安酒を飲んで一寝入りした後、俺は帝都を旅立った。

そして、あいつが立っていた。

「行くのか、ロン・ベルク」

「ああ…、いくらあんたが止めても俺はでていく」

ミストバーン、何時も大魔王の隣に立っていた頭巾野郎だ。

素顔を知るのは最高幹部しかいないそうさ。

胃痛に悩む俺に胃薬をくれたり、自棄酒に付き合ってくれたり、希少な資源を融通してくれたりと、様々な所でサポートしてくれたいい奴だ。

周りがアレな連中が多すぎた所為か、姿は怪しいが本当にいい奴だった。

「…そうか、残念だ」

「すまない、迷惑をかけちゃうな」

「いや、いい」

だがミストバーンはまだ通してはくれないようだ。

「…だが、お前の力は危険だ」

そして、俺はミストバーンの一撃を顔に受け、消えない傷を残した。

だが、それは仕方がない。世話になったのは事実だし、けじめとして受けたのだ。

しかし魔界は何時も暗くてしけてやがる。

「地上…か」

太陽という光に溢れた世界、興味がある。そこにはまだ見たことのない武器もあるだろう。

「さて、行くか」

いつか、納得出来る武器を手に入れる日まで。

《死神》なにそれ？おいし（ry

視点・ピロロ（キルバーン）

最初に言っておくが、僕は転生者だ。

前世の死因は急性心不全と言うことらしい。

このあやふやな訳は、自分では急に苦しくなったので死因が解らなかつたのと、それを教えてくれたのがヤンキーみたいな奴だったからなんだ。

転生係り、というらしいそれなりの役職の方らしいが、威厳もやる気も見えなかつた。

だがその圧倒的な眼力は昔因縁つけられたヤクザより怖かつた。

美人さんなのに、とても残念である。

「……でだ、ためーはピロロな。キルなんたら本体の」

「じゃ、たるいからとばすわ」

なる程、ピロロか。最後に出なければ生存……てちよつと。

「ま、待ってくれよ！」

「ああん！？」

「あえ、ああ、いやお待ちくださいませ！」

「チツ」

あつぶな！明らかになんか大事なことを聞いてないよ！

「な、何か特殊能力があればいたただきたいんですが。」

「ああん！ゴラア！ちよーしこいてつど消すぞワレエー！」

「生言つてすみませんでしたああああ！」

……その後、なんとかかんとか説明を受けれたが、聞いても聞かなくても良いようなもんだつた。

・俺はダイの大冒険のピロロに転生するらしい。

・他の奴がどうなるかは知らないが、彼女の転生ボーナスは自動で運命条件の緩和、だそうだ。

・運命条件は世界の運命を左右する大事な条件で、下手を打つと最

悪世界を滅亡させてしまおうらしい。

俺の今の条件は彼女の力によりかなり抑えられ、ダイや地上に作為的に力を貸さないこと、だそうだ。

・強力な特典が付いたり、原作での影響力が強いほどに、条件は厳しくなるそうだ。

・逆に条件が厳しくなっても良いなら特典も貰えるそうだ。

「…ピロロを一つ目じゃなくてちゃんとした魔族にするならどうなりますか？」

あの姿も嫌いじゃないが、恋愛するのも苦勞しそうだ。

「おいおい、んな事しちまえば外の人の中の人になっちゃうよ」

「や、やはり結構です」

「まあ苦勞すれば生前のお前に限定でもシヤスが出来る、くらいなら、条件を追加しなくてもなんとかなるぜ？…結構努力が必要だけどな」

…生前の姿に余り自信はない、だが、ピロロの姿はさらに難しいだろJK。

努力もあまり自信がないが、やれば出来るのが保証されるんだからやり遂げられるはず。

しかし、態度こそはアレだけど、なんだかんだで世話をやいてくれる彼女は面倒見がいいんだろ。

「ま、これでやってみろや」

「はい！色々お世話になりました！」

「よせ、柄じゃねえや。まあがんばんな」

そして気づいたらピロロだったのだ。

ピロロとして何年か生きた。

ピロロとしての才能を使い、高度な実力を持つ人形使いとしてヴェルザー領で有名になった。

しかし、バーン軍がバレンヌ帝国軍とは知らなかった。

原作では魔王軍としか言ってなかったしな。国としての名前があるのは当然だろう。

あと、僕以外にも転生した奴が居るみたいだ。

東方の伊吹萃香の姿の奴が、トップアイドルスイカとしてバレン又…いや魔界でで君臨してた。

まあ接点は無いんだけど。

人気アイドルらしく、カリスマがあふれていたのが印象的だった。だが、東方キャラになんて転生すればかなり条件きつかったんだろ？と、その時は他人事だった。僕はこのまま原作に関わらず生きるんだと。

だが、運命はあちらからやってきた。

「任務…ですか」

ある日突然ヴェルザーに呼び出され、玉座に連れてこられた。

「ししししかし、私は一介の人形使いです！そんなむちゃな！」

「安心せい、我が輩が専用機を開発しておいた」

床が開き、せり上がってくるキルバーン、…これが修正力と言われる物なんだろうか。

「稀代の人形使いと呼ばれる貴様なら使えるだろう」

たしかに精緻かつ精妙な操作が必要な作りだし、こんな事を出来るのは今は僕くらいなもんだ。

「これを使い、任務をこなせ…と？」

ヴェルザーは重厚に頷いた。

「それで、バーンを支援し地上の戦力をすり減らし、そして共倒れさせるのだ」

「それと平行して、スイカちゃんの様子を探るのだ！！」

ヤバイ、コイツ目がマジだ。

「寝顔！笑顔！泣顔！真顔！どれを撮っても全てよし！あどけないかんじでも、パパパパパンチラとかバナナを食べてる所とかだとポーナスも着けよう！！」

うわぁ…。

「まさか…我が輩の依頼を断るとか…無いよな？」

「はひい！YES！全力を尽くさせていただきます！」

あ、危ない奴だ。色んな意味で危ない奴だ。

ヴェルザーの鬨気に触れた虫が死んじやっているよ!!

「では行くが良い！我が輩の栄光のために！」

とまあこうしてキルバーン生活が始まったわけだ。

幸いな事に、念波によつての遠隔操作が可能だからもしもの時も安心だ。

ただ、任務は妨害よりもストーキング…観察任務がヴェルザーが写真を依頼しまくるのでメインだ。

まあ、僕は頑張つて死亡フラグからのがれるだけだし、彼女にはいい餌になつてもらい続けよう。

窓を開いた僕は、ストーカー被害に会い続ける少女の冥福を祈るのだった。

《死神》なにそれ？おいし（ry）（後書き）

全手動超高性能偵察用隠密人形「見るバーンver.1.02」

LV40

身長・かなり高い

体重・見た目より重い

特技・盗撮

ヴェルザーが様々な理由を付けて開発させた人形。

あまりの高性能さと引き換えに使える奴を選んでしまう欠点がある。

尚、頭部には写真用と録画用の機材が詰まっている。

レベルの高さは、操っているピロロの実力である。

《妖精》の舞踏会

視点・三人称

暗き世界に一瞬、光が煌めく。

ある時は規則正しくリズムを刻みながら、またあるときは激しく瞬き続けた。

其処にまみえるのは二つの影、身長こそ大差無いが、見る者が見れば一目瞭然だった。

一つは頭に角が有り、一つはソレがない。

一つは胸部が大平原だが、一つは胸部が大山脈だった。

大魔王バーンと教導団長ヒルデガルド、武に置けるバレンヌ又帝国軍トップは今、激しく、時に静かにぶつかり合っていた。

大魔王の振るう白刃が煌めき、妖精の頸を落とさんと迫る。

妖精は一步下がり携えた弓を絞り解き放つ。

青き煌めきを残して迫る矢をかわし、大魔王は更に迫る。

踏み込みは鋭く、放たれた一撃は必殺となりふたたびヒルデガルドを襲う。

下がることを赦さぬ一撃を籠手で流し、崩れた体勢に逆襲をなさんとするが、斬撃に隠された鞘による二撃により、したたかに腹を打ち据えられた。

息が押し出され、一瞬視界が暗転する。大魔王はその隙を見逃さない、大魔王の右足は妖精の頭を蹴り抜いた。

大きく間合いが開き、大魔王は起き上がるのを待ち、妖精は齒を食いしぼり、立ち上がる。

「まだ、やるか？」

大魔王の問いに。

「ツ痛いです。でも、まだまだあゝ」

妖精は諦めない、例え負けても何度でも彼女は諦めない。

諦めることは、もう止めたのだから。

視点変更・《絢爛舞踏》ヒルデガルド。

教導団長は暇な時間が無い。

書類仕事や見回りなどは確かに軍団長さん達に比べれば少ない、だが、私は暇な時間を作ってはいけないと思っっている。

私が今教導団長として居るのは単に、各軍団長さん達に稽古をつけたり、バーン様とマトモにやり合えるのが私しか居ないからだ。

軍団長さん達は軍務や他の雑務で、自己の鍛錬が疎かにしがちでどうにも体が鈍りがちだ。

そんな彼らを鍛え直す私が鈍る訳にはいかないのだ。

私は自らを鍛え、また他の人を鍛え直す金槌なのだ。

そんな私には色んな所からの引き抜きがくる。

例えば裕福な商家であり、例えば最強を求める姫様だったり、ヴェルザーという奴の所だったり。

私が頑なに拒み続けるせいで最近では減ってきたが、最近ではたまに変な所からも勧誘がきて困る。

七つの星も神聖な同盟も興味が無い。少なくとも今は。

忠誠はバーン様に誓ったし、バーン様の大望たる地上侵攻を控える今、勧誘に來られても困るのだ。

だいたい異世界から来る連中は皆さんが大抵が人か悪人かよくわからない奴ばかりで困る。

ただ、猫さんやアポロニアの精霊戦士みたいに頼もしい人もいるが、そういった人も大抵赤目の魔物が来る前兆だったりするから油断が出来ない。

だけど魔法が使えない私でも精霊さん達と一緒に戦えるのは楽しい、猫さんに使い方とかを教えてもらったのは良い思い出だ。

ただ、最近疑問に思うことがある。

私はいつまで生きるんだと。

死にたいとか自殺しようとかではなく純粹な疑問だ。

お母さんはモチロンだけど、昔の小隊仲間もみんな死んだし、それどころか知り合いだった奴には一族が絶えた奴だっていた。

確かにバーン様が老けないのは何となく納得出来る、リア様は鞘に魔法が掛かっているそうだし、ミストは不老不死らしい。

ならば私はなんなんだろう？ 私はただのエルフだったはずなのに、なんでこんな事になったんだろう？ 私は何時、仲間達の所に往けるんだろう？

「ま、いつか」

こんな時は難しく考えないに限る。

考えても答えが出そうにないし、永く生きればその分バーン様にお仕え出来るのだ。

過去を悔いる事も、先に死んだ連中を羨むのも何時でも出来るが、今バーン様にお仕えするのは今しか出来ないから、先に逝った連中の分までバーン様にお仕えしよう。

：意識を《今》に戻し、対峙するバーン様に集中する。

バーン様の攻撃が終わった今、今度はこちらが攻める番だ。

バーン様は三枚卸を辺りに散らし、得意の受けの構え、天地魔闘の構えで私を待ち受ける。

「どうした？ 次はそなたの手番だぞ」

天地魔闘は強力だが、突破口はいくつか有る。

技後の硬直が長い事、遠距離の時のカウンターの威力が下がる事。解りやすいのはこの二つだろうか？

私は闘気の込めた矢を二本上空に放ち、自らは刀に持ち替えて突進する。

先手を取るために一旦納刀し、居合いを放つ。

「フェニックススウィング！」

しかし超高速の弾きでかわされる、此処までは計算通り。

「カラミティエンド！」

必殺の手刀は落ちてきた矢が当たり、僅かに逸れる、私は納刀しながらその隙間に飛び込みかわしきる。

「カイザーフェニックス！」

三撃目、放たれかけた不死鳥は虚空から降り注ぐ矢の雨に邪魔さ

れて不発、そして再び居合いで決める積もりだった。

「あがつー!!」

矢の雨が降り注ぐなか、必殺のタイミングで放とうとした私の頭にまた衝撃がきた。

頭突きである。

一瞬、脳が揺さぶられ、意識が飛ぶ。しかしその一瞬は致命的だった。

私の鳩尾にバーン様の手が添えられる。

「ふむ、良いところまで来たが…今日はこれまでだな」

バーン様の右足が強く大地を踏みつける、それとほぼ同時に衝撃と闘気が私を襲い、再び詰めた距離は離された。

「だけど…まだ…やれる！」

「あう…まだまだ行けますよう」

闘気を巡らせ立ち上がる。

「相変わらず諦めが悪いな。だが、ソレでこそ…だ」

バーン様とて今の交差で無傷ではない、一撃一撃は軽いものの、矢の雨は切り傷を作っている。

諦めない限り勝機は必ず来るのだ。

「だいたい簡単に負けてしまえば、私は此処にいる価値すら無くなってしまう。…バーン様に無価値と思われるなんて、どんな悪夢よりもひどすぎる。」

「だから、最後まで私は諦めない。…諦めるのは、私が死んでも有り得ない。」

「今度は私も、バーン様も互いに距離を詰める。」

「チエストオオオオオ!!」

「破あああああ!!」

そして、また交差が始まる。妖精の舞踏会は、まだ、始まったばかりだから。

《妖精》の舞踏会（後書き）

《絢爛舞踏》 ヒルデガルド

LV99+?????

身長・低い

体重・軽い

3サイズ・巨乳

実力と寿命が限界突破しているエルフ。ロリ巨乳。

最大の武器は比類する者がいないほど蓄積された戦闘経験そのもの。

バーンに黒星を付けたことはないが、それ以外では敗北は無い。最近変な組織から勧誘されて困っている。

《魔王》の開戦

視点・魔王ハドラー

「1051!1052!1053!」

訓練所で片手親指腕立てをしながら今までの事を思い出す。

…あの盗み聞きから三百余年、地上に出た俺は各地でその土地の魔物を実力で支配し、人間共の気づかぬ内に悪魔の瞳や空を飛ぶ魔物を使い、まずは諜報網を構築した。

その後は俺の魔力を少しずつ空気に混ぜる事によって、世界中の魔物を少しずつ支配し易くし、魔物達の心に破壊と憎しみに染めていった。

ここで気をつけたのは暴れる一歩手前で抑えて置くことだ。

思っていたよりも地上人は力と技術力を持っている事が、調べて行くうちに解ってきたのだ。

強国と判断できるのは、四つのクリスタルと呼ばれる力の源を持ち、暁の4戦士と呼ばれる強力な戦士を抱え、更に飛空艇まで配備している《チート国家》ベンガーナ王国。

オルテガ、サイモンを筆頭とした勇者と呼ぶに相応しい力の持ち主多数を抱える《勇者の国》カール王国。

この二つは真正面から攻めれば大被害を喰らうことは間違いない。暁の4戦士はまだまともだが基礎国力が高い、カール王国は国力は低いが勇者が危なすぎすぎる。

何が危ないって嗜好からおかしい。

サイモンはさまよう鎧を愛用し、味方に間違われるスリルを楽しみ、オルテガに至ってはパンツと覆面である。お前は昔のエリミネーター族かと突っ込みたい。

だが変態度に比例するように実力があるのでたちが悪い。

強国と思えるのは先程の二国だが、他の国も侮れない。

脅威の高い順に行くが、まずは《城塞国家》リングア、奴らの

国土は大半が城塞な上に、騎士団である《リングイア地獄の壁》は精鋭だ。

次はオーザムだろうか？彼らはカール程では無いが、精強な騎士団を有している。土地柄か冬季戦と持久力はかなり高い。

次が《魔法王国》パプニカか？賢者量産学校と呼ばれる魔法学院は、本当に賢者を量産している。マジックユーザーの人口比率は世界一だ。

次はアルキード王国、ヴェルザー領から亡命した魔族の村が領内にある、他は普通。以上。他に特筆する事は無いが、魔族が政府と軍内に割といるそう。

ブービーから逃れたのはロモス王国、大陸一つを制覇しているが、森ばかりで俺の軍の魔物を大量繁殖させるのにちょうど良い。

ブロキーナとかいう爺が居るらしいがもう年だ、ムチャは出来まい。

国王も爺らしいから後回しでも良いだろう。

ただ、王子のパパスは良い戦士らしいから少し注意がいるな。

最後はテランとか言うのがあるが、資源も人口もない小国どころか小さな村みたいなどうでもいい国だ。

ちなみに俺の居城である地底魔城はパプニカのあるホルキア大陸にある。

賢者なんかは学院や宮廷に詰めてばかりで外に出ないからな、バレにくいしパプニカを落とせば安全だ。

腹筋をしながら考える。

あまり時間をかけ過ぎればヴェルザーが地上侵攻してしまう、準備には時間をかけた結果、十分な魔物の数は確保出来た。だが、ソレで本当に勝てるか、と言われれば疑問が残る。

だいたい地上の魔物は弱い奴が多い。こんな奴らじゃあ勇者にかかれは無双されるだけだ。

かと言って魔界の魔物はコントロールし辛いし、スイカちゃんを狙うヴェルザーやバーン様にどんなちよっかいをかけられるかわか

ったもんじゃない。

鏡の前で筋肉の仕上がりを確認する。うん今日も綺麗な青光だ。俺自身の肉体改造（健全な意味で）はこれ以上は難しい。

筋肉が増えすぎれば体の動きを阻害し、逆に弱くなるってドラゴポールに書いてあったしな。

…しかし修行は間違い無く効いたな。さすがにペタンが掛かった重力増加訓練所（税込198000G）は凄まじい効果と言わざるをえないな。

とは言え後は闘気量と魔力量を増やすしかないが、一朝一夕には無理だからな…。

よし、今日の軍議で地上侵攻作戦の細部を詰めて実行に移るか。俺はマントを羽織り訓練所から立ち去りシャワーを浴びて汗を流す。

バーン様を書いたとされる「魔王への一步」にも、魔王たるもの生活感を出すな、と書いてある。汗臭い魔王はだめだな。

小間使いに体を拭かせ、新たなマントを羽織る。フード（耳っばい突起付）付きの一張羅だ。

そして、軍議の間には俺の軍団の指揮官が揃っている。まずは軍師ブラス、コイツは闇になかなか染まらなかったが、俺が直々に闇の心を植え付けた。

弱い鬼面導師だが頭は良い、数少ない魔界の魔物の封印した魔法の筒を持たせたから自衛は出来るだろう。

親衛隊長バルトスは、俺が禁呪法で作った割には真面目で礼儀正しい奴だ。

そして戦士団長に若手のクロコダインを据えた。各国の細部を調べていたら、かなり強い魔物が居たのでスカウトしたのがコイツだ。本人は獣王を目指しているが、まだ若さが邪魔をして貫禄は無い。だが経験を積みば獣王となり俺を支えてくれるだろう。

遊撃団長として、禁呪法で作りに出したフレイザードを据えた。

バルトスとは反対に、俺の欲深で狡猾な部分が反映されたが、む

を奇襲するぞ！」

今、正にこの時こそ歴史を刻む時だ。

スイカちゃんのため、俺の野望のため、地上人よ、恨みは無いが支配させて貰うぞ！！

《魔王》の開戦（後書き）

魔王ハドラー

LV40

身長・デカイ

体重・重い

鍛え抜いた逆三角形の体の持ち主。

スイカを護る一心で腐れ縁のガルヴァスと地上で魔王軍を結成した。

原作より地上軍が手ごわいたために、原作でいなかった若いクロコダインと早く生まれたフレイザードを登用している。

《冥竜王》の思惑

視点・三人称

地上世界は危機を迎えていた。

突如として現れた魔王ハドラーは全世界に宣戦を布告、一時間後には各王城は奇襲にあい、混乱し、統率の乱れた軍団に魔物の軍団は容赦なく襲いかかった。

各国は首脳部に被害を受けた。

特に被害が大きかったのはロモスとカール、そしてオーザムだった。

カールはハドラー直々に奇襲を仕掛け、一時は王女フローラを手中に収めかけた。

だが、若き衛士アバン等の活躍によりフローラは危機を逃れた。

ロモスは王子パパスの妻マーサを浚われ、王子パパスは魔物達から妻を取り返すべく孤軍奮闘していた。

彼らはまだ良かった。オーザムでは奇襲をかけたフレイザードにより首脳部は軒並み壊滅。今まさにオーザムの命運は尽きようとしていた。

氷炎の魔神は奇襲の勢いのままで城下を焼き尽くしていく。

頼みの騎士団の官舎も奇襲され、なすすべもなく壊滅に追い込まれた。

逃げ惑う民衆の背後からギラが、メラが降り注ぎ、物言わぬ骸を量産していく。

「フレイザード様、降伏した者はいかが致しますか？」

一体のフレイムが問いかける。

「決まってんだろ？殺せ」

「遊撃軍が荷物を抱えたら意味ねえだろうが！」

喋りながらもフレイザードは止まらない。彼は獵犬の様に必殺の罠に民衆を誘導する。

「ほくら逃げろ逃げろ！みんな焼き尽くしちゃまうぞぉ」

追い立てられた住民達は火の気の少ない開いた門に殺到していく。

「そうだ、いい子だなあおい！ヒャーハハハハ！」

それは死神の前に頸をだす行為だった。

「今だ！掛かれえ！」

民家の屋根の上から、城壁の上から、路地の間から、様々な所から放たれたヒヤドの鋭い氷柱や凍える吹雪は彼らを貫き、体温を奪っていった。

足を止めてしまった者は後ろから押されて転び、踏み潰される。

一度動いた群集は止まれない、ただ開いてる門を目掛けて走り、死んでいく。

そして当たりを焼き尽くしたフレイム達は再び民衆を焼き尽くしていった。

そして…朝日の昇る頃には、動くのは魔物だけであった。

「よぉ〜し、撤収だ！こんな田舎にやあもう用はねえ」

開戦からわずか数時間、一つの国が地図から消えてしまった。

「クツクツク、俺が一番手柄だなあ」

アレほどの惨劇にも魔神は揺るがない、彼の脳裏には自らの栄達が占めていた。

…オーザムは極端な例だったが、大なり小なり各地で似たような光景は繰り広げられていた。

地上はまさに死と恐怖が織りなす世界になりつつあった。

視点変更・《冥竜王》ヴェルザー

「グフフフフ、我が輩の地上侵攻は計画通り、1%の遅れ所か、むしろよくやっているでは無いか」

地上では今、ハドラーとかいう小僧が地上制覇に向けてキャンペーンを展開していた。

あの時野心の強そうな奴が居たから地上侵攻の話を振ったが、見事に餌に食いつきおったわい。

まさかボリクスまで釣れるとは思わなんだが、いずれはバーンを

巡り殺し合っただろうしスケジュールが早まっただけだ。

しかし我が輩の「死に誘う」程度の能力が、同格相手には効きにくいとは誤算であったな。

まあとにかく、今の所はハドラーには順調に地上侵攻して貰わねばならぬからな、ダメー経由で資金を援助してやるか。

本当なら我が輩の金など總1G分けてやりたくは無いが、更なる大魚を得る為には仕方あるまい。

もしハドラーが負けても地上人はかなりのダメージを負っているだろうし、あまりにダメージが無いな再びハドラーを援助して薪をくれば良い。

もしハドラーが勝ちそうなら、チェックを掛けたところで纏めて踏み潰せば良い。別にハドラーの条約を交わしているわけでもないからな。

すでに我が輩の誇る1000万の軍隊は出動を待ち、号令を掛ければ直ぐにでも地上侵攻が出来る。

万が一ハドラーが我が輩以上の実力を持ってしまった時の為に、黒の核を用意した。

大陸一つを沈めるこいつを食らえばどんな奴でも一溜まりもあるまい。

ついに、ついにバーンを我が輩の手中に収める事が出来る。

この死に満ちた暗い世界で只一人、眩い光で魔界を照らし続ける女。

姿こそ幼いが、支配者として、戦士として、研究者として、偶像として最も輝き続ける女。

そして、只一人、ポリクスごとくに侮るでもなく、愚民共のごとくに恐れるでもなく、識者のごとく我が輩に敵意を向けるでなく…

只、我が輩を見詰めた女。

我が輩は生まれた時から孤独であり続けた。

両親など居た覚えも無ければ、周りの奴らに育てられた覚えも無い。

「死に誘う」程度の力を暴走させ続けた我が輩に近寄る物は無く、死体と残骸がだらけの世界が我が輩の世界だった。

だからこそ我が輩は欲した。我が輩の孤独を鎮める様々な物を。長じるにつれてその願望は強くなっていった、能力もだんだんと操れるようになっていった。

我が輩は殺して、殺して、殺した。

邪魔者を殺した、抵抗する奴を殺した、逆らう者を殺した、襲いかかる者を殺した。

そして我が輩は広大な領土、様々な物品珍品名品、数え切れない大金を手に入れた。

そんなある日ボリクスと出会った。

我が輩に恐れを抱かぬ彼女に興味があった。だが、彼女からは格下と侮られ、拒絶しか感じなかった為、我が輩も興味を無くした。

ミストと出会った。アレは我が輩の能力が全く効かない変な奴だった。

肉体同士でぶつかり合い、ある意味好敵手と呼べる関係が出来た。ミストからバーンの存在を教えて貰い、入手したポスターに、我が輩は一目惚れをしてしまった。

その後は様々なグッズを集めたり、ミストから会報を貰ったりした。その度にバーンに会いたい欲求は積み重なっていった。

そして運命の日、我が輩は再び一目惚れした。

我が輩自身を射抜く視線、目下でも目上でもなく、同格と扱ってくれたこと、一声発する度、ふとした仕草をみる度に恋に落ちて行くのを感じた。

その時はまだ、我が輩一人の物にしようなどとは思っていなかった。この関係も悪くないと思っていた。

だが、会えば会うほどに恋は募り、独占欲は燃え上がった。

何度となくその思いを振り切り、平和で優しい時間が過ぎていった。

だがソレも限界が来た。だから我が輩は賭けに出た。

もしバーンやボリクスが地上侵攻に成功すれば、今の状況を永遠に楽しもう。

だがもし我が輩が勝てば、我が輩の欲望のままに振る舞おうと。まあ結果はあれであったが、我が輩に有利な局面を上手く作れたとは思う。

そこまで考えていた時、我が輩に叩きつけられた鋭い殺気に気付いた。

よく耳を澄ませば城内で戦闘している音が聞こえる。

そして、奴は我が前に立ちふさがった。

竜の騎士、まさか実在していたとは。

だが我が輩とてむざむざ殺られる訳にはいかん！我が輩の爪と、騎士の剣は同時に閃き、鬭争が始まるのだった。

《冥竜王》の思惑（後書き）

《冥竜王》ヴェルザー

LV50/200

サイズは人間時

身長・高い

体重・もやし

「死に誘う」程度の能力を持つ冥竜王。

能力だけでも反則だが、肉体能力も高い。

最近、魔界の地下に何か居るのに気付いた。

《霸王》の王国（前書き）

全文三人称に挑戦してみました。

《霸王》の 王国

視点・三人称

魔王ハドラーの唐突な奇襲攻撃、そして同時に行われた地上侵攻。オーザム、ロモスは特に大きな被害を受けた。オーザムに至っては主要な王族や騎士団、さらには王都は灰燼に帰してしまった。

各国がどうなったか？カールは以前にも記した。

リンガイアの平地全てを埋め尽くす城塞群は猛攻をはねのけた。

魔王の将が居なかったのも被害の少ない理由だっただろう。

パプニカには親衛隊長バルトスと軍師ブラスが仕掛けたが、大魔法使いマトリフと若き賢者カダルにより国王は命脈を繋いだ。

だが地底魔城の存在し、高い金属加工力と縫製力のあるパプニカは、これ以後も激しい襲撃を受け続ける事になる。

ベンガーナには副司令ガルヴァス直々に奇襲を仕掛けたが、奇襲を予測していた若き国王クルテマツカ？世は国境に配置していた暁の四戦士を招集、ガルヴァスの撃退に成功した。

だが暁の戦士の一人ドルガンを討ち取る事には成功、ベンガーナに大きな被害を与えた。

テランはハドラーも無視した。

そしてアルキードだが、かの国は異常であった。

王と王妃の寝室に侵入した奇襲部隊は、何もすることなく消し炭となったのだ。

余りの早業に、ハドラー軍は原因を突き止める事も出来なかった。何故奇襲したにも関わらず各国はある程度被害を抑えることが出来たか？

魔界より地上の方が戦乱に溢れていたからである。

魔界に置いては国家同士の大規模な戦乱は、地上では考えられない千年と言う単位で起きていないのだ。

勿論、模擬会戦や模擬戦争などをたまに行い練度を維持し、地上

に行けるように地上各地の戦場で戦訓回収をしていた大魔王正規軍と、思い付きのように行わせる軍を挙げての殺し合いにより練度を維持するヴェルザー軍は高い練度維持している。

だが、長い間地上に居続け、訓練や軍団結成に時間を割いたハドラー達は、個ではともかく軍隊としてはまだこれからであった。

地上界で近年まで戦乱が続いた理由、それはギルドメイン大陸統一を掲げて戦争を仕掛けた一つの国家、ベンガーナ王国の所為である。

その目標を掲げて他国を侵略し、ベンガーナ王国史上最大の版図を勝ち取った王こそ、各国から獅子と畏れられた霸王、クルテマツカ？世である。

彼は幼少の頃から人並み外れた知性の煌めきを見せ、多くの臣民は彼の上に更なる祖国の繁栄を確信していた。

しかしその突出した知性が彼を危機に追いやった。

父王たるクルテマツカ？世は彼に地位を追われかねないと恐怖し、自らの息子を暗殺を図った。

暗殺者の凶刃が避暑地にいた王子を襲った。だが、天命は彼を見捨てなかった。

暗殺者の凶刃が王子に襲い掛からんとしたまさにその時、旅の戦士ドルガン・クラウザーが現れて暗殺者を撃退した。

暗殺者の背後に父が居ることを確信した王子は、後援者であるバル城主ガラフ・ハルム・バルデシオンとサーゲイト城主ゼザ・マティアス・サーゲイト、王子に味方した人狼ケルガー・ヴロンドットらと共に反乱軍を結成し国王軍と衝突し勝利を収める。

父王から王位を篡奪し王子はクルテマツカ？世として即位後、戦争の功労者である先の四人を暁の四戦士としてそれぞれ取り立てた。その当てもベンガーナは大国と言えた。だが新王は納得せずに様々な改革を断行した。

反対派や理由無く中立だった貴族を追放して領地を確保し恩賞と直轄領に使い、恩賞のついでに貴族の大半を領地替えして整理し、

国家規模で再編成をした。

彼の改革は内政でも実施され、輪作や新型農具を開発したり学校を作り国力を増大させた。

さらに科学者シドを登用し、今まで謎だった4つのクリスタルの活用法を編み出した。

クリスタルから放たれる余剰の力を使い、魔物を弱体化する結果を王国全土に展開し、魔物の脅威によって開発出来なかった土地の開発を容易とした。

軍事面でも大きな改革は進んだ。

騎士ではなく国民による常備軍を編成し、士官学校を設立した。

そして、クリスタルの研究から誕生した魔導技術と、それにより開発出来た飛空艇は各国の恐怖の象徴だった。

そして、改革と発展が落ち着いたころ、クルテマツカ？世は宣言をした。

「このギルドメイン大陸において！過去から現在に致まで何故戦乱が起き続けたか！それはこの大陸が他の大陸と違い統一されていないからだ！」

「ミスリル鉱山をめぐるアルキードとの長年の確執！国境をめぐるリンガイアやカールとの戦乱の日々！領海をめぐるパプニカやロモスからの圧力！」

「これら全ては！大陸の盟主に相応しい国家が存在せず、誰も大陸を一つに纏められなかったからだ！！！」

「私は国民諸君に約束する！戦乱に怯えぬ日を！我らベンガーナこそを大陸の盟主となると、そして世界の盟主となることを！！！」

そこからが戦乱の始まり、他国においては世界大戦と呼ばれ、ベンガーナにおいては大陸統一戦争と呼ばれた長い戦乱が続いた。

世界各国を巻き込んだ大戦は昨年中立を貫いたテランにて休戦条約が結ばれ、各国は2年の休戦を結んだ。

ベンガーナは拡大し、猛攻を受けたリンガイアは城塞を拡張し続け、カールでは高い軍功を上げた者が勇者とよばれた。

今回の魔王ハドラー軍の侵攻は、各国の緊張と軍拡の最中に行われたのだ。

そしてハドラー軍襲来から一週間後、ベンガーナから各国に休戦期間の延長と、対ハドラー限定の同盟の申し入れがあった。

ハドラー軍の侵攻を受けた各国はベンガーナの思惑をはかりながらもこれを受諾、様々な感情が絡まっているが世界は魔王に対抗し始めた。

王都ベンガーナ、世界の盟主たらしめる霸王の国の首都である。若き霸王クルテマツカ？世は執務室で紙の山に埋もれていた。これも彼が発明した植物製の紙である。

そんな彼の執務室にノックの音が響いた。

「誰か？」

国王の誰何の声に衛兵が答える。

「バル侯爵様がお見えになりました」

「よし、入れ」

入ってきたのは彼の腹心であるバル侯ガラフ、老境に入りながらも益々盛んな男だ。

「陛下、ドルガンの葬儀はつつがなく終わりましたぞ」

それは先日戦死したドルガンの葬儀の報告だった。

「…そうか、出来れば出席したかったが。全く、苦労して得た玉座とは言え難儀な物だな」

全ての頂点に立つ彼は、部下であり命の恩人であり、年上の友人であったドルガンの葬式に立ち会う事は許されなかった。

「その言葉だけでもあいつは浮かばれますでしょう」

「そうか、と返した国王であったがふと気づいた。

「彼の息子、バツツはどうなる？母も一昨年失ったと聞いた、今はまだ15歳であった筈だが」

「それにつきましては陛下に御裁可いただきたいのですが、タイクーン公が以前から付き合ひのあるサリサと夫婦として、タイクーン家を継がせたいとの事です」

ガラフの差し出したのはすでに全手配を終え、後は国王の許可を待つだけの書類であった。

「いいよ、その代わり教育をしつかりするように伝えてくれ」

「はい、畏まりました」

書類にはサインしガラフに返す。だが受け取ったあと退出すると思われたガラフはまだ部屋に居る。

「どうしたんだいガラフ？」

「…陛下、そろそろ身を固めませんか？縁談は幾らでもありましように」

だが、この言葉に国王は苦笑するばかりだ。

「ガラフ、今は魔王ハドラーとの戦の最中、無理なことはわかってるだろう？」

だがガラフは諦めない、頑固爺の本領発揮である。

「国内の貴族だけでは有りませんが、諸国でも適齢期な方はおられます。カールのフローラ姫やアルキードのソアラ姫、陛下が望めば選り取り見取りですよ」

国王は呆れた様に「いや、実際に呆れたのかも知れないが答える

「ガラフ、お前解っていて言ってるだろう？その二人が不味いつて

ガラフはニヤリ、と笑いながら答える。

「原作での重要人物だから…ですな」

国王は頷いた。

クルテマツカ？世は転生者である。

転生特典は、行動に応じてポイントを取得し、そのポイントを使って人材や物資を得る《ポイント引き換えマシーン》である。

これを使い、彼は初期ポイントで暁の四戦士達を呼び出し、戦友兼部下として重用していたのだ。

呼び出した際に原作知識も付加したために、どう介入するか何日も話し合ったものである。

そして、彼に渡された宿命は…。

「ッ！ごぶふ！ゲボツ！！」

突然国王は咳き込んだ、同時に口から鮮血が吐き出される。

だが国王はすかさずエチケット袋に逸れを吐き出し、ガラフは慌てずに備え付けの薬と水を用意する。

「陛下はとことん体が弱いですからな、万が一を考えますと早めに世継ぎを作っていただかないといけません。これは家臣一堂の総意とお考えください」

薬を飲ませ、国王をベッドに運びながらガラフは言う。

「まったく…バーンの地上侵攻を阻止しないと、その年に死ぬとか…」

「バーンさえ倒せば良くなるそうですからな、何としてもそれまで死んではダメですよ」

「ははっ解っているさ」

国王を運んだガラフは部屋を辞する前に一言残した。

「それと、婚約者は我等で見繕いますからな」

「え、ちよっ」

無情にも扉は閉まった。…とりあえず彼は体を休めるために眠りに就く事にした。

(しかし、いよいよ原作突入のカウントダウンが始まったな)

眠りに就く前に彼は思う。

(色々やったバタフライ効果が知らないが、良い方向に向かえばいいが)

彼には幾つかのプランがあった。

その中にはもっと平和的な物は数多く存在していた。だが、世界全体の軍事力増加のために、あえて世界に喧嘩を売ったのだ。

(ベンガーナー国だけが強くなっても負けてしまう)

彼はポイントと引き換えに様々な情報を入手していた。

魔界の転生者については要求ポイントが高すぎて何も解らなかつたが、逆にかんりの大物が転生者であると確信出来た。

(もしかしたらハドラーが転生者かもしれない)

(今回襲撃してきた奴はたしか豪魔軍師ガルヴァス、たしかアニメ

映画のボスキャラだったはず)

(に各地の細作によれば、ロモスを襲撃したのはピンク色の鱈男クロコダイン、オーザムは炎と氷の魔物：フレイザードに滅ぼされてしまった)

ハドラーが転生者ならばこの変化は納得出来るが…。

(結論を急がない方がよい)

まだ確信が有るわけではない、最悪大魔王バーンこそが転生者かもしれないのだ。

しかもオーザムが滅亡したせいでポイントがマイナスされ、手持ちのポイントではしばらく何もできそうにないのが解った。

(各国が勇者を使い点を突き、我が国が面で押し潰す)

国王は様々な未来を描き、最善を模索しながら眠りに就くのだった。

《霸王》の 王国（後書き）

《ベンガーナ国王》クルテマツカ？世

LV5

身長・それなり

体重・軽い

ベンガーナ国王に転生した人。

ポイント引き換えマスイーン以外にチートは無いが、マスイーンがチートすぎたために超病弱になった。

日に三回の吐血は基本である。

バーンの地上侵攻を防げば寿命は人並みになる、病弱は治らないが。

《王子》と《獣王》（前書き）

ちよつと短いです

《王子》と《獣王》

対ハドラー同盟が結ばれ、魔王ハドラーと人類との戦いは新たな局面を迎えた。

各国はそれぞれの思惑を抱えつつもハドラーに対して団結して行くことになった。

オーザムを壊滅させたハドラーは、他国の奇襲は不調に終わったものの、一定の成果を上げたと判断した。

ただ、奇襲を防いだ方法が解らないアルキードに対しては、さらに諜報を強化していった。

ハドラーは足場を固めるべくフレイザードを招集、パプニカへの攻勢を強めた。

各国は後手に回りながらもハドラーへの反攻作戦を組み立てていく。

森の王国ロモス、かの国では王子パパスの妻マーサが、獣王クロダインの奇襲の際に浚われるという不祥事が起きている。

パパスは父王シナナに少人数による獣王軍根拠地への奇襲を願い出た。

シナナはパパスの願いを聞き受け、逆にマーサ救出を厳命し、奇襲のために少人数しか連れていけないパパスに国宝である覇者の剣を授けた。

こうしてパパスとその従者サンチョ、腕利きの兵士パピンの三名はマーサを助けるべく深き森に侵入したのだった。

視点変更・王子パパス

：真夜中の森、暗い木陰から現れたキラリリカントを斬り伏せお化けキノコの吐息をかわす。

返す刃でお化けキノコを仕留めた後、辺りを伺えばパピンの槍がキメラを貫いていた。

辺りの魔物を倒したのを確認し、剣を振るい血糊を飛ばす。

神の金属オリハルコンを使い、鍛聖と謳われた鍛冶屋が鍛え上げた覇者の剣は、汚れを嫌うかのように血糊も脂も何一つ残す事も無かった。

「パピン！無事か！？」

「大丈夫です！まだやれます！」

パピンは大丈夫だな、念の為にホイミをかけた。

森の暗がりから小太りな男が音もなく現れた。

私の従者サンチヨだ。体になあわず優秀なスカウトである彼には獣王軍の行方を追わせていた。

そのサンチヨが現れたと言うことは…まさか！

「見つけたか！」

私の問いにサンチヨは頷く。

「はい、ついに奴らの根拠地と、マーサ様を見つけました！」

「でかした！急いで案内を頼む」

「はは、サンチヨめについて来て下さいませ」

奴らの根拠地が近いとすれば先程の奴らは見回り、奴らが対応する前に仕掛けねばなるまい。

……サンチヨの後を追いなから私はこの世界に来る前を思い出していた。

ラインハットの古い遺跡で愛する息子を人質に取られ、マーサの事を託して討ち取られた後、私の意識は喪われずに息子…リュカを見守り続けた。

長く苦しめられた奴隷時代、青年となり神殿を脱出した後の冒険の時代、そして幼なじみのピアンカちゃんとの結婚、そして我が祖国グランバニアへの帰還と出産、再びの別離、孫の成長…そして、マーサとの再会。

再会した私とマーサは光に包まれ天に登っていた。その時、マスダードラゴンの声が私達を新たな世界に導いた。

私とマーサは異世界で生まれ変わったが、その代償として私達には使命が与えられた。

将来この世界に大魔王が現れる、その大魔王から世界を救うという重大な使命だった。

勇者は未だに産まれていないらしいが、必要になれば必ず世界に現れるらしい。

ならば勇者の道を切り開く為にと私は再び剣をとり、マーサはそんな私を良く支えてくれた。

そして現世でも私とマーサは結ばれ、私は彼女を二度と離さないと誓いを立てた。

だがその誓いは破られた。

王城を奇襲した魔王ハドラーの軍勢を撃退していた最中、獣王クロコダインが単身城内に突入したのだ。

「マーサだな？恨みはないがハドラー様の敵命でな。悪いが一緒に来て貰うぞ！」

…私が部屋に着いた時には、クロコダインは怪鳥と共にマーサを連れ去っていった。

同時に潮が引くように獣王軍は撤退、私は今生の父にクロコダインへの奇襲を提言した、父は覇者の剣を私に下さりマーサを助けると言ってお下された。

そして今、クロコダインの根城…と言うよりキャンプと言うべきか、開けた場所にたむろしている種々雑多な魔物とクロコダイン、そしてマーサを見つけた。

「私が正面で引きつける、サンチヨ、パピンはマーサを頼む」

「わかりました、パパス様、御武運を」

そうして私は正面に回り込み、サンチヨ達は裏手に回る。

正面に回った私は大声でクロコダインを誘う。

「クロコダイン！我が妻を返して貰うぞ！！」

途端に騒いでいた魔物達は静かになり、次の瞬間には怒号とともに押し寄せてきた。

私は覇者の剣を引き抜き、襲い来る魔物の群れを迎え撃つのだっ

た。

《王子》と《獣王》（後書き）

《王子》 パパス

LV26

身長・大きい

体重・それなり

ドラクエ5からの転生者。実力は依然として健在。

マーサと式をあげ、幸せな生活をしていたが、獣王クロコダインによりマーサが殺われてしまった。

なお、サンチヨとパピンは非転生者。

《国王》の平穩

視点・三人称

魔王ハドラーと地上連合の戦いは、激しさを増すことは有れども費えることは無かった。

開戦から早二年、空は死の前の絶叫で埋まり、地は死体で踏み固められた。

ロモスでは王子パパスが妻であるマーサを奪還、それ以後も何度もぶつかった獣王クロコダインとは、時には戦地で酒を飲むほどの仲となったが、お互いに遠慮も油断も手加減も無しに戦い続けた。

パプニカでは氷炎魔人フレイザードによる猛攻撃を受け続けたが、賢者カダルはこれをよく防ぎ、国王から直々に賢王の称号を貰う事になった。

副司令ガルヴァスとベンガーナは激戦を続けているが、ドルガンの敵討ちをなさんとして土気の上がるベンガーナ軍に押され、ガルヴァス軍の戦線は縮小し続けた。

カール王国は序盤においてハドラー直々の奇襲を受け、その後もハドラーの直属の部隊が攻撃を仕掛け続け戦線は後退していた。

ハドラー撤退後は親衛隊長バルトスと軍師プラスが攻撃をし続けていたが、王女自らの出陣と、アルキードの救援軍を受けて五分に持ち直そうとしていた。

リンガイアは高すぎる防備から積極的な攻勢を受けずにいた。

これを利用し、リンガイア国王はまずはベンガーナに援軍を派遣、ガルヴァス軍の戦線を早期に崩壊させ、カール救援を最終目標として外征軍が組織された。

実は判断自体は速かったものの、堅守防衛が基本方針だった為外征力が無く、一年以上かけて外征軍は漸く出陣したのだった。

アルキードはハドラーが様子を見るために積極的な攻勢を受けず、

アルキード軍は主力を苦戦するカールへ送り、騎士団は各地で激戦を潜り抜けていた。

このような情勢に一石が投じられる事件が起きた。

カールから親友ロカと共に旅立った勇者アバンが、一時的とは言えハドラーと相打ちになる形での封印に成功したのだ。

この事態を受けた副司令ガルヴァスは戦線縮小を決定、ひとまずの目標をパプニカ一点に集中させ、集めることにより魔物の統率をはかったが、ハドラーの邪悪の意志を受けなくなった魔物は各地で離散、軍師プラスまでも行方不明となってしまうた。

封印の溶けた頃に魔王軍は往事の一割まで戦力を低下させてしまっていた。

魔王ハドラー復活に伴い魔物の再結集が確認され、各国の国王はベンガーナ主催による国王会談サミットを開催した。

その結果、人類連合は魔王の戦力が集結仕切る前に、魔王の居住である地底魔城の攻略を行う事で一致、全軍をパプニカに集結させ、総攻撃を行う事になった。

作戦は単純、暁の4騎士筆頭であったガラフを始め、勇者オルテガ等が地底魔城付近の草原で魔王軍を牽引し、勇者アバンとその仲間達が地底魔城に侵入し、ハドラーの首級を取る。

全軍の指揮はロモスのパパスが取ることになり、各国は戦力を集めた。

視点変更・アルキード王アーク

「主殿、ぼさつとするでない！はようこらぬか！」

僕は今城下町の市にきている、所謂お忍び…と言うやつである。

世間は今ハドラーとの最終決戦に向けて動き出しているのに、一応アルキード王である僕が平和にしても良いんだらうかとは思う。「主殿主殿、あれはなんじゃ？なんとも面妖な鳥であるな、くふふふふふ、愛いのう、愛いのう」

僕は世間で言う所の転生者だ。

とはいってもあんまり珍しい物でもない、確認しただけでもベン

ガーナ王は間違いないし、僕を転生させた人曰わく何人も転生者がいるらしい。

詳しい内容は知らない、その人が転生させたのは僕が最初らしいし、他の人が転生させた人は知らないそうだからだ。

ただど大まかにどこに転生者が居るかは判断出来る、本来有り得ない事が起きた場所に居るのだ。

わかりやすい所で言えばベンガーナ、あれ間違い無くFFだし、サミットの時に「ヘックション」って日本語でやってたらもろに反応してくれたし。

「おい店主、コレはなんじゃ？…綿菓子？甘い？食べればわかるかな？……店主、有るだけでもって来るがよい。主殿！財布をだしてくりゃれ！」

他にもツツコミどころのあるパパスやオルテガなんかはまるで反応しなかった。違うのか、それともポーカーフェイスが巧いかは解らない。

僕の転生特典は本当は無かった。上手くやれば竜の騎士が困い込めるから当然と言えば当然だ。

ところで原作のアルキード王が愚かだったかと聞かれれば、僕は否だと答える。

王女ソアラは優しい性格だったのは間違いない、だが軽率だった事も確かだ。

バランスを助けるのはかまわない、魔族ではないけど人外なバランスを内緒にするのも仕方がない、だけど妊娠して国外逃亡は有り得ない。

彼女の家が親が厳しいけど平民なら問題ない、ただ彼女は王族である。

王族に人権は無い。人々の上に立ち豪華な生活を行うかわりに戦いがあれば命を掛けて戦い民を守り、貴族や他国との利害を調整し、法を作り国を治める。

王族の姫に結婚に恋愛結婚はほぼ有り得ない。有力貴族に嫁ぎ国

内を固めたり、他国に嫁いで人脈を繋げたりするための大事な駒である。

色んな意味で大事な姫が人外に傷物にされて、傷物にした本人の処刑と生まれた子供は殺さず流刑、十分甘い判断だと思う。…最後の態度はいただけくないが。

balan も balan だと思う、嫁入り前の娘を妊娠させるとか…。

この事件は純粹な若い男女＋吊り橋効果＋両者の特殊な血統＝不幸と言う起こるべくして起きた事件だったと思う。

「ふむむむ…こつちがよいか…いやこちらでもよいな。主殿、どちらが似合うかの？」

まあだからこそ転生特典として僕が望んだのは簡単で《平穩》である。

代償は原作に関わり過ぎない事とあやふやで、しかも関わり過ぎればアルキードは海に沈むらしい。最低限の派兵はしたが、これからどうなるかはわからない。

話を戻す、平穩だからかはわからないけど我が国は色々と緩い。

ロモス並みに。

まず種族差に緩い、魔族は宮廷にも軍にも民間にも多いしハーフだつて当たり前にいる。

ぼくの母も魔族だつたらしく半分は魔族の血が流れているが、王位継承になにも問題が無かった。

次に恋愛に緩い、平民と貴族、はたまた王族で恋愛結婚が当たり前にある。

後は儲ける事にも緩い、その日の糧といざという時の蓄えはしても、過度な蓄財などもない。

最後のお陰で常備軍とか金のかかる軍隊は作れずに、騎士団と徴兵した農民が主力である。

だけど緩いお陰でソアラが balan を連れてきても問題は無いので、今の苦勞にはお釣りが帰って来るだろう。

「主殿！聞いておるのか!？」

「うん、聞いてるよ」

今話しているのは僕の奥さんのポリー、出逢ったのは海の上で流れているのを拾った時だ。

「主殿は何時もそうじゃ、大事な時に意識がとんでいきおる。デー卜中には妾のを見てくりやれ？」

「解っているよ、可愛い奥さん」

「違うのじゃ！家臣の居ないところでは《お姉ちゃん》と呼ぶようにゆつたであろう？ささ、早く呼んでくりやれ」

「解ったよ、お姉ちゃん」

「ダメじゃ！もっとこう舌つ足らずにゆうほうが好ましいのう」

「…わかったよう、お姉ちゃん」

「うむ、完璧じゃな」

代償その2である。

平穩の代償は大きかった。物心ついた時にメモが落ちてきて、《平穩の象徴として、死ぬまでシヨタになりました》と書いてあった時には目の前が真っ暗になった。

まあこの容姿のおかげで彼女が目覚めた時に（僕は一目見たとき）両者一目惚れで一週間で墓場にゴールする事が出来たから良しとしようかな。

「陛下！殿下！一大事ですぞおおおお！！！！！！！！！！」

突然爺やが馬で突っ込んできた。

「何事じゃ！騒々しい！妾と主殿の逢瀬を邪魔する気かや！？」

「それどころでは御座いませんぞ殿下！ソアラ殿下が男を連れて帰って来られました！」

「な、なんじゃと！まさかコレか？」

ポリーが小指を立てる。

「恐らくは」

爺やが頷く。

「ほれ、急ぐぞよ主殿！妾にしっかりと捕まっておれ！…しっかりとじゃぞー」

「うん、解ったよポリー」

僕の言葉に一瞬不満げにしていたが、さらにぎゅっと抱きしめるとポリーは相好を崩した。

「リリルラ！」

彼女の魔法と共に僕達はその場から消えるのだった。

《国王》の平穩（後書き）

アルキード王・アーク

LV1

身長・かなり低い

体重・軽量

現代から転生した。平穩の代わりに原作への大規模な関与と、自分の成長が無くなった。

奥さんのポリーとはお互い一目惚れ、押し倒したのは彼女である。人類側では最年長。

《大魔王》の策動

視点・三人称

パプニカにある地底魔城にいたる平原にて魔王軍と、人類の総力をあげた軍が激戦を繰り広げていた。

ガルヴァスは人類の目的である主力の牽引を読ではいたものの、その策にのつた。のらざるをえなかった。

確かに魔王軍を引きつける為に来ているであろう地上軍だが、そこには英雄豪傑が綺羅星のごとく存在しており、戦力が低下している今地底魔城に乱入されればひとたまりも無いからだ。

地底魔城におびき寄せて火山を爆発させる案もあったが、リレミトなどで容易に脱出が出来る上に、様々な重要な施設がある地底魔城を破壊してしまえば地上侵略は不可能になってしまったため、これも廃案となった。

逆にハドラーがアバンを迎え撃っている間に地上軍を撃破出来れば、アドバンテージは完全に魔王軍に傾く。

このため魔王軍は親衛隊以外の軍勢を決戦の地に向かわせ、魔王ハドラーと親衛隊長バルトスは勇者アバン一行の迎撃の為に地底魔城に残ったのだ。

決戦の地では両軍共に士気があがっていた。

魔王軍も地上軍も後がなく、これに勝てた方が地上の覇権を握るのは誰の目からも明らかだからだ。

決戦の火蓋を切ったのは獣王クロコダインであった。

高められた闘気を右腕から解き放つ《獣王痛恨撃》を、先手必勝とばかりに地上軍目掛けて放つが、リングイア騎士団地獄の壁が、芸術的な連携で大防御と仁王立ちで被害を防いだ。

賢王カダルが反撃に放った三種融合魔法、極大爆裂閃熱火炎呪文メソナコンを空中から魔法軍に放つが、コレは氷炎魔人フレイザードの五指爆フィンガーブ炎弾により迎撃され、空に巨大な爆発が花開くのであった。
レファボムス

それを開戦の号砲として両軍は動き出た。

二つ足の者が、四つ足の者が、空を飛ぶ者が、地中を行く者が、己の肉体を武器とする者が、強大な魔力を秘めた者が、魔導機械を操る者が、家族の為、仲間の為、大好きな人の為、守りたい者の為、主の為、自らの栄達の為。

ドラゴンの炎が兵士を焼き払い、そのドラゴンも炎を恐れず近づいた兵士達に突き殺され、勇者が巨大なゴーレムを破壊したが、最後の力を振り絞ったゴーレムに体勢を崩され、悪魔の騎士の斧に首を落とされる。

爆撃の為に高度を下げた飛空艇に空を飛ぶ魔物が襲いかかった。混沌と化す戦場の中、将同士でも戦闘が繰り広げられている。

持ち前の突破力を誇るクロコダインは、纏わりつく雑兵を草を刈るようになぎ倒して本陣に到達。

パパスはガラフに指揮を引き継ぎこれを迎撃、余人の介入を許さぬ決闘が始まった。

フレイザードとカダルは空中にて魔法をぶつけ合っていた。

フレイザードはパプニカ侵攻時に何度となくカダルに苦汁を舐めさせられており彼を逃す気はなく、カダルもまた殲滅力の高いフレイザードを此処で討つべく更に魔力を込めて呪文を繰り出した。

地底魔城ではバルトスが養子であるヒュンケルと別れてアバンを迎え撃ち、ハドラーはアップを始めていた。

そんな戦場のあちらこちらである存在が各所で観察していた。

ある個体は空気と光の密度を変えて存在を隠し、またある個体は存在自体を霞めてたゆたう。

大魔王バーン。

今は三角頭巾な闇の衣を身にまとい、ミストバーンとしてすごす彼女は今、混沌の戦場に隠れていた。

視点変更・大魔王バーン

なんだか久しぶりな気がするが余が大魔王バーンである。

今余は地上のアレっぷりの確認と、余の大魔王地上侵攻軍の幹部

のスカウトにやってきたのだ。

転生者はすでにそれなりの数が居るらしく、地上は予想以上に戦力が多いみたいだ。

しかしFC版のオルテガがいたりパパスがいたり、ベンガーナがFFだったりと無節操である、だが大魔王軍に至ってはスクエニに關係ないのも多いから他人のことは言えぬな。

パパスの息子はリユカになるのか？それともムスコス？カダルは合体魔法を使っているが、マダンは習得しているのか？様々な疑問が浮かぶが今は戦力確保が最優先だな。

分身を色んな所に配置して万が一の戦死だけは防ぐつもりだが、まあ流れで決めよう。

優先度はハドラー＞ガルヴァス＞フレイザード＞クロコダイン＞バルトスか。

まあ二人は余…というかスイカのファンで、余があまりに酷い事をしない限りは裏切らないだろうし、実力もある。

フレイザードは実力もあるし、汚い仕事も任せられる。この手の奴は組織に必ず必要であろう。

クロコダインは硬骨な武人で余も好きだが、パパスともフラグがたっておりかなりの確率で寝返りが起きると考えられる。

まあ勇者パーティーの戦力増強と考えれば、余の楽しみ的には何も問題無いから良いか。

バルトスは拾っておけば何かに使えるだろう。

フレイザードとバルトス以外なら死んでもなんとかなるし、体の大半が確保出来るバルトスはいざとなればハドラーとのラインを余かミストに繋がれば延命も可能はずだ。

ハドラーには強化の為に必ず一度死んで貰わねばならんのが心苦しいが、仕方ないと諦めよう。

しかしなんと血がたぎる。目の前に極上の戦いの宴が繰り広げられているのに余は参加出来ないとはな。

鬼としての本能が闘争を促すが、それは華麗にトンファースル！。

おっと、各地で決着がつき始めた。

まずクロコダインVSパパスだが、獲物の差、地力のさでパパスの勝利。

パパスの可笑しい所はまず体のスペックで、LV27でHP420とか他のステータスも軒並みLV27とは思えなかった。

更にベホイミまでだが回復呪文も覚えており、まさにパーフェクトソルジャーと言える。

戦いを観戦していても無駄の少ない動きで相手を翻弄し、時には相手の反撃前に追撃を流れるように放っている。

感の良さも尋常ではなく、クロコダインでなければ致命傷となる一撃を何度もつさに放っている。

更に得物が出来の良い鋼鉄の剣であるパパスの剣ではなく、オリハルコン製の武器である覇者の剣となつてまさに鬼に金棒である。

若いクロコダインでは少々荷が勝ちすぎている。

アバンのようなどんな状況でも打開する万能さは無いが、間違い無く純人類最強を目指せる底力があると思う。

パパスがクロコダインに致命傷となる一撃を放ち勝負が付きかけた時、今まで観戦していた獣系魔物が乱入しクロコダインをかばった。

その隙にガルダがクロコダインをかつさらい戦線を離脱、これでハドラー軍の前線が崩壊を始めた。

クロコダインはしぶといからハドラーとアバンとの決着後に勧誘しよう。ひとまず分身一体を付けておく。

次に決着が付いたのはバルトス対アバン、こちらは原作通りなのでまあいい。

その次はフレイザード。こいつが一番助けにくい。

ハドラーが死ねば死ぬ可能性があるし、カダルだけでなくカンダダ…じゃなくてオルテガまで来ており、かなり押しこまれている。

メガンテからの弾岩爆花散で勝機を掴もうとするが、抵抗力が下がったためにカダルのニフラムで片っ端から消されていつているの

で、タイミングを見計らい核を魔法の筒で回収し、余をバイパスにミストにラインを接続し延命させる。復活には時間がかかりそうだ。反応が無くなり、あたりに気配が無くなったためフレイザードを倒したと判断したカダル達は、周りの連中を片付け始めた。これもこれで終わりだろう。

そして予想外の出来事が起きた。

ガルヴアスが自爆してしまい、完全に回収出来なくなってしまったのだ。

ガラフじゃない暁の戦士二人とカール王国の勇者マッシュユとガイアに討たれかけた時に、体内の全闘気と魔力と生命力を暴走させて纏めて吹き飛んだのだ。

上記の4人も死亡したが、そんな事より彼には生き延びて欲しかった。

これで魔王軍の指揮系統は全滅、総崩れを起こしてしまい全面壊走してしまった。

地上軍も追撃や負傷者回収、地底魔城のアバンへの援軍の用意をしているが、ハドラーとアバンはまさに決着の時を迎えている。

アバンの放ったアバンストラッシュAを食らい、体勢が崩れた時に追撃でグランドクロスを食らい、トドメのストラッシュBで討ち取られた。

ふらついた足取りでアバンが出て行った後、ザオリクで蘇生させあたかも魔界のミストが復活させたように見せる。

八つ当たりでバルトスが破壊され、魂の貝殻に録音したところでヒュンケル登場 勘違い、去って行った後ザオリクで魂を再度定着させてから、バイパスを通してミストに繋げて完全復活。

有無を言わずに回収して、偵察や勧誘用の者を残して分身を回収し魔界に帰る。

しかしアレである、戦いに当てられてすっかりのぼせた気がする。モヤモヤを発散するために帰ったらアルトリアやミスト等に稽古つけるとするか。

視点変更・三人称

こうして魔王ハドラーと地上との戦いは決着がついた。

世界は安堵に包まれたが、一部の者はコレがまだ序章であると知っていた。

そう、真の戦いは大魔王バーンが姿を表してからである。

そしてそれは、決して遠い未来では無いのだった。

《魔剣士》育成中、《狂戦士》の胸中

視点・三人称

暗き常闇に包まれた世界《魔界》、その一角では闇を吹き飛ばしそうな喧騒と活気に満ちていた。

魔王ハドラーが敗北した後、大魔王バーンは正式に地上侵攻を宣言、バレンヌ帝国は地上侵攻の為の軍備拡張で好景気が続いていた。今回の地上侵攻作戦では本来必要であったヴェルザーへの対抗戦力を必要としなかった。

冥竜王ヴェルザーは竜の騎士であるバランとの激闘の末、不死身の魂を天界の精霊に封印されているうえ、バランを討たんとして使われた黒の核は本土であるアトランティスを沈めてしまっていた。

大陸一つが沈んだ影響はとても大きく、未曾有の大津波が大西洋沿岸部を襲った。

ヴェルザー領は沿岸部に壊滅的打撃を受けていたが、バレンヌ帝国では大魔王バーン（本物）が津波を散らしたり、精霊ルビスが津波を鎮めたりして被害を抑えた。

本土であり政経の中心であったアトランティスを失ったうえ、インフラが整っていたヨーロッパ半島にも大打撃を受けたヴェルザー領だったが彼等の悲劇はまだ終わらなかった。

冥竜王ヴェルザーが封印され力を失った結果、彼の力を恐れ、虐げられてきた民族が各地で反乱を起こしたため、混乱は拡大する一方だった。

これを千載一遇の好機とみたバレンヌ帝国は、地上侵攻の準備をする一方で救援という形で各地に軍を入れ、影響力を高め実効支配していった。

間近に迫る地上侵攻に備えて軍団指令候補達は、さらなる教養や力を求めて訓練や勉強に力を注いでいた。

現在の彼等の動きと役職を簡潔に書き記す。

魔軍総指令（当確）ハドラー・新たに大魔王バーンから協力な体をもらい（具体的には合成）、体の習熟と軍全体のマネジメントの勉強中。スイカの正体は知らない。

近衛軍団長（当確）アルトリア・竜魔人形態での理性の確保。

百獣魔団長（当確）クロコダイン・強敵（と書いて親友と読む）パス打倒の為に魔界放浪中、大魔王バーンからエビルメタル製の大斧である獣王の戦斧を拝領した。使うとバギマの効果がある。

氷炎魔団長（当確）フレイザード・伝説の魔法メドローアの習熟に余念がない、もしこれも破られた時の為にタル研に秘策を注文した。

超竜軍団長（当確）竜王・最強目指して特訓中、竜化すると意識が無くなるのはまだ克服できてない為、暴走してはヒルドやアルトリア伸されてる。

魔影軍団長（当確）ミストバーン（真・大魔王バーン）・原作のあの格好でうるついている。なお、タル研製の高性能な人形であり、頭部の操縦席に小さくなって入り、そこから操作している。スイカとして分身の一人が必ず活動している。

妖魔軍団長（選考中）ハーゴン・軍団長候補最有力、何時も心に信仰を忘れない（狂）信者。様々な術以外にもアマミバ流拳法も習得している。最近、賢者の技法召還を覚えた。

以上である、そこに新たな軍団として不死騎団が魔影軍団から分離して編成された。

その団長候補は異例とも呼べる人事であった。

まだあどけないと言える少年ヒュンケル、人として生まれ魔物に育てられ、勇者に鍛えられ、そして勇者を憎む。光と闇の申し子で

あつた。

そんな彼は今、バレン又帝国宮殿に作られた幹部専用特訓施設の一つ、通称耐久地獄にて死ぬ方がマシな訓練を受けていた。

視点変更・???

「はあああああ!!」

ヒュンケルの突き出す剣を斧の柄で捌き吼える。

「どおしたあ糞餓鬼い!?!? そんな温い突きじゃあスライム一匹殺せやしねえぞおおおお!!!!!!!!」

突きを捌かれ体勢を崩したヒュンケルの腹に左の拳で殴りつけ、下がった頭を蹴り飛ばす。

蹴り飛ばされてもなお鋭い視線で睨みつけるその顔をつかみ、そのまま地面に叩きつける。

「がはあつつつ!!」

呻き声をあげ、動かなくなってしまったヒュンケルに、流石にやりすぎたか?と思う。

訓練所に植樹された世界樹の葉から滴る雫を掬い、ヒュンケルに振りかける。

「うう、ここは...?」

「なあにを寝ぼけてやがるう? まあだまだ終わりではない!!」

立ち上がるヒュンケルは再び剣を構える。

「貴様の敵とやらはこの程度で死ぬのか? ならばそんな雑魚に殺された貴様の父親は」

唇の端だけ上げて嘲笑う、なるべく酷薄に見えるように。

「とんでもないクズだったんだなあ?」

「ッ父さんを馬鹿にするなあああ!!」

逆上し、突きかけるヒュンケルをいなし再び地面に叩きふせる。

そしてまた世界樹の雫を振りかける。

その作業的な行為を何度も何度も繰り返す。この一つ一つがこの子の糧となり、今後の戦乱で命を喪わないために。

ミストバーン...いや、大魔王バーン様、死んだはずの私の命を繋

ぎとめ、形は違えど再びヒュンケルと生きる道を与えてくださった方だ。

あの方がヒュンケルを呼びに来るまで私はヒュンケルを叩きのめしていた。

私の名はバルトス：いや、それは昔の名前だ。

今の私の名はバルバトス、命を救っていただいたバーン様とヒュンケルの為に私は狂戦士となった。

ヒュンケルが座学に連れて行かれ、私も部屋に帰る。

ふと思う：私はあの時地底魔城で死んだ：ハズだった。

アバン殿との戦いに敗れ、ヒュンケルのおかげで命を繋いだ、主君であるハドラー様がお亡くなりになれば喪われてしまう命だった。

だが私の心は静かだった、私は主君を守れぬダメな騎士だった。

けれどヒュンケルの思いが私を助けたという事実が私の心を穏やかにしてくれたのだ。

その後は死んだはずが生きていたりしたが、ハドラー様のお怒りに触れてしまい、改めて殺された。

しかしハドラー様を恨む気持ちは全くなかった。

どんな言い訳をしても、私がハドラー様をお守り出来なかったのは事実なのだ、処刑されても文句は言えなかった。

だが私にはただ一つ心残りがあった。息子であるヒュンケルの事だ。

あの子は私を親と慕ってくれていた。私が死ねばあの子はアバン殿を、人間を恨んでしまうだろう。それは不幸だ。

あの子はちよつと不器用だけどとても優しい思いやりのある子だ、復讐の闇に染まるより希望の光に生きて欲しかった。

その思いが魂の貝殻にあの時の真実を残した、いつかヒュンケルが真実をしり、明るい光の世界に戻ってくれる事を信じていた。

その後予想だにしなかった事が起きた。

何を思ったかは解らないが、全魔界にその名を馳せる大魔王バー

ン様が死にゆく私を救い上げ、新たな体と名前をいただいた。

その後ヒュンケルをバーン様が連れてきた時、私の予想が当たっていることを知った。

あの子はやはり闇に堕ちていた。だが私がバルトスと言うことは伝えられなかった。バーン様に正体をととてもとても堅く口を噤むように命じられたからだ。

その変わりなのか、ヒュンケルの教育は私とバーン様ご自身がする事になった。

バーン様が座学、私は実戦を担当し、ヒュンケルを鍛えていった。私は一度主君を失った騎士だ、それを拾い上げて頂いたバーン様には大恩がある。

軍団長候補であるヒュンケルを人間社会に戻そうとする私は、バーン様の大恩を仇で返す忘恩の輩なのだろう。

だが、それでも私はヒュンケルに光に生きて欲しかった。

…私が鍛えたヒュンケルに立ちふさがるのは私かもしれない、だがその時は…いや今はよそう。今は今を全力でやり遂げるしかない。魔界の空は私の心のように暗くのし掛かっていた。

《魔剣士》育成中、《狂戦士》の胸中（後書き）

狂戦士バル《バ》トス

LV42

身長・デカイ

体重・ガチムチ

生前（？）の名前はバルトス。合成機に入れた際にバーンの思いつきで紙にバと書いて入れたら出てきた。
ヒュンケルへの家族愛とバーン様への忠誠心に挟まれている。

《竜王女》の決意

来るべき未来に備えて魔界で軍備が整えられていく中、地上でも対魔界を踏まえた対策が進められていた。

オーザムこそ壊滅してしまった物の、各国の被害はまだ許容範囲内だった。

オーザムにしても王都が壊滅し、軍もバラバラになっていたがまだ生きている国民は大勢いた。

しかし担ぐ旗が無くなり、治安は荒廃し難民は溢れていた。

難民対策に頭を悩ませるギルドメイン大陸各国は協議の結果、近さも何れも婚姻して血のつながりのあるリングエアの保護国化する事で合意した。

リングエアは新領土を獲得し、ベンガーナは強力な復興支援で市場を獲得、カールやアルキードは難民に悩まされなくなる結果と言えた。

この件で関係を急速に接近させたベンガーナとリングエア、ベンガーナはリングエアと新兵器である魔導アーマーの共同開発を進め、共に軍備を整理していった。

更にクルテマツカ？世は手をうち続けた。

今回の戦乱を踏まえて各国に対して対魔界盟約を提案、各国も今回の被害を受けてこれを了承、いざという時は国力の高いベンガーナを中心とした連合軍が迅速に結成される事となった。

ベンガーナを中心に地上は新たな体制に移っていった。さて、順風満帆かと思える地上界だったが一つ大きな事件が起きた。

アルキード王女夫妻が授かった双子の姉弟のうち、弟であるディノが海に流され行方不明になってしまったのだ。

痛ましい事件であった。

第三次婿姑戦争における姉弟及びソアラの占有時間を巡る戦いの

中、ぶつかり合う鬪気の余波でソアラと姉弟を乗せた船が転覆してしまい、その混乱の中行方不明となった。

不幸中の幸いにも王女ソアラと姉のレイアは無事であった。

やいのやいのと見苦しく責任を擦り付けあう加害者二人に、珍しくも王の怒声が落ちていた。

その後は捜索隊を各地に派遣したものの、有効な手がかりは見つからず捜索は暗礁に乗り上げていた。

ただ国王は落ち着いており、何か知っているのかと妻や娘夫妻に問い詰められていた。

視点変更・竜女王アルトリア

私は今、帝都付近に作られた大火力特化演習場…簡単に言えば砂浜に來ている。

使えば広範囲に被害が出る技や呪文はここから海に放ち、周囲への被害を抑える為にある。

母上はストレス解消なんかにちよくちよく立ち寄るし、私も考え事をしたときはつい立ち寄ってしまう。

エクスカリバーを八相に構え、精神を研ぎ澄ませていく。

…ふと思い出すのは先日の上との立ち会い、私とミスとミス
トバーン人形の慣らしをしたい母上との立ち会いだった。

まず言いたいのがアレのどこのあたりがミスと何だろうか？どこも
ミスらしいパーツはないと思う。

戦い方も卑怯だ、指は伸びるし、剣にもなる。エクスカリバーで
もなかなか斬れなかったし、ミストのカラミティエンドまではじい
たし。

オマケに腹部は謎のブラックホールになって吸い込まれかけたし、
目のライトはフラッシュバンみたいな効果まであった。

…母上はいつも適当に強すぎる、あの小さい背中に追いつくため
にトレーニングは欠かさない、だが追いつくどころか益々離されて
いく一方だ。

焦りが無い、と言えば嘘になる。

ハドラーと地上界との戦いはレポートや映像で確認したが、地上は侮ることは出来そうにない。

万が一にも母上が、私の力不足で傷ついたり討たれたりしてしまえば、私は私を許せないだろう。

個人で手ごわく感じたのは三人、勇者オルテガ、王座についた口モス王パパス、そしてハドラーを討った勇者アバン。

前者二人は人間としては規格外な実力者、後者はあらゆる意味で万能の天才だからか。

ありとあらゆる武器を使いこなし、賢者並みの魔法の使い手であるアバン。

ハドラーは性格が小者だが実力は確かだった。だが敗れた。ハドラーやアバン達を倒す事は私でも当たり前前に出来る。

だが、アリスとの冒険で学んだ人間の底力、執念の強さは凄まじかった。

勇者アリスは人々の希望を背負い、その想いで闇を切り払い、世界に光を切り開いた。

…私に出来るのか？あの時も私はアリスより強かった筈だ、だが私は倒れアリスはゾーマを討ち果たした。

いや、出来る出来ないの話じゃない、やるしかないのだ。

魔界は酷い世界だ。アリスとの旅路で太陽のありがたみを知っているから尚更そう思う。

この世界に太陽を照らす為の研究は暗礁に乗り上げている。

ルビス曰わく太陽自体は有るのを感じる、だがゾーマみたいな何かに遮られているようだ。

魔界には障気が満ち過ぎて、ソレがどこに居るかは解らないらしい。

だから地上で太陽の光を集める集光塔を各地に建てて、それで魔界各地を照らせば判明するそうだ。

この集光塔が建てばその地域は光が喪われてしまいうらしい、だか

ら地上界では彼らの激しい抵抗があるだろう。

地上の無辜の民にまで被害は出る、だが魔界の民の為、ひいては母上のため、私は修羅に入ろう。

…心は決まった、体内にある魔力炉の魔力と、額の竜の紋章の闘気をエクスカリバーに込め、解き放つ。

「約束された」《エクス》

魔界の空を切り開くように。

「勝利の剣！」《カリバー！》

黄金の光は空に届いた、と思う。

錯覚かもしれないが、いつか見た青空が、そこにあったように感じた。

《竜王女》の決意（後書き）

竜王女アルトリア

LV75 / 255（竜魔人時）

身長・低い

体重・軽い

みんな大好きセイバーさん。何気にマザコン。

最近出来た新弟子のヒュンケル相手に、道場で竜竹刀片手に稽古をつけている。

あほ毛を引っ張ると黒くなり、バーンの真似をすると赤くなる。
カリバーンとアヴァロンは奥の手。

原作前夜

ハドラーとの戦争から十数年、地上界は表面上は平和ながらも軍拡が進められていた。

ロモスは王城を改築、拡大し、城下町は城壁内に入った。

パプニカでは賢者達が各町に簡易ながらも結界をはり、奇襲や攻撃に備えていた。

カールは勇者達のうちアバンが出奔し、王女フローラは心を痛めていた。

またオルテガの息子で次代の勇者として期待されていたアベルがいたが、彼はオルテガの後を継がず此方も出奔してしまった上に、改名までして追跡を振り切ってしまった。

だがカールの勇者騎士団は未だ健在であり、けっして侮ることの出来ない精強な騎士団であった。

リングアイアでは、ベンガーナとの共同開発で完成した魔導アーマーのうち、リングアイアの正式採用としたタイプ「フロスト」を初めとした魔導アーマーの量産化が進み、最終防衛戦である地獄の壁や常に先鋒をつとめてきたストライクワイバーズに配備が急速に進んでいた。

そしてベンガーナは国力に物を言わせて様々な兵器の増産、各国へのバーター取引や輸出で利益を上げていた。

魔導アーマーや飛空艇、大砲などの強力な兵器は毎日作り上げられ、そして売られていった。

自軍で使う飛空艇や魔導アーマーでは、輸出用にオミットされている魔導レーザーや魔導ミサイルなどを装備されており、名実ともに世界最強を豪語するに相応しい威容を誇っていた。

その大国ベンガーナの地下では、霸王と老臣が、あるものの開発具合の進捗を確認していた。

「いけませんな陛下、可愛い新妻をほっというこの様に所に来ら

れるなど」

ガラフがニヤニヤしている。

今彼らはベンガーナ王城地下に設けられた秘密ドックにいた。

「私はロリコンではないんだがなあ」

彼は先週婚約者であるガラフの孫クルルと結婚、婚約当時クルルはまだ12歳であった。

おかげで各国の王女に興味が無かったのは育ち過ぎだったから、などとロリコン扱いであった。

仕組んだのはガラフであり、彼は特に普通の性癖の持ち主であった。…断りきれなかったが。

さて、彼らが此処に来たのはバーンに対する最終兵器の進捗を確認するためだが、なぜいきなりそんな事をしたのか。

ズバリそろそろ原作に入るのだ。

かつての知り合いであるポップの父親ジャンクから、息子がアバルンについて行っちゃまったと連絡があったのが一年と少し前、そろそろロモスの偽勇者事件やレオナ暗殺未遂事件が起きても不思議ではない。

更に言えばロモスにてハドラー戦争中生まれた王子の15歳の誕生日に大きな誕生会をするらしい。

彼はこのタイミングで偽勇者事件が発生すると踏んだのだ。

バーンとの戦いはハドラー以上に苛烈で期間は3ヶ月余り、初期動員が遅れれば致命的になる恐れがある。

この最終兵器として完成しなければただのガラクタであり、間に合わないなら突貫でやらせるしかないからだ。

「完成予定はあと二月後、どうやらバーンパレスに間に合いそうですな」

「ああ、バーンパレスに一方的にやられない、いや、これでバーンパレスを沈めれるかもしれない」

「ピリア・オブ・バーン、落とされる訳にはいきませんか」

「だからこそ、この飛空艇、ラグナロクを作っているんだ」

「はどうほづ、うまく行きますかな？」

「いくさ、必ずな」

彼は見上げる、その赤き船体を。

(しかし、コレが完成しても陸戦で押しきられてしまえば意味がない)

彼はハドラーの強さを思い出す。彼は間違い無く強かった。

ガルヴァスも強かった、問題は魔界の魔族の平均的な強さだ。

(アルキードの魔族部隊、彼らは確かに人間以上の力を持つが、アレほどの力の持ち主はいなかった)

(∴原作で出て来た魔界の魔族と言えばやはりロン・ベルク、彼は司令官時代のハドラーより確実に強そうだ)

(ロン・ベルクが魔界有数の剣士なのは間違いない、だが∴)
そこまで考えて、彼は頭をふる。

(いけないな、あまりにも情報が無い)

(魔導アーマーは地上の魔物には十分に戦えるが、魔界の魔物が主力になれば簡単にひっくり返されるかもしれない)

「∴いつそ、会いに行ってみるか」

ふと呟くが、案外良いかもしないと彼は思った。

「ガラフ、暫く留守にする、スケジュールの調整をしてくれ」

ガラフは礼を取ることで、彼に応えるのだった。

視点変更・???

「アベル∴、本当にやるの？」

僧侶の格好をした彼女は不安そうにしている。

だが、俺達がこれをしなければ、ダイ達はバーンに太刀打ち出来なくなるかも知れない。

「ベンガーナ王だけじゃない、様々な所に転生した奴らがいる。だが、コレは俺達にしか出来ない」

俺の言葉に僧侶の彼女はうなだれる、彼女は優しいが臆病な所がある、それに誰だって犯罪なんてしたくはない。

「けどよう、いくら魔物って言っても、無抵抗な奴らを傷つけるのは気が引けちゃうよ…」

大柄な彼も不安そうだ、いや罪悪感が大きいのか。

「仕方無いわい、コレでダイに覇者の冠がわたらなければダイの剣が作れんからな」

魔法使いの声にまたみんなで肩を落としてしまう。

「…もう船は手配したし、パパス王には献上品の話もしてしまった。みんな、覚悟を決めよう、俺達の犠牲で世界が守られると思えば安いもんだ」

みんな迷いながらも頷いてくれた、捕まっってしまったえば父に迷惑がかかるかも知れない、だけど、やるしかないのだ。

「後、俺の名前はでろりんだ。間違えないでくれずるぼん」
「…早く、名前戻せると良いよね」

また全員でため息をつく。

俺達は全員が転生者だ。

転生した時のボーナス選択もなく、転生後は何時の間にかメモ帳に特典と目標が書いてあった。

俺はオルテガの後を正式に継げば、？勇者と同じ成長が出来る。だが俺は逃げてしまった、…あの覆面とパンツから。

あれを継ぐのはマジ勘弁して欲しい、ソレで逃げたら通りすがりのマナン神官に名前を変えられてしまった。

他の連中も似たようなもので、条件をクリアすればちゃんと強くなれるのに逃げ出し、集まった時は「ああ、修正力って奴か」とみんな納得してしまった。

まあ余り戦闘にからまないし、出来る範囲で人助けをしようとは思う、でも覆面は勘弁してほしい。

あと、みんな達成目標が雑すぎる。

紙に「生キ口」としか書いてなかった、…だからもし、仲間を守れなければ、覆面も辞さない覚悟はある。…マジ勘弁してほしいからそんな事が無いように祈りは欠かせない。

「よしみんな、船に乗り込もう、行き先はデルムリン島、目標はゴ
ールデンメタルスライム…ゴメちゃんだ」

決意を固めた俺達は船に乗り込んだ、目指すは怪物島デルムリン
島、ここからダイの大冒険が始まると思うと、今日は眠れそうに無
かった。

原作前夜（後書き）

偽勇者でろりん

LV20

身長・普通

体重・普通

本名はアベル、オルテガの息子として相応しい実力の持ち主だったが、覆面パンツを拒否った為に偽勇者になり、実力も下がった。ずるぼんは幼なじみ。

オマケ2

バレン又帝国軍編成

現在のバレン又帝国軍は3つの軍集団に分かれており、本国軍、ヴェルザー領派遣軍、そして地上攻略軍である。

三軍総司令は現在は天狗の天魔、シビリアンコントロールと言うことで、バレンが大統領から指示を受ける。

ハドラーは地上攻略軍の総司令、近衛軍は本当なら本国軍だが、遠征のために切り離してバレン直属として配置されてハドラーに指揮権は無い。

バレン親衛隊はある意味名誉職で、強さが突出し過ぎて軍で動かせない連中が配備されている。

現在はヒルドとバルバトスが所属している。こちらもバレン直属

地上攻略軍はハドラー親衛軍、百獣魔団、不死騎団、氷炎魔団、妖術士団、魔影軍団、超竜軍団に分かれている。

原作との差は

- ・総兵力の増加（単純に考えても軍団二つ分）
- ・クロコダインの斧がパワーアップ
- ・ザボエラとバランがおらず、ハーゴンと竜王がいる。
- ・フレイザードがメドロローア使用可

- ・フレイザードのメダルがスイカちゃん特別ライブ記念メダル
 - ・魔影軍団にデッドアーマーが普通に存在している。
 - ・マキシマムが魔影軍団所属
- と言った所

ハドラー親衛軍はアークデーモンなどが所属、近衛軍はバーンの
生み出した様々な種族が入り乱れており、各軍団最強は間違いない。

偽勇者事件

視点・三人称

怪物島デルムリン島、魔王ハドラーの死んだ今、世界最大の魔物の群れが暮らす島。

世界で最も危険な島と恐れられているデルムリン島だが、その魔物達はみな賢く純朴で、人間との戦いを憂いていた。

彼らは皆元ハドラー軍所属であり、魔王ハドラーが一時封印されていた時に闇の意思から逃れ、戦場から離れた者ばかりだった。

彼らは元軍師ブラスをリーダーに争いを逃れて海を渡り、今まで平和に暮らしていた。

そんな島にある日赤ん坊が流れ着いた。

哀れと思ったブラスと仲間達は協力してその子を育てる事にした。その子の名はダイ、後に最強の勇者として歴史に名を馳せる事になる子供だった。

ブラスは先の戦いを悔いていた、魔王ハドラーの邪悪な意志に逆らえず多くの人を殺めた事を、そしてハドラーを討って止めてくれた勇者に感謝していた。

魔界の存在を知っていた彼は、もしも新たな魔王が世界に現れた時に、勇者を助ける事が出来るようダイを魔法使いに育てる事にした。

ダイは優しく、時には厳しくブラス達に育てられ、優しく勇敢な子供に育っていった。

だがただ一つ誤算があった。

魔法の才能の無さと、勇者の物語を聞かせすぎた為に勇者を目指すようになってしまった事だ。

そんな彼はある日島に来る船を見つけた。「勇者が乗っているかも知れない」そう思った彼はマーマンの背に飛び乗り、船に向かうのだった。

視点変更・偽勇者でろりん

やばい、何がやばいってあんたもっ…みんなの様子だ。

ダイに無事あえた後ゴメちゃんも見つけ、いよいよゴメちゃん誘拐をしなければならぬんだけど、みんな緊張し過ぎてガチガチだ。ずるぽんは開幕のバギを出せなかったから、俺が地面にイオを放って代わりにしたし、動いたへろへろは緊張しすぎて軽くヒヤッハ―になつてる、まぞっほはロボットダンスみたいになっている。

目の前の魔物を攻撃しながら涙ぐんでるぽんを慰めながら、へろへろに瀕死にされた魔物にベホイミをかけて死なないようにしたり、攻撃されかけているまぞっほのフォローをしたりとクソ忙しい。

父さんに受けた勇者凶…教育が無ければ無理だったに違いない。

カールの勇者は究極の生存力が求められた。

あらゆる条件から生き残るために攻撃、補助、回復呪文は覚えるし、武芸百般は当たり前だった。

仲間達を含めてみんなで生き残り、次の戦いに備える。

負けてもその経験をバネに更に伸び上がり、最後には勝利を掴むのが目標だった。

これまでの山賊や不正貴族や不正役人、暴れまわる魔物を捕らえたり退治したりするのはここまで緊張したことは無いし、鉄火場は幾つものくぐり抜けてきた。

みんな原作や罪悪感でテンパリすぎているが、こんな事は初めてだから仕方がない。

俺もダイがなんか言ってるのを聞き逃し、適当にウルサイ！とかなんか悪役っぽく振る舞ってヘイトを稼いでいたが、危うくゴメちゃんを逃がしてしまう所だった。

「みんな！目標は捕まえたんだ、引き上げよう」

「さて！ゴメちゃんを返せ！！」

「近づくな！巻き込まれるぞ！」

小舟に乗って沖の船に帰る途中、ダイが追い掛けて来たから警告をしながらイオラを放つ。

巧いこと足止めが出来た所で船に到着、帆を上げて一気に逃げ切る。

あまりグズグズしていると竜の紋章が顕れかねない、そんな事になったら嫌われてまでやった誘拐の意味がなくなっちまう。

「ピー〜」

「…浚った私達が言うことじゃないけど、すぐにあなたの友達が迎えにくるからね」

寂しそうなゴメちゃんにずるぽんが話しかけている。

船内の空気はあきらかにホツとしている、だけど危ないのはこれからだ。

パパス王は優しいがそれだけの人ではない、不興を買って即死刑！…てな事にはならないだろうけども、長い禁錮とかはあり得る。

そうすれば勇者の相棒ポップがへたれてダイの敗北になりかねない。

今回のデルムリン島襲撃は、渋る仲間達を俺が扇動して引き起こした、その辺を強調すれば俺の首一つで押さえられないかなあ。

まあやることはやったのだ、後は運を天に任せるだけだ、ルビコン川は渡られたのだ。

視点変更・ロモス王子リユカ

今日は僕の15祭の誕生日、国内だけじゃなく酷がからも来賓を招いて盛大なパーティーを開いている。

ただの誕生日ではなく、成人式やそれにあわせた立太子も兼ねているからだ。

僕の為にこんなに盛大なパーティーをされるのはくすぐったいけど、面子も気にしなければならぬのは王族の辛いところだそうだ。「新しい友達、気になるね？ブックル」

無法地帯になりかけていたオーザムで悪者を捕まえたり、危険な

魔物を討伐していた勇者でろりんが、幻のゴールドデンメタルスライムを捕まえて来たので僕に誕生祝いにするらしい。

でも無理やり連れてきたのなら仲間達とも離れて心細いだろうなあ、理由もなく受け取らない事は出来ないけど、逃げてしまったとかは可能だ。

それとなく場所を聞いてみよう。

「王子殿下、お誕生日誠に祝着至極、こちらは世にも珍しきゴールドデンメタルスライムでございます、祝いの品としてお納めください」
でろりんの差し出す小さな檻には、金色で羽の生えたスライムがこちらを睨んでいる、微笑んでみるがプイッと顔を背けられてしまった。どうやら嫌われたようだ。

そんな僕達を横目に父は一つの冠を取り出した。

《覇者の冠》は本来父の覇者の剣と対をなす防具だが、防具としては面積の少なさから今一で戦場で使うことは無かつたらしい。

そこで勇者として各地で活躍し、今回ゴールドデンメタルスライムを捕獲した功績で下賜する事になったらしい。

「勇者でろりんよ、此度の件やこれまでの数々の功績を称え、褒美を取らせ…」

「みんな！ゴメちゃんを助けるんだ！」

その時だった、なんの前触れもなく突然魔物達が現れ、暴れ始めた。

だけど様子がおかしい、魔物達は破壊衝動に捕らわれている訳ではなさそうだ。

父も違和感があるのか、鞘を付けたままの剣で気絶させるに留めている。

「ブックル、殺さずに頼む」

頷いたブックルの雄叫びに魔物の群れの一部が崩れ、ブックルはそこに飛び込んでいった。

もしかしてと思えば見ると、やはりゴールドデンメタルスライムが暴れて逃げ出そうとしている。

ならば彼等は仲間を助けに来ただけなんだろう。

「父さん！兵を下げて！」

父は怪訝そうにこちらを見るが、手に持った檻を見て納得したらしく兵を下げてくれた。

でろりん一行はでろりん以外は苦戦していたらしく、まぞっほ、へろへろ、ずるぼんは倒れているが、でろりんはかかってくる魔物を斬り伏せ…いや当て身か…今は少年と切り結んでいる。

さっきの叫びを聞いた限り、このゴールデンメタルスライムはゴメちゃんというなまえで、あの少年の友達だったらしい。

ならばこれは僕の責任だ、僕が魔物使いの才能があるせいでゴメちゃんは連れ去られたんだ、ならば僕が止めるべきだ。

注意して戦況を伺う、下手に止めれば少年が傷付きかねない、うまく離れてくれないものか。

「ハアツ！」

鋭い呼気と共に少年が弾き飛ばされ、両者の距離が開いた。

戦いを止めようと踏み込もうとしたとき、再び戦況が大きく動いた。

少年が懐から取り出した黒い筒から、見たこともない魔物の群れが現れたのだ。

だがでろりんは崩れなかった、十分強敵と思える魔物の群れに一步も引かずに切り結んでいる。

つと、見てる場合じゃない、早く止めないと。

「双方それまで！剣を引け！」

一瞬出来たでろりんと魔物の隙間にバギマを打ち込み間を開ける。

「この戦闘！僕が預かる！」

魔物達は一瞬こちらも攻撃しようとするが、少年が指笛を吹くと皆静かになった。

「この子を助けに来たんだね？」

檻を解き放つとゴメちゃんは一目散に少年の下に逃げていく、やはり大事な友達だったんだろう。

「その奴らがゴメちゃんを浚っていったんだ！」

指を指されたでろりんは肩をすくめ、剣をしまっている。反省はしてる見ただけだ……。

「友達を取ってしまったってごめんね、今回の事件は僕の責任だ」

吹っ飛ばされた時に出来た傷にベホイミをかける、幸い擦り傷ばかりだからすぐに治った。

でもこれだけじゃ申し訳ないし……そうだ！

「友達の為にここまで来た勇気を称えてこれをあげよう」

まごついている少年に覇者の冠を被せる。おっと大事な事があった。

「君の名前は？」

「ダイっていいいます」

「良い名前だね。よし、ダイ、君の勇気を称えて勇者見習いの称号を与えよう……よくがんばったね」

みるみる少年……ダイ君の表情が明るくなっていった、父はちよつと渋い顔をしているが大丈夫だろう。

「さあ皆さん！喜ばしい事に今日祝うべき事が増えました！皆さん！友達の為に戦った小さな勇者に盛大な拍手を！」

僕が拍手し、父が拍手をし始めると少しずつ拍手が広がっていき、やがて会場は万雷の拍手につつまれた。

「皆さん！この目出度き日を盛大に祝いましょう……ダイ君、君も、君の仲間達も存分に楽しんでいってくれ」

「はい！」

ようやく笑顔を見せてくれた。

この後、でろりん達はロモスの面子を汚したとして暫くの間無料奉仕が命じられ、ダイは次の日の朝帰っていった。

でろりんには悪い事をしたと思うが、ダイ君達と友達になれたのは嬉しかった。

彼とはまた会える、それも割と早く。そんな気がした。

偽勇者事件（後書き）

それぞれの実力を発揮する条件

でろりん・オルテガの覆面とパンツを受け継ぎ、それで生活すること。

ずるぼん・青い上着の下は危ない水着のみ着用、それ以外は禁止。

へろへろ・師匠の女戦士のビキニ鎧の継承、勿論これで生活。

まぞっほ・マトリフにガチンコで勝利。

開戦前夜（前書き）

お待たせいたしました。

開戦前夜

偽勇者事件からしばらくしたある日、デルムリン島で新たな事件が起きていた。

パプニカ王国の王女であり、第一王位継承者であるレオナ姫の暗殺未遂及び事件である。

レオナ姫が毒を患ったり、魔王ハドラーの遺物であるキラーマシンのような強行手段にでるなど、一時は危険な状態に陥った。

だが、勇者見習いダイの額に顕れた謎の紋章の力で悪しき企みは防がれた。

政府高官によって起こされたこの事件は、パプニカ王国の恥部として闇に葬られる事になった。

だが、ダイの額に顕れた紋章やレオナ姫との友誼は、これからの世界に大きな影響を与える事になる。

それを知っている地上の転生者達はそれぞれ動き始めた。

ある者は警備を強化し、ある者は更なる修行に打ち込み、またある者は傍観していた。

そして魔界においても、大魔王バーン率いる地上侵攻軍の最終調整が行われていた。

フレイザードの場合

魔界にある幹部専用訓練所、その中でもフレイザード専用に使われた一室、ここでは氷炎魔人フレイザードが瞑想していた。

彼は一見落ち着いて見えるが、内心は煮えたぎるマグマの様であった。

激しい憎しみと怒り、それこそ今の彼を突き動かす原動力であった。

(許せねえ…許せねえ…！)

彼の心に映る一人の男、パプニカ王国の誇る名高い賢者、大魔法

使いマトリフに比肩すると言われる男。

（カダル！てめえだけは俺がひねり潰してやる！！）

賢王カダル、現代最強の賢者の一人であり、先の大戦でフレイザードを滅ぼしかけた男、フレイザードは彼に対する巨大な復讐心を糧として、過去に比べて遥かに強大な力を手に入れていた。

「つけえい！！」

目を開けた彼は溜め込んだ魔力を解き放つ。

両手から5本ずつ、計10の魔力弾が放たれ、真っ直ぐに、あるいは大きく曲がりながら的に当たっていった。

的の半数は凍てつき半数は爆散している、これが彼の新しい必殺技である。

「魔力の収束と誘導、やれば出来るじゃねえか、ミストバーンには感謝しねえとな」

かつての必殺技である五指爆炎弾を改良し、更なる魔力の収束と高い誘導性能を獲得した、また、収束技術を会得したことで、マヒヤドも五指爆炎弾同様に放つ五指氷爆弾をも放てるようになった。

元々の五指爆炎弾にも備わっていた能力であるが、ミストバーンのちよつとしたアドバースにより劇的な進化を遂げる事に成功した。彼は今の出来に満足しながら、奥の手の発動に入る。

彼が合わせた両手から魔力がスパークし始め、全てを消滅させる魔力が生み出されていく。

もし彼が人間ならば、額に大量の汗が出ていたであろう、それほどまでの集中力だった。

「極大消滅呪文！！」

放たれた光の矢は真っ直ぐに的に向かって行き、的にあたると跳ね返ってくる、それを再びメドローアで消滅させ一息ついた。

（これなら奴を、カダルの野郎をぶち殺せる！）

と、そこで熱くなりすぎたのを感じ、胸のメダルをいじって落ちて着く。

魔界のレジエンドアイドルであり、彼も大ファンであるスイカの

サイン会を思い出す。

「魔法使いは心はホットに、頭はクールに」

まさに氷炎魔人である彼に送る言葉だと彼は感じていた、だから復讐心を燃やし、頭は冷静にカダル殺害を計画しつづける。

(もうすぐだ、もうすぐ殺しに行つてやるぜ！)

訓練を終えた彼は、新作CDを聞くために自室に戻るのだった。

クロコダインの場合

彼は悩んでいた。

彼は自分を引き上げてくれたハドラーやバーンに深い恩義を感じ、忠誠を誓っていた。

だが、彼の心は迷いに迷っていた。

武人としてはハドラーは尊敬できる、だが、肝心のバーンへは余り忠誠を抱けていなかった。

バーンは幹部であるクロコダイン達にすら地上侵攻の目的を話さず、常に布の向こうから話し掛けてきて姿を表さない。

彼は魔界出身ではなく、地上出身である事もそれに拍車をかけていた。

戦いにおいて力を振るうのは武人の本懐である、だが、地上が壊滅してしまうのは避けたい。

それに彼は人間に憧れていた。

パパスとマーサの愛はまぶしかったし、彼女の目は人間を信じても良いかと思える目をしていた。

パパスを戦場で討つことに躊躇いはない…が、マーサを悲しませる事には躊躇いを覚えてしまう。

彼は迷いを振り切る為にも無心で闘気を高めていく。

(ミストバーンが言っていたな、俺の痛恨撃の改良点を)

全身の闘気を両手に集め、それをさらに高めて解き放つ！

「獣王激烈掌！！」

左腕を関節ごと右回転！ 右腕を肘の関節ごと左回転！そのふた

つの拳の間に生じる真空状態の圧倒的破壊空間はまさに歯車の砂嵐の小宇宙！ 海を引き裂き、二つの鬨気の奔流は荒れ狂った。

「まあ、負けっぱなしもじゃくに触るしな」

ひとまず悩みは置いておく事にした。

好敵手に負け越すのは避けたいクロコダインであった。

ヒュンケルの場合

視点変更・魔剣士ヒュンケル

俺は何をしているんだろうか？

今俺の部屋はカオスに包まれている。

突然現れたスイカがトレーニング中のフレイザード達以外の軍団長等を巻き込み、俺の部屋で宴会を開いている。

後で間違い無くフレイザードにグチグチ言われる、だがトレーニング中のあいつが悪い。

「なーなー、やっぱりオレの所に来ないか？切り取った領土の半分やるからさー」

宴もたけなわ、酔っ払いどもが部屋中でさわいでうざったい、なかでも竜王は酔う度に誘ってくる。

出世欲が強いなら大魔王バーンの義娘の彼女についていくだろうが、俺はアバンとその弟子達への復讐が目的だから興味がない。

ここまで酔ってるなら無視してもすぐに寝るから放っておく。

「いいかあヒュンケル、お前はあ未熟うなんだからなああ」

部屋の隅ではバルバトスが説教をしている、だが、それは俺ではない、魔剣だ。

あんな図体で訓練中は悪魔みたいな奴だが、意外と紳士的で周りの面倒をよく見ている。

ただ、荒々しい動きの中に父さんを見てしまうのは名前が似ているせいだろうか、…そのせいで嫌いではないが苦手だ。

ミストバーンは淡々と酒を飲み続けている、相変わらず無口なやつだ。

助けられたり稽古をつけて貰ったりと恩はあるが、無口すぎて何を考えているかは全くわからない。

部屋の中央ではアルトリアとスイカが酒を飲んでいる。

正座したアルトリアの膝の上にスイカが座り、まるで仲の良い姉妹みたいに見える…が、その酒量は桁外れだ。

信者であるハドラーがコップに酒を注ぎ続け、ヒルドが料理を運び続け、スイカは飲み続け、アルトリアはつまみを食べ続ける。

鼻の下を伸ばしたハドラーに常の威厳はなく、酒瓶と皿は何時までも増えていく。

アルトリアは凄まじいとしか言いようのない剣士だ、小柄な体格だがパワー、スピード、技の切れ、全てにおいて俺すら上回る。

彼女の剣技はなぜかアバン流に通じる所が多く、彼女を越えることが目標の一つである。

ヒルドはそんなアルトリアを鍛える師範で師匠ではないらしいが、アルトリアより強いらしい。

俺は戦っている所を見たことは無いが、その様はまるで踊りのようだと聞いている。

そしてスイカ、彼女は魔界のアイドルらしいが、割と頻繁に司令部に顔をだして居るために各軍団長とは顔見知りだ。

なぜか気に入られたらしくたまにこうやって宴会に巻き込まれてしまうが、それを楽しんでいる自分が確かに存在している。

まあ俺はハドラーやフレイザードみたいに信者やファンといったわけではない、だが小さいくせに居るだけでその場の雰囲気掴むのは流石と言うべきか。

ちなみにファンとしての順位を表すと、ハドラー＝フレイザード＞越えられない壁＞アルトリア 竜王＞俺＞クロコダイン、といったところか。

ハーゴンはよくわからない。

…今日大魔王バーンから宣言があった。

遂に地上侵攻が始まるのだ。

明日の朝一番で地上の第一鬼眼城に移り、以後はそこを本司令部にするらしい。

ただ一つ不満がある。

アバン討伐が俺ではなくハドラーと言うことだ。

確かにハドラーは奴に殺されて恨み骨髓だろうが、俺とて奴に対する恨みがある。

すでに決まった事だから仕方がないが、せめて弟子達は俺が仕留めたいものだ。

奴はロモスに居たらしいが、弟子と二人で船に乗った後行方がわからないそうだ。

だが捕捉したら直ぐにでもハドラーが向かう事になっている。

…ハドラーには悪いが討伐失敗を望んでしまう俺であった。

勇者の家庭教師

「第一城壁守備隊、全滅！」

「航空巡洋艦カーバンクル撃沈！我が軍の艦艇68パーセントまで低下しました！」

「第2城壁突破されました！大魔王軍、いまだ突破速度が落ちません！！！」

「予備の5・6戦隊を撤退支援に向かわせろ！第3城壁もそう長くはもたん、2・3・4城壁は放棄し、第5城壁に戦力を集めるぞ！地獄の壁にも伝える！」

「了解！」

リンガイア国境近くにある要衝を守備する為に、長き渡り増改築を続けて5枚の城壁を持つ大城塞と化した拠点。

かつてはハドラーの大軍の猛攻に耐え切り、さらに現代改修を施し魔導通信機や最新装備である魔導機甲^{ウァンツァー}、さらには火炮を多数揃え、独自の航空艦隊の傘に守られた難攻不落の大要塞として君臨していた。

だが、作戦司令部に飛び込んでくる報告には凶報しかなく、今や落城は時間の問題となりつつあった。

（…大魔王軍、まさかこれほどまてとは…後は地獄の壁に期待するしかない）

将軍である彼の指揮に狂いは無かった、彼は持てる戦力を有効に使い潰しながら懸命な防戦を続け、上手く攻めてをいなしてきた。

最初の数日は雑多な魔物が攻め立ててきたが、ヴァンツァーを装備した騎士団や釣瓶打ちで降り注ぐ砲弾や飛空挺の防御の前に虚しく屍を晒すだけであった。

刻まれ続ける不落の栄光に兵士達の士気も高まり、王都からの援軍があと3日で到着する事もあり要塞内では楽観ムードが漂っていた。

(あいつ等だ、あいつ等が来なければ持ちこたえられていた！)

それが現れたのは今日の朝、僅か2時間前の話であった。

その軍勢は今までの雑多な魔物の軍勢ではなかった。

様々な見たことの無い種族で構成されていたが、騎馬の変わりと思われる鳥を除けばサイズは違えど皆人型で、各員が揃いの白い鎧を見にまとい、統制の取れた見事な陣形で攻撃のタイミングを計っていた。

そして、その先頭には白い軍勢に一際映える、銀と青の鎧の女騎士が黄金に輝く剣を振りかざしていた。

そして終局は始まった。

女騎士の放った極光は4枚の城壁を貫き通し、第5城壁にも深い痛手を受けた。

指揮が乱れたその後、連中の一部がいきなり高速で飛翔し、彼等の放つ光弾にまず火砲陣地が壊滅させられてしまった。

勿論魔法や弓矢による迎撃が必死に行われたが、大半が何でもないうようにかわされ、残りの連中も盾で防いでしまった。

その後はまるで雪崩のようだった。

飛空挺は纏わりつく鳥騎兵や飛行してる奴らに翻弄され、地上は易々とヴァンツァーすら屠られていき、今は地獄の壁が支えているが何時まで支えられるかは解らなかった。

「第64機甲騎士団：地獄の壁全滅！！地獄の壁が突破されました
！……！」

「なんだと……！」

其処に最悪の知らせが入る、よりにもよつて……であった。

「致し方ない……。遺憾ながら要塞を破棄する！30歳以下の者を撤退させる、残りはすまんが私と殿軍とする！副司令、若い連中を頼む」

「閣下……、御武運を」

先頭で斬り込み、赤いヴァンツァー騎士団：地獄の壁を斬り伏せたアルトリアは不意に抵抗が少なくなつたのを敏感に感じていた。

「椛、敵が撤退に移ります。上空の文と後方の藍に追撃するように伝えてください」

「殿下はいかがされますか？」

「私はこのまま要塞を占拠します。ほら、急いでください」

伝令の白狼天狗が飛び立ったのを確認した後、アルトリアは再び奥を目指して歩を進めた。

（初戦は完勝、要塞国家リンガイアでも一二を争う要塞をおとしたか、地上侵攻の幸先は良さそうだな）

（宣戦布告後の最初の戦果としてはまずまずといったところか。他の連中：特に竜王はムチャをしなければ良いが）

考えながらも彼女の剣ばき、足運びには一点の狂いも無く、確実に奥へと進んでいた。そこには最早彼女を止める者など存在していなかった。

大魔王の宣戦布告から一週間、既に各地で戦火はあがり、地上は再び絶望に包まれかけていた。

だが、地上に希望が残っていない訳では無い、希望の種は世界中で芽吹き始めていた。

これは、幾多の英雄の中でも最も輝いた者達の話である。

怪物島デルムリン島に一艘の小舟が向かっていた。

船上には二つの影、強大な力を持つ魔王ハドラーを討伐した勇者アバンと、その愛弟子である魔法使いポップである。

全国を巡り、才能のある者を育てて次代の勇者達の基礎を作り上げたアバンであったが、ある日ロモス、パプニカ両王家から依頼があり、そのためにデルムリン島を目指していたのだ。

あのパスの目にとまり、さらにはレオナ姫暗殺を阻止した子供、勇者の原石である彼、ダイを鍛えて欲しいとの依頼だった。

アバン自身も、確かな眼力を持つ彼等がそれほどに期待するダイに大きく興味を引かれており、快諾していた。

ところで何故各国があまり揉めずに対魔界同盟を組み、復興と軍備拡大を急いだのか、それには理由があった。

王の一部が転生者で大魔王の脅威を知っていたり、対魔界同盟設立などを目指していたが、そうでない王にはアルキードの魔族から伝わったため、魔界が有ること自体は知識として知っていても、その脅威をあまり知らなかった。

彼等にすればハドラーは、魔界の中でも相当な権力と実力を持っていただろう、ならば魔界はなかなか攻めて来ないだろうし脅威はほぼ去った、だから軍事より復興に予算を回したい、くらいにしか考えていなかったのだ。

転生者は王達を何とか誘導しようとしていたが、危機を伝える決定的な資料もなく、会議は暗礁に乗り上げるかと思えた。

だが、一つの資料がその空気を打ち破り、各国が協力しての急速な復興と軍備拡大が決定した。

『アバンレポート』。

それはハドラーを討伐したアバンが記述した報告書であり、ハドラーの居室から押収した様々な資料とそれに関してのアバンの意見を纏めたモノであった。ハドラーの日記等から調べた結果、彼は個人的な理由から、たった二人で地上侵略を目指したのであり、魔界の有力者等ではなかったと記されていた。

さらには大体の魔界の情勢も書いてあり、これから10〜20年前後で彼などは足元にも及ばない冥竜王ヴェルザーなる者の侵略の可能性をも記されていた。

その非常事態を認識した国王達は力を合わせて地上を守る決意をし、会議は様々な協力体制を構築して終わりを迎えた。

レポートを書いたアバン自身はカール王国だけではなく、世界各地を巡り弟子を育てつつも、パパス王に剣術指南を受けたり、名剣を求めて魔族の名工ロン・ベルクを訪ねて意気投合して様々な知識を交換したり、彼と修行をしたりして自らも鍛え続けていた。

ロンと出会った後、ランカークスにて武器屋の息子ポップを弟子

にした。

大器を彼に見たアバンはじつくり育てていった、ポップは修行を嫌がることもあったが、アバンは彼が隠れて修行をしていることを知っていた為、口では注意しながらも彼の成長を楽しく見守っていた。

デルムリン島までの航海は何事も無かったが、島が見えたその時、世界に異変が起きた。

「先生!!!」

「わかっていきますポップ、急ぎなさい」

突然世界に満ちた悪意の魔力を彼は知っていた。

この魔力により心優しいデルムリン島の魔物が暴れ出すのは明白であった。

やがて海岸が見えた時、彼の目には島から少年を逃がそうとする鬼面導師と迫り来る魔物の群れ、そして抵抗する少年の姿であった。

「ダイ、早く行ってくれえっ!!!」

「じいちゃん!!!」

少年：ダイが逡巡している間にも魔物達は距離をつめ、今にも襲いかからんとしていた。

「急げっ！ダイ!!!」

実の我が子のように愛情を注ぎ、育て上げたダイ。

ブラスが彼を守るには、今にも傷つけてしまいそうな自分から遠ざけるしか方法がなかった。

だが、ダイはそれを否定した。

「いやだっ!!!」

「ダイツ!!!、何を言うか!?!」

ブラスは見誤っていた、彼の心の強さと優しさを。

「じいちゃんやみんなを置いて俺一人だけ逃げるなんて出来ない! そんなの勇者のする事じゃないよ!!!」

ブラスは今まで小さな子供としか見ていなかったダイが、なりは

小さくても立派な勇者になりつつ有るのを感じていた。

「…ダイ…!!」

そして、救世主は唐突に現れた。

「その通り…、良いことを言いますね君は!!…ダイ君」

眼鏡をかけた男は咳払いをしながら小舟から降り立った。

「だ、だれ?なんで俺の名前を…」

当然の疑問だが、彼はあえて聞き流した。

「まあ、この場は私にまかせて下さい」

言つが早いか彼は奇声を上げ、鞘を付けたままの剣で線を引きながら駆け出した。

ダイが止めようと声を上げかけたが、ポップはそれをやんわり止めた。

奇声を上げ、魔物を蹴散らしながら島を駆け巡ったアバンは浜に戻ってきた。

軽く息をつきながらも仕上げに入った。

「邪悪なる威力よ、退け」

彼は右手に魔力を集め、解き放つ。

「マホカトール!!」

途端に島に満ちていた邪悪な魔力ははじき出され、魔物達は理性を取り戻していった。

「うっ…、こ、これは…奇跡か!?!」

それはまさに奇跡といっても過言ではない、これほど大規模な魔力行使…しかも半永久的な持続力を持つ…が出来るものなど聞いた事もなかった。

「あなたは一体…」

「これは申し遅れました、私こーゆー者でございます」

彼が出した巻物には勇者育成だの何だのといろいろ書いてあった。

「…はあっ!?!」

この反応も宜なるかなである。

「アバン・デ・ジュニアル?世…ま、ひらたく言えば家庭教師で

すな

「家庭教師イ!?!」

その驚愕の声は島中に響いたとゆづ。

ハドラー出陣

大魔王バーンからの宣戦布告から僅か数日、だがその数日は人類にとつて最悪の数日であった。

強襲を仕掛ける大魔王軍に各国は敗戦を重ね、国によっては致命的な損害を被っていた。

被害が大きかった国は、復讐に燃える団長が率いる不死騎団と氷炎魔団の猛攻を受けているパプニカ王国、竜王の猪突な所を上手く補佐するハーゴンコンビの、超竜軍団と妖魔軍団から攻撃されているカール王国。

そして、魔界最強にして大魔王バーンの切り札である近衛軍団の攻撃を受けるリンガイア王国である。

各国もただやられるだけでなく、ヴァンツァーや飛空挺、大砲といった新兵器を使い少くない出血を大魔王軍に強いていた。

だが、上記二国は国土の3割、リンガイアにいたっては5割の国土とかの国最強の騎士団である地獄の壁をも損失してしまっていた。

これに対し眼中になく攻撃されていないテランを除く、アルキード、ロモス、そしてベンガーナは良く防ぎ、逆に押し返す事もあった。

ロモス王パパスは獣王クロコダインと幾度と無く戦い、そして度々これを打ち破った。

クロコダインも新たな斧を手にした事により、以前は出来なかった罅迫り合いも出来るようになり、獣王激烈掌を体得するなど遙かにパワーアップしたものの、戦士として最強であるパパスには後一歩及ばなかった。

アルキード王国にはハドラー親衛軍が攻撃したものの、新たに即位した女王ソアラの夫であり、同国の騎士団長に就任したバランと、彼の腹心である竜騎衆にあっけなく蹴散らされ、再度の攻撃に二の足を踏んでいた。

ベンガーナ王国を狙う魔影軍団と、それを阻止せんとする王国軍は激戦を重ねていた。

魔影軍団はクリスタルによる結界により弱体化しているものの、その物量を生かした猛攻によりベンガーナに損害を与えていた。

だが、世界最大の兵器保有数を誇り、さらに某米の国のような高い生産力を持つベンガーナの火力は伊達ではなく、魔影軍団はその防衛線を抜く事は出来なかった。

このように一部の国は善戦しているが、全体的には地上は押されていた。

特に余力の有るベンガーナやアルキードの動向に、世界の注目が集まっていた。

「しかし大魔王バーン、予想を遥かに超えていますね」

「本当ですよ、アバンレポートで転生者がいるのは解っていました
が、まさかセイバーまでいるなんて」

ベンガーナの国王の執務室、そこではホットラインを通じて前アルキード王と話すクルテマツカの姿があった。

「怪しいのは伊吹萃香…かなあ」

アバンレポートに書かれていたハドラーの部屋の様子、それはかなりハードなオタクの部屋だった。

ポスター、フィギュア、タオル、抱き枕…、珍しい所では記念切手や記念硬貨など、ありとあらゆるグッズがそろった部屋は、有る意味圧巻であった。

「地上侵略のきっかけになった程の人気、確かに可愛いけど元の性格的に有り得ない」

「後はセイバーも怪しいですね、潔癖な彼女が人類殲滅はしないでしょっ」

各国は互いに情報を共有し、様々な情報が飛び交っている。その中でも転生者である二人は頻繁に情報を交換していた。

「まあ今は対策も出来ませんし、ここまでにしましよう。ある程度実力や能力がわかるだけでましですよ」

「確かに。それに萃香はアイドルらしいですから前線には出てこない可能性が高いですね」

「…所でリングエアにですが、バラン送れます？」

「ベンガーナでなんとかありませんか？」

「グラフも体調を崩してますし、バツ達もこちらで手一杯です。下手に送ってもセイバー無双が始まりますよ」

「確かに…、ではバランと竜騎衆でいつて見ましよう」

「ではカール救援は我が国で受け持ちます」

そこでクルテマツカは一旦話を止め、新たな疑問をぶつけた。

「所でお孫さん…レイア姫は転生者と確認後出来ましたか？」

「間違いないですね、机にあらすじが隠してありました、黒ですよ。そのうち話してみようかと思ってます」

その後も種々雑多な言葉が交わされ、様々な対応策が打ち出された。

前国王といってもアークは様々な助言をソアラにしており、若き女王を良く支えていたのだ。

リンガイアの地にて竜の騎士があいまみえる、その瞬間は刻一刻と迫っていた。

一方そのころ…。

「申し訳御座いませんでしたバーン様！！ 次こそは必ず軍功を立ててみせます！！」

鬼眼城の玉座の間、ここでは魔軍総司令であるハドラーが芸術的なまでに洗練されたDOGGEZAをしていた。

本来ならばアルキードは捨て置き、クロコダインと共同してロモスを攻める筈であったが、大戦果を上げる近衛軍に触発されて単独行動によるアルキード攻撃をしまったのだ。

だが攻撃は失敗した上に自軍に5割を超える大損害がでて、クロコダインに相談無く軍を進めていたためにロモスでの侵略作戦も潰えた。

「…良い、ハドラー。確かにロモス方面は不利になった、だが、竜の騎士…それもヴェルザーを討つたと思われる奴の実力の一端が探れたのだ。それでよしとしておこう」

「ははあ〜」

赦されたハドラーが自分の席に戻った後、ミストバーンが口を開いた。

「ではこれより地上侵略後の最初の評定を行う」

円卓の中心に据え付けられた映像スフィアに各地の戦況が移し出された。

「これまでの軍功、一位はアルトリア殿下、この功績を称えてバーン様より名鳥スタリオンが下賜されます」

アルトリアが起立し、バーンに礼をして着席する。

やはり僅か数日で城塞国家としたリンガイアの半分を切り取り、さらには音に聞く地獄の壁を打ち破ったのは大きな功績とされた。

名鳥スタリオンの祖先はかの火竜サラマンドル討伐の際にバーンが騎乗したチヨコボの血統で、今代でも屈指の名鳥と知られていた。

「第二位はフレイザード、及びヒュンケル。バーン様より金子三万Gが下賜される」

フレイザードとヒュンケルも立ち上がり、礼を取った後着席する。

「その他の方々はより一層の努力をするように。特にクロコダインは相手が相手故に仕方無い部分もあるが、決定的な戦果をバーン様は欲しておられる事を忘れるな」

呼ばれなかったもの達は着席したまま礼をとった。

有る意味侮辱されたクロコダインのミストバーンを見る目は自然

と敵しかった。

(己も戦果を上げてない癖によくほざく！)

「次の議題に移りますが…」「いや、これは余から話そう」

ミストバーンの言葉を切り、バーン直々に告げる。

「勇者アバンが見つかった、ハドラーよ、貴様はアバンを討てるか？」

アバンの名がたとたん室内に緊張が走った。

かつてハドラーを討ち果たした英雄で、間違い無く地上で5指に入る強者である彼は、大魔王軍で最も危険視されている人物の一人である。

だが――。

「バーン様よりいただいた新たな肉体、更なる魔力、何をとっても負ける要素はございません！！」

ハドラーに迷いはなかった。

大きな失態を犯した彼はバーンに赦されてはいたが、総司令としての面子と誇りが彼を突き動かしていた。

「ならば行け！　そしてアバンに引導を渡してやるがいい」

「この命に変えましても、必ずや奴を討ち果たしてご覧に入れます
！！」

ハドラーはマントを翻して部屋を立ち去った。

一日千秋の思いで待ちわびた時が遂にくるのだ。

目標はデルムリン島、そこが、勇者と元魔王の対決の場となるの
だった。

ぶっかり合っ意地と誇り(前書き)

難産でした。

ぶつかり合う意地と誇り

城塞国家リングエア、かつてのハドラーとの戦争中に領土全域を守り抜いた難攻不落の国。

だがその名声は今まさに失われようとしていた。

リングエアは大魔王軍との戦争でも堅固な要塞群にこもり、最新兵器群をもって痛打を与えんとしていた。

並みの兵士ですら下位のドラゴンとまともにやり合える戦闘力を与える魔導鎧ヴァンツァー、遠距離から強力な砲撃を食らわせる力ノン砲、その力ノン砲を頭の上から釣瓶打ちにできる空中艦隊。

兵士一人一人の実力はカールに一步劣り、兵器保有数でベンガーナにかなわず。

だがそれでも高い軍事力を誇り、圧倒的と思われていた防御力はまさに鉄壁であった。

だが、頼みの要塞群は悉くを打ち破られ、国土の半分は切り取られ、すでに大魔王軍は王都から指呼の距離まで進んでいた。

「避難船団はどうなっている」

軍議の間では年老いた国王と、老将老臣が会議を開いていた。

皆一様に表情は浮かばれない。

後一日もすれば強力な敵が来襲するのに、それに対して有効な手段が見つからなかったからだ。

「現在までに6割の民が脱出に成功しております、若い家族から順に避難は進んでいます、あと2日…いや一日半有れば大半の民は脱出できます」

「ただ…年配の者の中には梃子でも動かめと言う者が居り、それに

付き添う者もおりますので、二割程の民が残る模様です」

破竹の勢いで迫る大魔王軍に対してリンガイア王は遷都を決断、すでに多くの民が国を離れマルノーラ大陸…保護領であった元オーザムに疎開していた。

彼等を護衛・輸送の為に海軍と空軍は全力で往復を続けており今王都を守る傘はなく、新たな旗印となるべく送り出した王子と共に軍団主力も脱出していた。

今此処に残っている者は足止めとして残った者や後進に後を託した者、ここを離れたがらぬ者達ばかりであった。

「援軍は…間に合わなんだか」

この絶望的な状況の中、援軍としてアルキード王国の女王夫君であり、知る人ぞ知る最強者である《竜の騎士》 balan が向かったが、未だに王都にたどり着けていなかった。

「奴さえ居なければこのような不様を晒さずにおけましたものを…無念で御座います」

再び沈黙が部屋に満ちる。

難攻不落の城塞をこうも容易く落とされた理由はいくつかある。

まずは単純に兵の質の差、ハドラー軍のような雑多な魔物群ではなく、多少差異はあるが人型でかつ強力な者ばかりであった。

そして、その中でも羽の生えている者や一部の者が空を飛び回り、城壁の奥の柔らかい砲兵等が潰されたこと。

鳥に乗った騎兵隊は大地だけでなく空を飛ぶ者や城壁を跳び超える者などが多かった事。

そして軍団長である少女…少なくとも見た目は…の光刃による城壁破壊。

城壁に拠って戦っていれば、逆に寸断されて各個撃破される始末であった。

「陛下、城下の仕掛けは済みました。我らは予定通り城外で迎え撃ちます」

「うむ、…不甲斐ない王に付き合わせて済まなんだな」

「なんの、我が方は殿軍だけで5万を数えます！ 敵軍は分散して2万を切ってますから勝機は御座います！」

そういつて老将はニヤリと笑う。

「あと少し時間を稼げば我らの戦略的勝利でございます、陛下こそ脱出されずによろしいのですかな？」

「くどいぞ、僕の意志は変わらん。この頸にも時間を稼ぐ価値はある」

そして王は周囲に残る忠臣達に最後になるであろう言葉をかける。

「皆よくぞここまで僕を、この国を支えてくれた！！ 最後の宴会を広間で行う！！ 今宵は無礼講である、決戦に備えて良く飲み、良く騒いでくれ！！」

そして彼等は広間に向かう、ただ、明日の勝利を望ながら。

そして迎えた翌日、進軍するアルトリアの眼前に堂々たる陣形を組んだ軍団が立ちふさがった。

「殿下、やはり兵の集結を待った方がよろしいのでは？ あちらは死兵、マトモにやり合つのは危険です」

「いや、このまま向かうぞ、時間をかけるといやな感じがする」

「…また直感ですか？」

「ああ」

進言をバツサリ切り捨てられて藍は溜め息を零す。

主であり、帝国の王太子でもあるアルトリアの直感は鋭い、それはあたかも予知に匹敵する脅威の直感力である。

参謀としては少しアレだが、彼女の勘は無視するには余りにも正確過ぎた。

「…敵は騎士団を先頭に突撃隊形をとっております、速戦ならば守戦ではなく、こちらにも突撃をかけるべきかと進言します」

藍の進言にアルトリアは頷き、諸將に作戦を告げる。

「私を先頭に偃月を敷く。右翼は文、左翼は藍に任せる。後方はアジドマルジドに任せる。…敵ながら見事な武者ぶりだ、だからこそ、その誇り事打ち砕くぞ！」

「…イエスマム！！！！」

「掛かれ！！ 小娘の頸を取れば我らの勝利ぞ！！」

「椀、喇叭を。…全軍に我に続けと」

両軍が突撃を開始し、先陣がぶつかり合う。

その瞬間、アルトリアから放たれた光刃は敵を貫き通し、本陣を破壊していた。

だがリンガイア軍は止まらない、彼らが一秒保たせればその分民が、家族が、仲間が救えるのだ。

もとより命令は一つ、軍団長らしい小娘を討て…だ。

だから彼等は愚直に突撃し続ける、例え、その先が明確な死であったとしても。

だが、彼等の命をいくら支払っても大魔王軍は止まらず、遂に突破されてしまう。」

「椀、藍に伝達、私は王の頸を穫りに行く、後は任せると伝えてくれ」

「はい！」

この時点でもまだアルトリアの感は警鐘を鳴らし続けていた、その直感に従い供回りのみをつれて彼女は一直線に王城に駆けていく。

「ここは通さんぞ！！」

「殿下、此処は我らが抑えます！」

「頼む！」

守兵が迫るのを供回りに任せ、遂に彼女は玉座にたどり着いた。

「貴方が国王……だな」

「如何にも、儂がリングイア王エドワードだ」

王は玉座に座り、彼女を待ち受けていた。死地でありながらその姿に脅えはなく、揺るがぬ強い覇気を纏っていた。

「儂の頸なら貴様にくれてやる、だが、避難民は見逃してやってはくれぬか？」

アルトリアは首を横に振る。

「気持ちは分かる、だが無理だ、すでに追撃に移っている頃合いだ、

「今から命じても間に合わない」

その言葉にエドワードが動こうとしたとき、乱入する者がいた。壁を貫き、一条の光線がアルトリアに襲いかかった。

辛うじてその一撃を避けたアルトリアの前に、壁を破壊して影が降り立った。

「エドワード陛下、御無事ですか？」

《彼》の登場にアルトリアの顔がしかめられる。

いずれは決着をつけねばならないとは言え、今出て来られれば時間を与えてしまう。

「《竜の騎士》バルン…、来る前に終わらせたかったが…」

《竜の騎士》バルン、正当な竜の騎士にして冥竜王ヴェルザーを討った男。

負ける気は無いが、かなり手こずるのは疑いようのない相手だった。

「敵軍は我が竜騎衆が足止めをします、早くお逃げください」

「いや、バルン殿、お気持ちは嬉しいがそれには及ばん、儂より脱出する民達を守ってやってくれ」

だが、エドワードは命が助かる最後のチャンス为民へと譲った。

バルンは驚き国王を見るが、覚悟を決めた表情を見て諦めた。

「…ならば脱出船の護衛に移ります、…御武運を」

「すまん、我が民を頼む」

しばし逡巡したものの、バルンは部屋を飛び出していった、最早追撃をかけても損害だけが増えていくだけだろう。

(どちらにしても早く済ませるだけだ)

そうアルトリアが剣を構え直した時、機先を制する為かエドワードから話しかけてきた。

「待たせたな…、では儂と共に死んで貰うぞ！！！！！！！！」
「ツツツ！！！！！！！！」

瞬間、アルトリアはバルンの入ってきた穴から飛び出した。

飛行呪文で飛ぶ彼女の足元は城が各所で爆発を繰り返し、崩落していく。

それだけではない、城下街の各所も爆発、あるいは炎上し、街全体が崩壊していく。

近衛の一部が侵入していたらしく、退却をする姿が見えたが、助からない部隊も多いだろう。

「してやられたな」

アルトリアは腰の道具袋から発光弾を使い、全軍に撤退と集結告げる。追撃にでた連中も戻さねばなるまい、これ以上の被害は防がなければならない。

「杖を探して藍と連絡を取らねばな」

結局追撃は諦めた、崩れた街から部下を救助したりリングア全士の掌握がまだ終わっていないからだ。

…リングアの本土は遂に征服された。だが、この日に近衛軍は

打撃を受け追撃が出来なかった。

生き延びた者達は復讐に燃え、さらに激しい抵抗を行うだろう。
歴史のページは捲られ、戦いは益々激しくなっていく。

一方、辺境の島デルムリン島でも宿命の戦いが起きようとしていた。

「やはり復活していたか！ 魔王ハドラー！」

「久し振りだな…勇者アバン！！」

かつて打倒した者と打倒された者、小さな島で起きた決戦は世界に大きな影響を与える事になるのであった。

ぶつかり合う意地と誇り（後書き）

《竜の騎士》 バラン

LV75/??/?

身長・それなり

体重・ほどほど

正当な竜の騎士、原作と違いアルキードで不幸にならなかったためにかなり性格が丸い、勿論敵には容赦無く襲う。

些細な事からしょっちゅうポリーと（懲りずに）全力バトルを繰り広げて居るためにかなり強い。

娘の婿はラーハルト一択だが、反対するポリーとはやはりバトルしている。

宿命の対決

視点・???

俺の目の前で先生との別れの瞬間が、繰り返したくなかった場面が繰り返されてしまった。

この先再び会えるとはいっても前とは色々違うこの世界、本当に先生と再開出来るかはわからない、だから今度こそ先生を助けようと魔法と一緒に闘気法も習得し、ハドラーを倒せるまでになった。ハズだった。

だけど結局俺達は巻きぞえを防ぐためにアストロンで固められ、こうして先生を失う所を見守る事しか出来ない。

(ダイ…ポップ…あとは頼みますよ…)

「やめろッ！ やめるんだあああああああ！！！」

「メ・ガ・ン・テ！！！」

先生の生命力が純粋なエネルギーと化し、ハドラーと先生は光の柱の中に消えた。

だが俺は知っている、ハドラーも、アバン先生もまだ生きている事を。

「先生…！！！」

「畜生…！！！」

なんでこんな事になったんだろうか？ 俺の努力が足りなかった？ それとも運命は変えられないとでも言うのだろうか？

「先生が生命をかけて守ってくれたのに…、なんにも出来なかったなんて…！」

まだ、これからだ。これからやれることは有るはずだ。さし当たっては…。

「かああああー!!!」

なんとかアストロンを解いてハドラーを倒す事か。

瓦礫を押しつけ身を起こしたハドラーは憎しげな目をこちらに向けている、…ここからがダイと俺の戦いの山場であった。

視点変更・三人称

時は少し遡り、ハドラーとアバンが対峙し、お互いにイオラとベギラマを打ち消した少し後に戻る。

ベギラマを食らいハドラーは炎に包まれた。だが、腕を振りするだけで炎はかき消され、無傷なハドラーが現れた。

「この程度の炎でこの俺が倒せると思ったのか…！」

フード付きローブに隠されていた彼の肉体、それはアバンが知るものから更なる進化を遂げていた。

サイズこそ以前から変わらないものの強力な闘気が充満しており、その力強さは以前とは比較にならない。

気になるのは両目を中心にまるで炎のように染まった黒い肌、それがハドラーの顔を更に険しいものとしていた。

「…以前の貴様とは随分違うな、私に負けてそんなに悔しかったのか？」

アバンの挑発にハドラーはにやりと笑い、それに答えた。

「知りたいか…？ 知ればきつと後悔するぞ？ 貴様は相変わらず俺が魔王だと思っっているらしいからな…」

(…！ やはりか…！)

「俺はあるお方の力で再びこの世に蘇ったのだ！ しかも以前より遙かに強靱肉体と強力な暗黒闘気を与えられてなっ…！」

「大魔王バーン…か？」

アバンの声にハドラーは初めて驚愕を浮かべた。

「待て、どこでそれを知った？ あの方の事は魔界の民しか知らないはずだ！？ …まさかッ…！！」

「貴様の部屋を改めさせてもらった、その名前、そして貴様達がなぜ地上侵攻を企んだか、全てを把握させてもらった…！」

ハドラーの表情が絶望と羞恥に彩られる。

「あの部屋にあった物は全て残さず資料とさせてもらった、すでに各国の王達は皆が知っている」

「俺の威厳＼(＾o＾)ノオワタ」

ハドラーはorzと力無く崩れ、溢れていた威厳と威容は崩壊した。

その隙にアバンはエルフの飲み薬を使い、ドラゴラム等で消費した魔力を回復させていた。

「…俺のスイカちゃんフィギュアポスターの人形や絵はどうした？」

「…残念だが私は知らない、戦費回収の為にどこかの王家が回収したとは思っが…」

それを聞いたハドラーは精神の再建を果たしたらしく、ゆっくりと立ち上がる。

「……………ならば今は一時置いておこう、それを取り返すのは貴様を殺してからだ!!」

「来い! ハドラー!! 貴様を再び地獄に叩き落としてやる!!」
勇者と魔軍総司令の剣と爪が交差し、カビベのように押し合いになる。

だが、その交差は一瞬、ハドラーは後ろに飛んだ。

「うおおおお!!!!」

「先生! 俺達もやります!!」

今までハドラーがいた所にメラゾーマの炎が通り過ぎ、よけた所にダイが切りかかる。

「甘い!」

「うわぁ!?!」

だがダイは逆に殴り飛ばされ、ポップ達の近くまで飛んできた。アバンは苦笑しながら弟子達にアストロンをかけた。

「ポップ、ダイ、気持ちは嬉しいですがこれは私の戦いです、貴方達にはまだこの男の相手は早い」

「そんな…! 待つてください先生!」

「俺の体が…!?!」

「ア、アストロン!!」

ダイ達はアストロンにより鋼鉄となり、戦闘から隔離された。

「いいのかアバン？ 弟子達が居れば少しは勝てる可能性があったものを……」

「ええ、貴様ごとき使い魔なんか私一人で十分だからな」

「言ったな……！！ その大口を後悔しながら死ぬが良い！！ イオナズン……！！」

「アバン……ストラッシュ……！！」

ハドラーの爆裂呪文は切り裂かれ、逆にハドラーの胸に大きな傷を付けた。

「ぐぬううう……！！」

「どうしたハドラー？ 見たところ結界を破るためにえらく魔力を使ったみたいだな、えらく弱い魔法だな」

「ほざけええ、確かに魔力は残り少ない、だが素手でも十分貴様を捻り潰せる……！！」

「その慢心が命とりだ……！！」

いきり立って殴りかかるハドラーをいなし、反撃で切り裂いていく。

ハドラーは何度も殴りかかるが、まるで霞を相手にするように捕らえる事ができない。

「何故だ！ パワーもスピードも貴様を遙かに超越している……！！なのに何故当たらない……！！？」

分厚い筋肉の鎧に包まれているから致命傷こそ与えられていない物の、ハドラーの肉体には大小様々な傷がついている。

対するアバンはイオナズンの爆風を多少浴びたが、それ以外はまるでダメージを受けていない。

「私はお前との戦いの後、来るべき大魔王との戦いに備えて様々な所で修行をした。そしてブロキーナ殿との修行の時、奥義である無刀陣を超える体術を編み出した！」

「なん…だと…？」

無刀陣、それは闘気を0にする事で相手の攻撃を受け流し、体勢の崩れた敵に致命傷を与える捨て身の奥義、効果は高いが闘気の守りが無いために此方も致命傷を負いかねない技である。

「この弱点を消す為に攻撃的な動の闘気ではなく、守勢に長けた静の闘気を使う事で完成した。相手の攻撃を察知し、それを紙一重でかわして致命傷を与える…名付けて静水陣！」「静水陣!？」

「ハドラー、貴様の激流を制するのは私の静水の剣、もはや貴様に勝ち目は無い!!！」

「ゲヌウ!!！」

ハドラーは迂闊に攻める事は出来なくなった、だが、アバンにとつては勝機である。

「アバンストラッシュユ！」

「ぐわあああ!!！ お、おのれええええ!!!!！」

(す、すげえや先生、あのハドラーが手も足も出ないなんて、これなら先生はメガンテをしなくても済む!!！)

「!!！（そうだ）!!！アバン、貴様は確かに強くなった…、まともによれば俺や大体の軍団長では歯が立たないだろう…！」

「静水陣、恐るべき技よ、だがこうしてしまえば最早恐れるに足りん！！」

「まだだ、まだ終われない！！」

アバンの両手の指がハドラーの頭に刺さり、万力の如き力で押し込まれていく！！

「グッ、まだそんな力が残っていたか！」

「ハドラー…私だけが死ぬわけには行かない…！ お前も一緒に連れて行く…！！！！」

アバンの闘気と生命力が集中し、ハドラーはその呪文の正体を悟った。

「あああッ！！…まさかこの呪文はあッ！！」

(ダイ…ポップ…あとは頼みますよ…)

「やめるッ！ やめるんだああああああ！！」

「メ・ガ・ン・テ！！」

そして場面は冒頭に戻り、ハドラーは瓦礫から立ち上がった。

「し、死ぬかと思った…！ だ、だが後は奴の…弟子を…ガハアッ！？」

しかしハドラーは血を吐き、膝をついてしまう、原作と違い大いにアバンに傷付けられた身体は素手に限界に達しようとしていた。

「お、おのれ…！ アストロンが解けるまで…待たんとは…！！
だが覚えておけアバンの弟子共、…どこに行こうと貴様達は…我等に見つかり師の後を追うことになる…！ 首を洗って待つが良い

…!!!」

そして次の瞬間にはハドラーは消えていた、そこに残った戦いの後が無ければ最初から居なかったかのように。

しばらくしてアストロンが解けた後も、その場には重い沈黙だけが残った。

「俺達…何も…何も出来なかったッ!!」

「畜生ッ!! 畜生ッッッッ!!」

「先生~~~~~!!!!!!!!!」

ただ、慟哭だけが島に響いた。

宿命の対決（後書き）

魔法使いポップ

LV25（現時点で）

身長・並

体重・並

ダイを救えなかった未来からの逆行系転生者、ダイを探し続けたが、旅の途中マアムと結ばれ、子供が産まれた事を気に父の後を継いだ。

その後は幸せに暮らしたが、居なくなったダイや行方不明になったクロコダインやラーハルトの事もあり、常に深い後悔と喪失感とに苛まれ続けた。

特にダイを守れなかった事はトラウマになっており、守りきれない事に酷く怯えている。

転生した後は地道に体と魔力を鍛え、アバンに弟子入りした後は杖術も習い、ハドラー戦に備えていた。

以前と環境がまるで違う事に密かに驚愕している。

転生特典は竜の騎士の血を浴びた状態での転生、実行する条件はバーン戦終了後にダイを行方不明にしない事。

条件が緩いのは転生自体が半ばサービスのため。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6475r/>

目指すは最強の《大魔王》

2011年7月19日00時15分発行